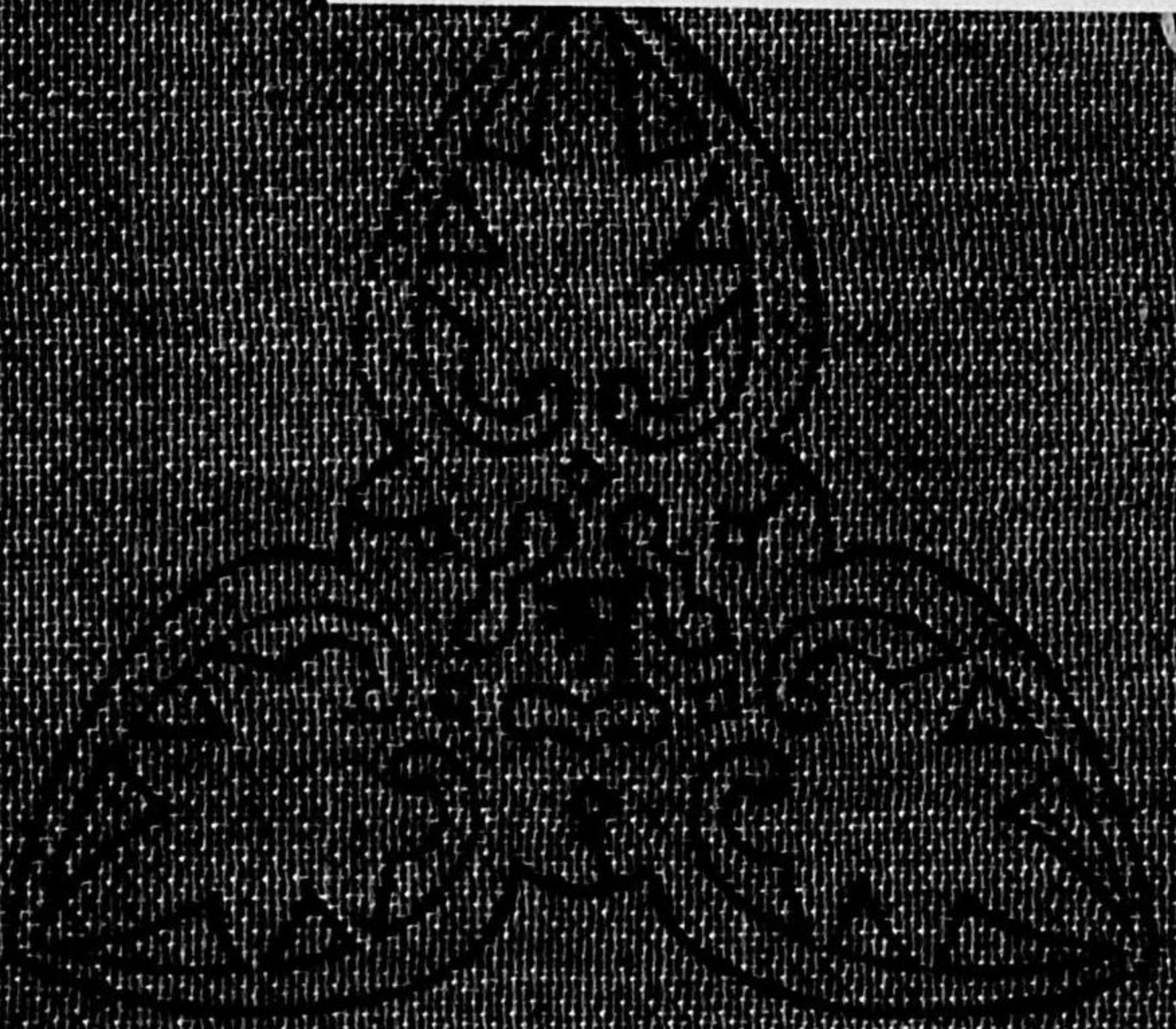


520. 4-A43-3ㄅ

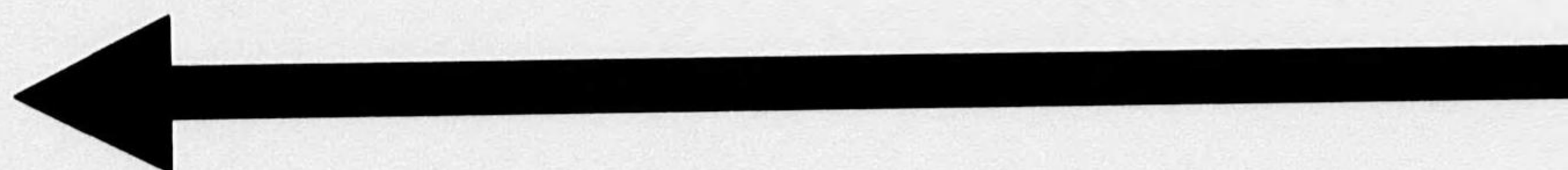


1200500745178

520.4
43
3



始



✓
35

520.4

A43

3

昭和十八年

成

蟲

樓

隨

筆

天

沼

俊

一



序

大分以前の事であつたが、大阪市在住のある建築家が【都人】といふ雑誌を毎月発行してゐた。大概の雑誌は第何巻第何號といつてゐるのに、都人は第何星第何光といふ風になつてゐたので、少しばかり面白いと思つてゐたところ、其友人がある時私に自分の雑誌へ何か書けといった。實は其頃毎週一度は必ず出遇ふ運命の下にあつたので、唯さへ心臓は餘り強くないところへもつて來て、遇ふ度にどうだ未だできないかといふ工合に催促されたので、敬で命に従ひ四五度は何か書いた事があつた。夫が即何れも今でいふ隨筆であつた。其後あちこちの新聞雑誌へ、要求されたま

まに長短いろいろの隨筆なるものを書きだしてから、自然に心臓も強健になり、書けば書けるものだといふ自信もできてきた。

昭和十六年十一月、當時の臼井書房主人、今の一條書房の取締役から、建築に關する隨筆を出して見度いが、既にこの種のもので出版されたのが手許にあるから、夫を読んで見當をつけてはどうかといふ話があった。併しどうも人の書いたものを讀むと、不知不識つい影響を受け、似たものができる様になる虞がなくもない。だから私は主人の厚意を斷り、讀むと自然眞似をする様になるかも知れないから、一層見ない方がよろしい、私は私で自分の思ふ事を勝手に書く、勿論建築を主にはするが、他のものも入れる。夫から相不變圖版が多く入るがよろしいかと念をおしたら、アート紙八枚にしてくれとの事であつた。これはもう二枚増して十枚と

して話はいいたが、勿論何の見當もなく、漫然二枚の増加を申出たに過ぎなかつたから、愈よ書きだしてみると、とても十枚やそこいらで充分の筈はなく、いろいろ考へて凸版とか玻璃版とか挿畫とか、工風をして少しづつごまかし、漸くにして相當の數に糴上げて了つた。ところが圖ができてみると、大概はアート紙へ刷る様に銅版になつてゐたので、今度はうまくやつたと我ながら考へてゐる。私の書くものは、實は圖が豊富に入れなれないものにならない。文句で意志の發表ができなくなると、圖の如しといふ常用手段で切り抜けるのである。

本書にのせた二十三編中、二編を除き他はすべて新に執筆したのである。其一は二條城二の丸御殿欄間の蟠螂で、この隨筆集に登載のつもりで、當時臼井君の關係して居られた雑誌【西日本】の

一月號へかいたのに、すこしばかり手入をしたものであり、其二は【文藝春秋】の昭和十三年九月號の隨筆欄にかいた昆蟲採集漫談で、紙數に制限があり思ふ様に書けなかったから、これは大分に書きたして最後にのせておいた。だから舊稿には違ひないが、新しく書いた様なものである。尙ほもう一つ斷っておくことは、思ひついた儘に書いたもので、別に初めから順序を考へたのではない。だから一つの題目と次のとの間に何の連絡もない。従つて初めから順に讀む必要もない。どこでもすきな所をあけて讀めばよい。先づ此書物の特徴といへば夫位のところで、あとは至極平凡である。

此書名をどうつけたらばいいかにつき、いろいろ考へてみたが、

私は去る大正九年の暮以來、時に「八戸成蟲樓」といふ筆名を用ひてゐる。筆名といふものは大概本姓は其ままにして、名だけかへるものなのに、君のはどうも不都合だ、それは一體何と讀むのか、といった工合によく訊かれたものだ。姓は其儘で名だけかへなければ規則違犯といふ次第でもあるまい。この筆名は偶然つけたのだが、私には大分氣に入つてゐるので、まだかへる氣はない。字の通りに讀めばハチノヘセイチウロウだが、さう讀むのではない、併し私は公開しないから、讀者諸君は勝手に讀んでおけばよろしい。其セイチウロウの書いたものだから、そこで【成蟲樓隨筆】としておいたのである。この種のもを續いてだせば、順に續續等の文字を冠せばそれでよからうと思ふ。

*

*

*

*

*

最後に一つ断っておく事がある。私はいつも縁側の「縁」の字を「椽」とかいてゐる。椽は音テンで樞の事。此字にエンの意味はない。縁のつもりで椽とかくのは間違つてゐるといふ事である。夫はさうに違ひあるまい。併し私は書きくせかも知れないが、木偏でないといふエンの様な気がしないので、いつもの通り此書物でも最初から「椽」とかいておいた。

昭和十八年八月十八日

京都市に
於いて

著者敬白

目次

一、南禪寺方丈椽の欄間	一
二、佛岩攀登記	一七
三、佛岩寶篋印塔	二九
四、多治速比賣神社本殿向拜手挾	五
五、蜂鳥	七
六、とんぼ・やんま・和様肘木・唐様肘木	九
七、虹梁の上の墓股の數	一〇一
八、校正	一三
九、土用殿	二三

一〇、石燈籠見物旅行談の筆記……………	三二
一一、石燈籠に應用された散蓮花……………	一八五
一二、文展の國寶建築……………	一九九
一三、泉北行……………	二〇九
一四、二條城二の丸御殿欄間の蟠螂 <small>附揚羽蝶</small> ……………	二四七
一五、官幣中社嚴嶋神社末社荒胡子神社本殿……………	二七三
一六、圓光寺本堂柱の銘文……………	二八五
一七、朝鮮全北金山寺石塔……………	二九五
一八、朝鮮扶餘の平濟塔系の石塔に就いて……………	三〇三
一九、朝鮮ホテル……………	三三三
二〇、忠靈塔計畫圖……………	三四七
二一、英語唱歌……………	三五三

二二、講演筆記と見學案内……………	三六一
二三、昆蟲採集漫談……………	三九五



南禪寺方丈椽の欄間

南禪寺方丈は大方丈と小方丈とに分れてゐるが、大方丈は天正年間造營の清涼殿を賜はったものだといふ事で、少なくとも二種の案内記にでてゐる。その一を引いてみると

慶長十六年徳川氏の皇居造營に際し、舊清涼殿を賜うたもので（その時の記録は今寺に藏せられて國寶となつてゐる）即ち天正年間の建築である。

といった工合である。此建築は全體としては方丈の形式を備へてはゐるが、普通正面中央には兩折兩開の棧唐戸が吊込んでゐるのに、これにはない。だから正面のところは、先づ他の方丈に於いては見られない形式である。尙ほ正面落椽には勾欄があるが、其飾金具は便化した龍を打出した特殊なものであり、明らかに後補である（一）。

右に記した様に此建築は桃山時代といふ事であり、天正年間のものとは傳はつてゐるが、文獻上からの研究では女院の御所を移建したものといふ事が知れた

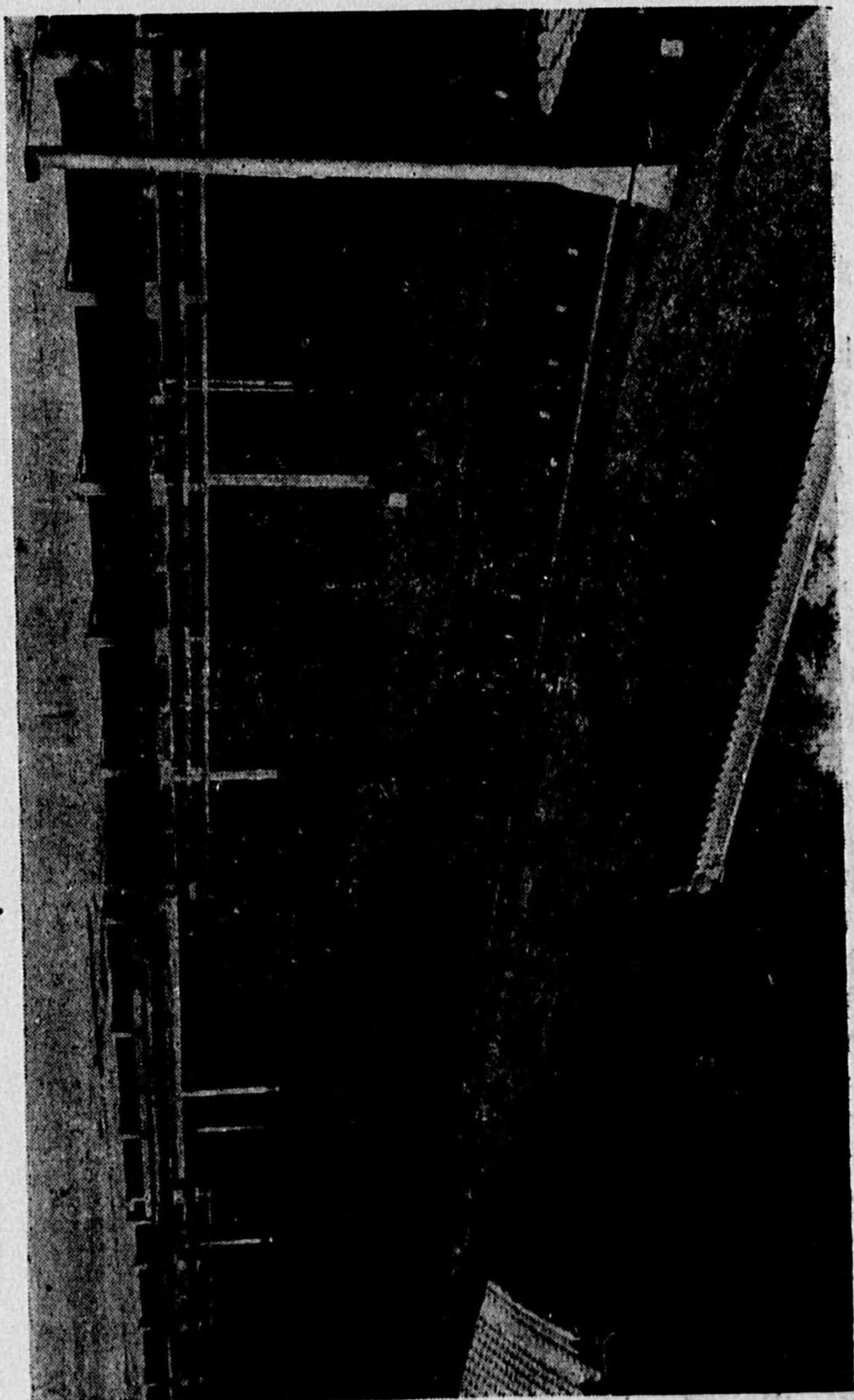
のである。様式上からみても、桃山より古い所がある。殊に南側廣椽の欄間の如き、左右相稱でこそないが、一面が牡丹で他面が唐獅子になつて居り、極めて平面的であるところや、其表現の仕方等、どう見ても桃山とは思はれない。今問題にしてゐる欄間の彫刻は、南側の廣椽及び落椽の西手に近くあるもので、殆んど實用にしてはゐないが、西向きの玄關から入ると直ちに見えるものである。先づ第一に廣椽の上にあるものに就いて考へてみる（一・二）。いづれ當初は杉戸がたててあつたのであらうが、いつもする様に、左右の引戸の框が中央で重なる上のところには、左右端同様「竹の節」をたて、適當なる大きさの二つの長方形に區劃し、其各に透彫を入れてゐるのである。

其透彫を玄關の方即ち西方からみた時は、欄間の中央には「唐獅子」、左右に「牡丹」の開花したもの又は蕾をおき、他の空隙は葉と莖とで然るべく充填したものであるが（二・四）、反對に其裏即ち東方からは、獅子のところが葉

になってゐる（三・五）。これだけのことを知ってゐて東側からみると、頭や胴は葉化さして判らない様にしてあるが、足の先だけは何とも致し方がないせゐか、ごまかし様が他の部分程巧でない（五の左方）。小さいけれども同様の取扱は東側の右手即ち北方のにも明らかである（三の右方中央、左の後肢だ）。
次に此等の欄間に就いて、別別に解説をしておく。

一、南欄間正面（西側）（二の右）

中央に前方を向いて走ってゐる獅子、右方に蕾（又は半開の花）、左方に花があるが、第一に其莖に注意するときは、此等の莖即ち幹は左右上方の隅から、巻いた若葉に包まれて下降し、更に上を向いて一は蕾一は花をつけてゐる。今ここで假に中央の獅子をとり去り、右の蕾を葉ごと左へよせ、花の後ろへ隠したとする。さうすると長方形の輪郭の中に、中央に花、左右から巻いた若葉と莖とが出て、中央の花の下で相會した形となる（四）。其葉や花の取扱——例へば花瓣の刻



一、南禪寺方丈正面を西南方よりみる（昭和十年一月六日）

み工合や蕊が整然と行列をしてゐるところ——等、左方の葉裏に圓整でついた跡のあるところ、乃至右若葉裏の手法は、如何にしても室町式と言はねばなるまい。若しこれだけの彫刻を墓股の脚内に入れたらどうかであるか。誰人も恐らく室町式といふ事に無條件で賛成であらう。墓股の脚内でも、長方形の輪郭内でも同じ事で、輪郭にだまされてはいけない。

次にしつこい様だが、花を後ろにやり蕾を前にだしてみても、ただ花と蕾とが代っただけで、全く同じ事である。扱てもう一つ其次に、今度はこのまま獅子が中央にあつたとする。さうしてもやはり同じ結果であるのは多言を要しない筈である。併し腑に落ちなければ實例を一つあげておく。近江甲賀の油日村に油日神社といふのがあり、其本殿は明應四年の上棟だが、其向拜中央の墓股内には、中央に花押、左右に牡丹の花、さうして其莖は兩肩から下を向いて出てゐること、此と同様である。ただ唐獅子を花押でおきかへたに過ぎないので

ある。

其次には中央の唐獅子を観察せよ。上下左右を限られた頗る狭い窮屈なところに押込められ、勢ひよく駈けてゐるのはいいが、四肢をちぢめる事もできないし、坐ることもできない有様で、受口で鬣と尾とは締りのないこと寄生蟲の如く、どうもさっぱり感心ができない。感心はできないが、實によく室町式を現はしてゐる。

要するに、縦から見ても横から見ても、遠方からでも近づいても、どうしたって室町は動かない。

二、南欄間裏面（東側）（三の左）

前圖の裏だから前と反對で、右方は花で左方は蕾になるが、花は瓣も蕊も、葉もまた刻み方を少し變へてある。其最も異れるは中央の唐獅子で、これは全く葉化して、了ひ、ただ後方に出てゐる脚の先だけが先づ其ままとといった形。化

けた狸がしっぽをだしてゐるといった有様。併し東側からみたのでは、この大きな葉の裏が獅子だといふことは、想像もできない状態である。いふ迄もなくこの方向からでも室町は動かない。

三、北欄間正面（西側）（二の左）

既記の南欄間正面同様、中央に唐獅子がある。これは受口ではないが、名詮自稱うそ偽のない獅子っ鼻で、後ろをふり返り、どういふ氣か右後肢を上向きにし、甚だ以て自然に遠い姿勢をしてゐる。獅子が石燈籠の中臺側面に二足づつ、或は共に前方に走り、或は向ひあつて坐り、時には前方のが振りかへつて後方ををみてゐるところを陽刻したのは、鎌倉 室町時代のものに於いて、決して珍らしくないのみならず、寧ろ普通の取扱であるのを以てみると、この場合前方のが振り返り後方が前をみてゐるのは、此時代に最も普通な取扱とみるのが至當である。

但しこの場合は、其左右の牡丹の莖の出方が公式に當嵌つてゐないだけの事で、花はやはり前例同様原始的牡丹、どちらかといふと夫は寶相花式のところがあるのである。

四、北欄間裏面（東側）（三の右）

唐獅子裏面が全く葉化し、左後肢はうまく葉にしてあるが、兩前肢と右後肢は前同様狸のしりっぽ式で、うまく化けてゐないが、このあたり反て愛嬌があつて甚だよろしい。牡丹の蕊が二つ又は三つに整然と分れてゐる點を忘れない様に。なせなら此様な取扱は室町時代に大に流行したからである。

以上は別別に解説をしたのであるが、これ等を一緒にしてみると、この様な所につくつた竹の節欄間の多くの例の様に、其中間にも一個の竹の節をおき、其左右に「唐獅子」を主體とし「牡丹」を補助とするところの、いはば平面的

原始的透彫の板を入れて装飾したのであるが、先づ獅子だけを考へてみると、前述の通り先行するものがふり返って後ろのものをみてゐるので、鎌倉から室町へかけての石燈籠中臺側面の意匠に幾多の類例があり、珍らしくも何ともない、甚だ有觸れた取扱であるのである。

併しながらこれを欄間に應用し、夫に牡丹——桃山以降の牡丹と趣を異にし、寧ろ寶相花に近いもの——を添へ、而も裏面は動物を植物化（獅子を葉に）したところ、に珍らしさもあるし、又面白味もある。牡丹に唐獅子が建築彫刻としては鎌倉（の大凡末）から用ひられ、又墓股内や木鼻等の彫刻が、表裏で異にしてつくられてゐるのも亦凡そその頃で、室町・桃山に於いて賞用されたのと思ひ合はせると、大に興味があるであらう。

此欄間の意匠を近江大津にある園城寺所屬の新羅善神堂の夫と比較せよ。獅子の代りに鳳凰を以てしたのが即夫で、牡丹の花（や蕊）の表現等は全然同一で

ある。其他この様な實例なら、室町のもを一つや二つは直にでも舉げる事はできる。そんな點から考へてみても、少なくとも此欄間だけは、様式上到底天正迄は下げられない。

此「牡丹に唐獅子」欄間に並んで、落椽の上に「竹に虎」の透彫欄間がある（六・七）。二の右端と三の左端とに、夫夫少しづつ見えてゐるし、其全景は版は粗いが一に出てゐるから、其位置は判るであらうが、これも亦同様にどこからかといふと原始的彫刻である。

抑「牡丹に唐獅子」と「竹に虎」とを併せ用ひたのはいつ頃からかといふに、拙者は研究不充分でよく知らないが、室町頃の墓股内の彫刻等にはあるのだから（近江油日神社、本殿向拜臺股）、やはり鎌末か室初の頃からかも知れない。江戸時代の俗謡に

誓願寺の和尚さん坊さんで、

牡丹に唐獅子竹に虎、

虎をふまへて和唐内、内藤様は下り藤、
富士見西行うしろ向き、むき身蛤ばかり柱、
柱は二階と椽の下、下谷上野は山かつら、
柱文治は咄家で、でんでん太鼓に笙の節……

といふのがあるから、これで見ても此頃の流行言葉の共存共榮や同甘共苦を、
とうの昔に實行してゐたのであらう。何うせ獅子と虎とでは、一は獸王で一は
亞獸王といふところ。共に歴とした存在である。江戸時代に於いては、「七福
神」や「松・竹・梅」乃至「梅・松・櫻」と共に、親まれてどこにても見出さ
れたのであらう。此部分に就いても亦、前同様の解説を試みておく。

南側落椽欄間正面(六)

先づ細長い長方形の中央に近いところに虎をほり、左右の空隙は竹・竹の葉・
筍とを以て適當に充填してある。元來まっ直に生えるべき竹を無理に狭いこ
ろへ押込めたから、太い竹が根本から二本共左に曲げられてゐるが、筍は餘程

特殊な場合でないと曲つたのではない。ここでは三本とも垂直なのは結構だが、
既に天井に間へ、若くは間へんとしてゐる状態であり、其間に填めてある葉も
随分變に曲つたり下を向いたりしてゐる。

虎は前額に澤山の雨雲をかけ、全身を竹林の前方に露出し、さうして竹に咬
みついてゐる。昔の人は生きてゐる虎を知らず、況や其習性等に就いては何等
の知識なく、豹を虎の雌だと思ひ、舶載してきた毛皮を見て、單に想像で描く
なり、刻むなりしたとの事である。だから折角竹林があつても、其うちに入つ
て保護色を利用させる事等は思ひもよらず、夫を背景として、其殆んど總てが
全身を其前方におき、時に竹を咬んでゐたりする様な場面をほる。筆者は江戸
時代の輪郭なき摹股に竹に虎を刻み、其虎がとても大變な勇猛心を起したもの
の如く、猛烈極る顔をして竹に咬みついてゐるのを見て相當にあきれた事があ
つたが、そんなのは既にもっと以前からあつたといふ事が、この欄間の虎から

判る。京都市所在の二條城二の丸御殿大廣間の孔雀を刻した欄間は、伏見城からもってきたものださうで頗る有名だが、雄の孔雀の前で他の雄の孔雀が尾翼をひろげて示威運動をやっているの等も、全然習性等は問題にせずといふよりは、何も知らず、従ってただ立派に見せようといふ所から、かういふ風にしたものに見える。昔の畫家でも彫刻家でも、そんな點は甚だ以て吞氣であつた。

南側落椽欄間裏面（七）

次に其裏面即ち東側であるが、竹葉で全部虎を隠す事もできず、又其必要もなかったものか、胴から頭へかけては、偉大なる竹葉のため大部分はかくされてゐるが、後肢と尾とは出てゐる。頭隠して尻隠さすといふ次第でもあるまいが、この方がうまく敵又は獲物に發見される虞が少なくてよからう。

文祿の墨書があるといふ墓股の一面は「竹に虎」で、他の面は「松」の彫刻

を入れたのがあるが、その虎とこの欄間の虎とは實によく似てゐる。尙ほ室町時代の竹の彫刻に、筍を添へたのは未だ知らない。按ずるに竹林に筍が生え出したのは桃山位からではないだらうか。旁この「竹に虎」の分は桃山とみる説に賛意を表する次第である。

結論といふ程でもないが、マアとどのつまりは次の様に考へて大して差支はなささうである。

「牡丹に唐獅子」は室町時代のもので、「竹に虎」の方は、天正年間かどうかとにかく桃山時代に補加したものである。大方丈の角柱の面は、小方丈の夫に比べて可なり大きいといふ事も、其時代が少し異なるといふ一證になし得るのである。

（昭和十七年十二月二十九日稿）

南禪寺方丈廣椽上欄間を西方より見る（昭和十七年九月二十七日）
東方より見る（昭和十七年九月二十七日）
下圖背景に見えてゐる懸魚は玄關東方の破風の夫で形太いによろしい。



上, 二。南禪寺方丈廣椽上欄間を西方より見る（昭和十七年九月二十七日）
下, 三。同 東方より見る（昭和十七年九月二十七日）
下圖背景に見えてゐる懸魚は玄關東方の破風の夫で形太いによろしい。



上, 四。南禪寺方丈廣椽上南側欄間を西方より見る
下, 五。同 東方より見る

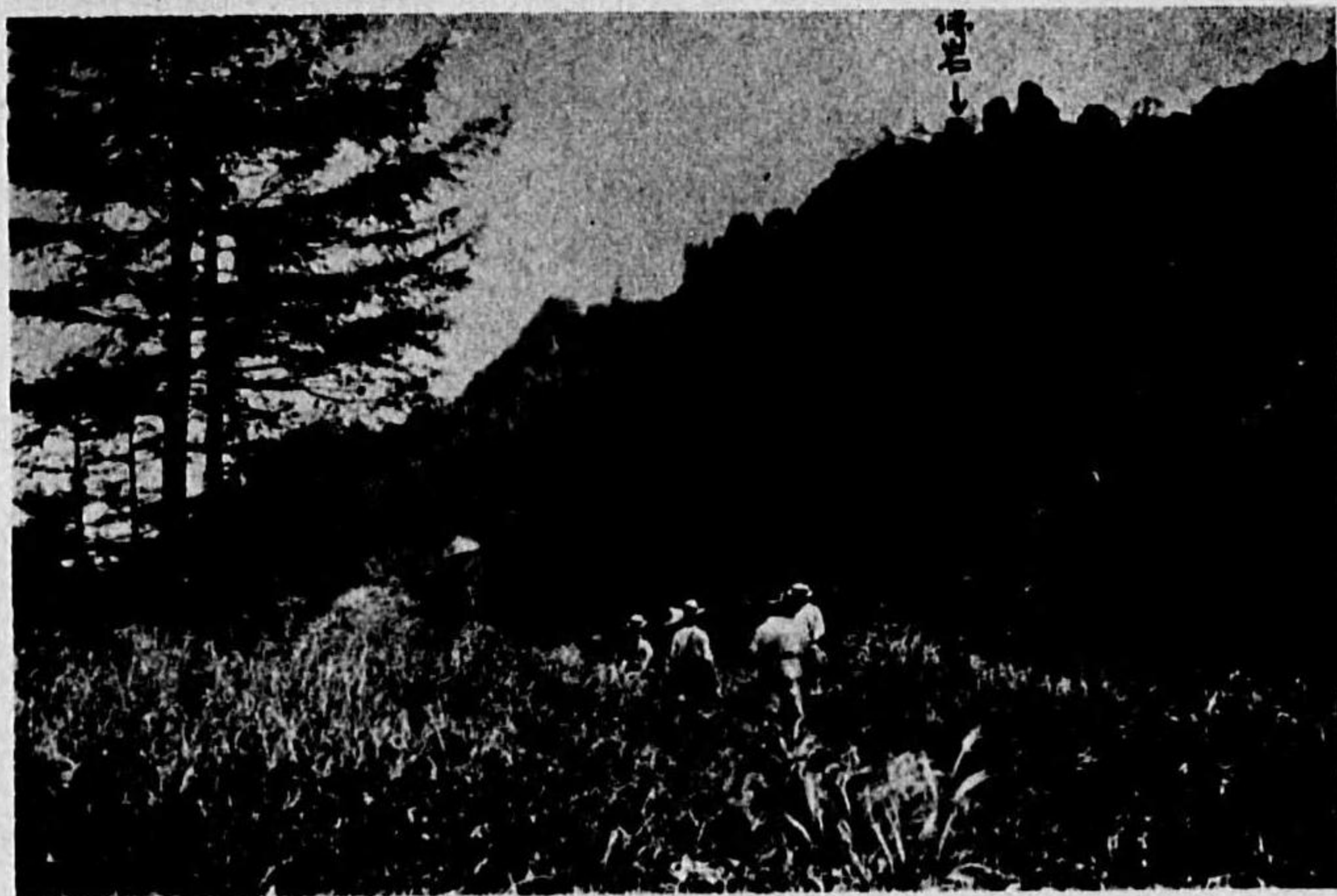
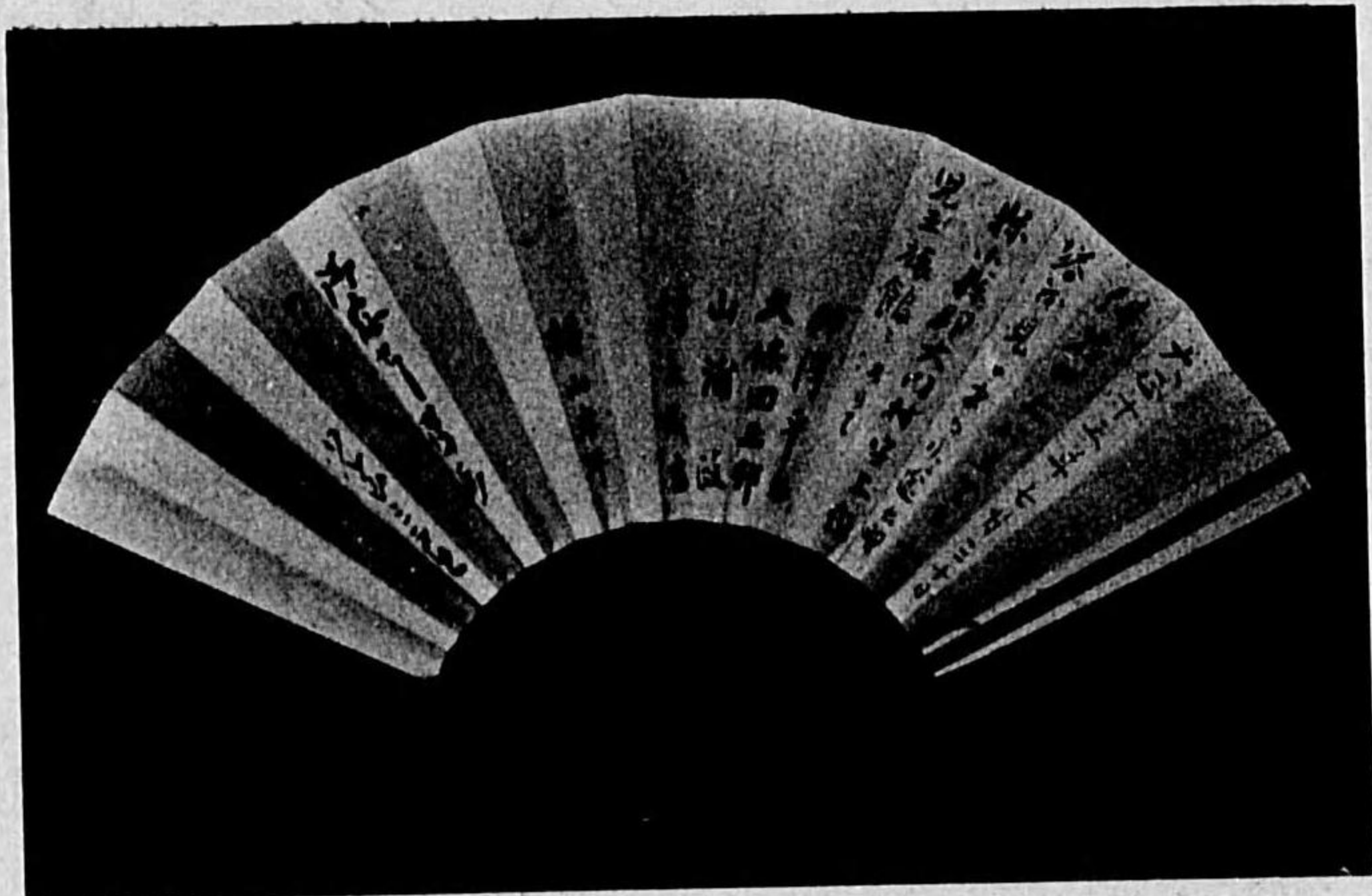
(兩圖共物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和六年二月十五日)



上, 六。南禪寺方丈落椽上欄間を西方より見る。
下, 七。同 東方より見る。

(兩圖共物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和六年二月十五日)

此欄間の「竹に虎」は, 廣椽上の「牡丹に唐獅子」より少し新らしい。



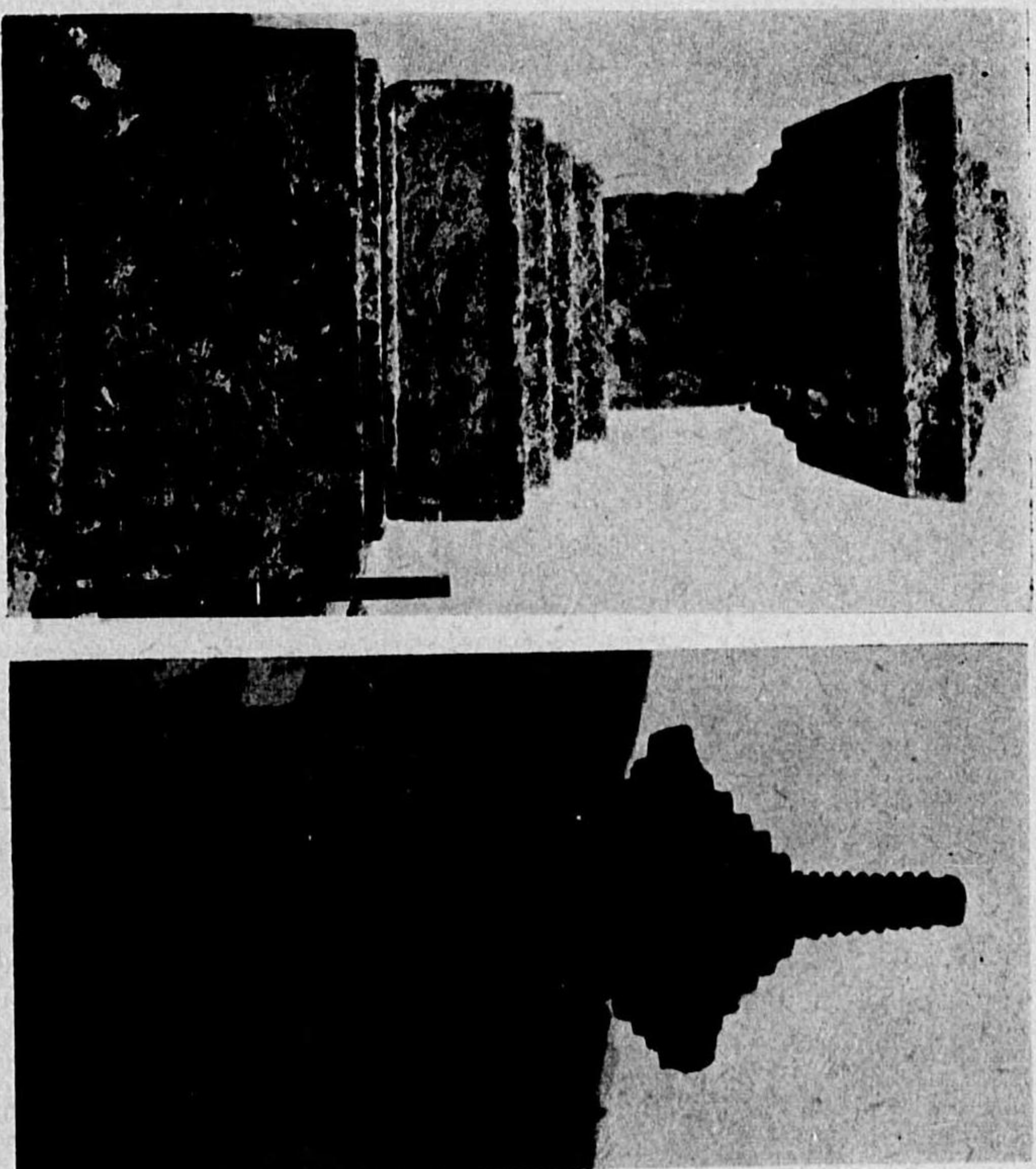
上、八。佛岩石塔見學記念の寄せ書き
(大正十五年七月三十日)

下、九。佛岩の遠望
(大正十五年七月三十一日)



右、一二。佛岩の下 其一
左、一三。同 其二
右圖は漸く佛岩を降りて、最早如何にするも墜落の虞のない岩上に達して一安心したところ。左圖はYさんの協力の下にY翁の丸木橋渡りのところ。

(兩圖共大正十五年七月三十一日)



右、一四。佛岩寶篋印塔全形

左、一五。同 部分

（兩圖共物差は曲尺の一尺・大正十五年七月三十一日）
右圖は佛岩上の適當なところへ石塔を移し、然るべき方向より全形を寫したもの。左圖は正面と思はれる方から其一部の立面に近い寫眞。

佛岩攀登記

はし が き

我國に於ける石造の小建築には「多寶塔」・「寶塔」・「寶篋印塔」・「五輪塔」・「石燈籠」等がある。私が初めてこれ等に興味を持ったのは、東京市から奈良市へ移住した年、即明治三十九年の暮だから、今から正に三十六年前で、一時は随分面白くなり夢中になって調べて歩いた。日曜毎に天氣さへよければ自轉車で、先づ大和平野の寺・宮・墓地を片っ端からさがしたりしたが、大正七年京都市へ移轉してから暫くでやめてしまった。前後を通じて十六七年にもなうか。そのうちで今でもやめないのは石燈籠である。此間可なりの數をみたうちで、最も楽しい思ひ出は「鳳閣寺廟塔」と「佛岩寶篋印塔」とである。

鳳閣寺廟塔は單層寶塔であり、大和吉野の鳥住村の鳳閣寺にあるが、いろいろ

ろ下調を試してみたところ、どうやら行ってみる價值がありさうに思はれたので、大正元年十一月に吉野の竹林院のG師に案内をして戴いて出かけたのが初めてあった。中判の重い寫眞機を持ち種板は唯一枚残しておいたのを入れ、肩から下げて木の三脚を抱へ、G師と一所に辰巳旅館を勢よく出かけた。何にしる今から三十一年前で、従って年齢も三十一だけ少なく、歩く方では相當に自信もあったから、平氣で歩いたが、G師はどうしたのか道を誤り、杉だか檜だか生えてゐる山の斜面の樹木の間を登り、漸く頂上に出たら夫は一つ手前の山であつた爲、再び前の谷へ下りて更に樹の幹につかまって斜面を這ひ上り、やっとの事で寺へ辿りつき、裏山に一基の石塔がたつてゐるのを見つけて行つて見たところ、夫が稀代の逸品であつたから、途を誤つた事も寫眞機の重かつた事も忘れて了ひ、随分喜んだが、かういふ時のうれしさは話をしたのでは判らない。この道へ入つて相當の經驗をつまなければ、古い石の塔がたつた一つあつただ

けで、何がそんなにうれしいのかと、讀者諸君は思ふかも知れないが、實際何とも言へない程うれしいものである。

所が基壇の羽目石が一つない。不圖みると少し距ったところに、木樵が薪を割る時の臺か何かに用ひたものらしく、あたりには木っ端が澤山落ちてゐたには可なり驚かされた。あの頃あんな山奥(?)の寺の坊さんは、經文をよむ以外に何も知らず、凡そ美術工藝品なんかとは縁が遠かったのであった。基壇羽目石の底に起りのある格狭間に銘文を刻したものを、薪割の臺に使はれても平氣である方が當りまへであらう。大正の中期、京都府所在のある修驗道の大本山の坊さんに、梵字の質問をしたところ、今時あんな字を稽古してゐては飯が食へませんといふ答を得たのからみても、さう考へるのが當然かも知れない。ことによつてもつとわるく解釋すると、寺男に寺用の薪を割らしてゐたのかも知れない。

はしがきは以上を以て終りとし、佛岩への旅行記をかいておく。中中容易に行けるところではない。何の用意もなしに唯一人で出かけたのでは、目的を達することなんか思ひもよらない。是非見たければ私のした様に――ではなくして戴いた様に――でもしなければ絶対に見込はないのである。

長野市から佛岩へ

【長野縣史蹟勝地調査會報告書】の第三號は、大正十四年一月に發行されたものだが、其中に調査員小山眞夫氏が、佛岩の寶篋印塔に就いて圖版を添へて報告して居られた。挿入の圖でみると、特立した岩があり、其岩上に小さく石塔が見えてゐる、もう一枚のには其石塔の大寫しがあるが、どういふものか笠

の少なくとも三隅（一隅は見えぬ）に、あるべき筈の突起がない。初めから無いのか、缺いて亡くしたのか、その邊が寫眞版では判明しない。併し銘文からみると鎌倉だし、相輪下部に伏鉢もない様だし、全體としても形狀はよく整つてゐるし、どうも腑に落ちない點が多々あるので、大正十五年七月、さる用事があつて長野市へ行つた時、幸に面會の機會を得た長野縣教育會小縣部會のY氏に、あなたから話して戴いたら、どなたかに連れて行つて戴けないでせうか、といふつもりで「是非共一見を希望してゐるのですが何とかありませんか」と伺をたてたのが其二十六日、所が果して豫期の通り到底見込はない、とても大變なところで、自分も未だ行つては見ないが、Y君の話によるとあの岩へは唯では登れない、だからあきらめたがよからうと言はんばかりに、十中九分九厘迄思ひ切る様に申渡された。

併し何にしる今から十七年も前のことで、年齢もやつと五十になるかならず

であつたし、山登りの經驗がないから、謂はゆるロック・クライミングは知らないが、夫こそ精神一到で萬難を排しても目的を達せずばあるべからずといった調子で、非常に困つた様な表情をしたところ、Y翁——頭文字がYの字のつく人が二人あるので錯綜する虞があるから、失禮ながら御老年のかたをY翁と呼ばしていただく事にする。お若い方、即ちY翁がY君と仰しやる其方をYさんとする——は一方ならず斡旋をしてくだされ、漸くのこととて何とかして戴くことになった。洵に喜ばしい次第である。決定したのは其翌日か翌翌日か忘れだが、愈よ七月三十日に出發ときまつた。七月二十九日に長野市に於ける用事がすみ、更に八月一日から上田市に於いて用事がある。其間二日ぬけるから、その二日間に見られることになったのである。さうして其上に同行者も四人で来た、Y翁外二氏にYさんの案内、實は小縣部會幹部の方方が、序に自分達も見學をしようといふところから、同行してくださる事になった、其以外にもう

一人Yさんが参加し、合計五人——私も入れて六人——になったこと、記念の扇面のよせ書の如くであった(八)。

右の様な次第で、大正十五年七月三十日の朝は、前九時六分長野驛發の汽車へのり、上田經由大屋驛で丸子鐵道へのりかへ、丸子驛着、下車して丸子小學校へ行き、應接間を拜借して持參の辨當を認めた。小縣部會の大御所其他校長さん達に連れて行って戴いたのだから、こんな時は何といつても都合がよろしい。二時間待ち二時十分發のバスで四十分を費し、二時五十分落合といふ所へ着下車、ここから徒歩して大門村の大門小學校着、復二時間休憩、午後五時に當時の大門小學校の校長の横山孝平さんに案内をして戴き、Yさん——後の信州上田の勇猛團長、この時は未だこの様な團體はなかったので無名であったが、最大最重最輕であった事は今と變りはなかった——と二人、同村大字上組の宿屋へ着いた。

然るに此宿屋はどうも少し變で、平家で堂堂たる邸宅であり、主人は鬚を生やした立派な人品。宿屋の主人が鬚を生やす筈がない等とは思はないが、どうも勝手が異ふので、これは多分普通の旅館ではあるまい、いづれ由緒ある家で、特に一泊を願ったのかも知れないと氣がついたので、横山校長さんにそつと伺つてみたら兒玉さんといふ舊家で、大分えらいのださうな。強ひて缺點を言へば、あつい時だのに風呂のなかった事と、貸してくれた單衣が少なからず意に滿たなかったので、前者はきれいにあきらめ、後者は校長さんを煩して話をし、て戴き、別のを借りて安心することができた。

兒玉さんのお宅はまことに氣に入つた。軒口には總て鼻隱板を用ひてあるが、夫を其位置に保つため、諏訪地方同様コヅナを用ひてゐる。破風も鬼板も同様であつたが、懸魚はなかった。これで懸魚があれば申分はないであらう。

初めの話では今夜の宿は二人きり泊れないとの事に、Yさんと私と二人きた

が、皆泊れるさうで残りの人を呼びに行くときまり、誰か使ひをだしたのか全部揃ったのが七時半、山の中のせゐか温度は低く薄ら寒いので肌着をつけた。ところがどういふものか夕食が出ないうちに九時になって了った。嘗て大分縣東國東郡來浦町大字岩戸寺の岩戸寺へ、例の弘安六年在銘の國東塔をみるべく一泊したとき、これも夏であつたが、前以てさういふことをお願いしてあつたから、寺では承知の筈なのに、夕食が午後十時であつたのに比べると、一時間早いのだし、元來御無理なお願いがしてあるのだから、大に喜ばなければならぬのだ。だから文句等言つては罰が當りさうだが、随分空腹で困つた。今なら前線の將士を偲べといふ手もあるが、當時は戦争はなかつたので、大分こた

*コツナといふのは、破風板を其位置に固定するため、長方形の薄い板で、夫を外から挿込み、上から栓を打つたもの。内部がどうなつてゐるか判らないので、友人に伺つたら、精しいお返事を戴く事ができた。参考のため、本章の終りに其ま掲載する事にした(1061・1062・11)。

へた。

一人に一疋づつイワナの焼いたのがつけてあつた。机の上には總長一尺に餘るとても大きなのが皿にのつてゐた。餘り大きいので珍らしく、連りに感心をしてみてゐたら、皆さんもこんな偉大なのは見た事がないと證明をされた。夫で愈珍らしくなり、見てばかりゐたら、兒玉さんは是非食べろと勧めてくださったが、遠慮して見ただけですましておいた。あれは今どうなつたか知らんと時々思ひ出す事がある。

食後は大分疲勞してゐるし、あした一仕事あるのだから直に失禮してねる事にした。奥の六疊間に私一人、戸を締め電燈を消したので、眞つ闇で静かであつた。此日は大分怪しい時もあつたが、幸に雨は降らなかつた。明日も何とかして降らない様にしたい。漸くのことここ迄來て、これで明日が雨だと萬事休す。九仞の功を一簣に虧いたが最後、恐らく機會は永久に再來せぬであら

う。寒いので薄いかけ蒲團をかけて、晴天で且つ驟雨のない事を念願しつつ、いつの間にかねてしまった。

翌七月三十一日は早起した。朝のところは天気は上上吉、何卒仕事を終る迄神鳴のならない様に、むき出しの特立した高い岩の上で、驟雨に大雷では實際生きた心地はあるまい。七時出發の豫定が二十五分後れた。此日荷持ちとして大門小學校の小使を頼んであったのださうだが、中中出現しないのでYさんが拓本の道具を持ってくださったし、寫眞機も亦同様どなたかのお世話になったので、私は何も持つ物がなく、兒玉さんの家の新しい冠をかさを拜借して出かけた。新品だからまるで汗がしみてゐないので、軽い氣持で出かけることができた。幸に間もなく小使は追付いた。

經過した時間からだると二里餘も歩いたらしいが、ある小徑を左折して川を渡った。川を渡る前に、途の左手に佛岩がよく見えたので、記念に寫眞を一枚と

っておいた(九)。此川の水は清冽で美しい。嘗て慶州の南山を壁畫模寫の名人の君と歩き巡った時、宿屋から水筒を借りて行くのを忘れ、苦しまぎれに頗る汚らしい川の水を飲んだ事さへある。此時もがまんができず、南山の川水とは比べものにならない程の水だから、決してあたらないときめて、一同充分のどを潤した。

此溪流を渡ってからは、どうも實に大變なところを登った。身長と同じ位に生えてゐる草を分けながら登ったのだが、其草に薊が交つてゐた。今は藥にしなくとも見當らないが、昔は網の半袖の肌着が五十錢位で買へたから、夏になるといつも私は網肌着を愛用した。此を一着に及んでゐたが、上衣は兒玉館へ預けて來たので、こんな所を歩けたものではなかった。私が困りぬいてゐる哀な姿をみつけた長老Y翁は、一行中の故Kさんの着て居られた莫蔭を私に貸す様に話してくださったので、漸く人竝に歩く事ができる様になった。

既にして薊坂を過ぎたら、次は黒蟻にせめられた。山の背の様な所に、永年に互り主として松であるが、其他の枯葉も幾分交ったのが地に積り、其上を歩くと相當に弾力がある。此堆積せる枯葉の間に住む蟻は、頗るつきの不良と見え、肌に食ひついて中中離れない。足袋とズボン下との間の皮膚に喰ひつき、あるものはズボン下の間から脚を登り、あるものは足袋の間から足の先の方へもぐり込む、喰ひつかれると痛を感じる、ちよつとやそつと拂った位で落ちるものではない。最初のを落すと次のが喰ひつく。Yさんはさすがに経験家であるせぬだらうが、脚絆ですっかり包んであり、脚に喰ひつく事ができなかった。せぬか、背を登り首筋に咬つかれたさうだ。こんな苦しい思ひをしたのは四五町で、漸く通りぬけて岩のかげに一休した。これが即ちマイナスの蟻地獄で、熱帯で猛獸や毒蛇が蟻のために喰ひ殺されることも、この調子ではほんとうにあり得ると思はれた位、全くどうも弱った。

目的の塔のある「佛岩」に達したのは丁度十時半、兒玉館を出てから正に三時間と五分、岩の下には確かに達したが、扱て如何にして登るかが問題である。Yさんは用意の太い麻綱を松樹の枝にかけた。夫は道路と岩との間には二間位の深い間隙があり、先づ以て夫を渡る時の手がかりにしたのである。次に末口三四寸もあつたらうと思はれる立木を伐り倒して岩と道との間にかけた。これは松樹の枝にかけた綱をたより此丸木橋を渡り、岩の根元にでるのが第一で、かくして無事に道と岩との間隙を渡る事ができるのである。

「佛岩」は根元よりは上の方が大きい。さうして所所に岩の瘤がでてゐる。そこで此等の瘤を手又は足のかかりとして一步一步登るのである。Yさんは第一に一同の荷物を纏め、夫を二度に岩上迄運んでくださった。小使はあとから一升瓶二本に飲料として例の溪流の清冽な水を充し、夫をかついで容易に岩上に登つて了つた。他の人人も大概は人手を借らず、勝手に登つたのである。

一行のうちで、最も厄介で最も面倒なのはY翁と小生とであつた。Y翁はYさん及び其同僚は勿論、夫等の人人の先生であつた。今は既に退職、自邸に悠々自適して居られたが、やはり千歳一遇の好機を捕へて出馬されたので、教育會にとつては最重要な存在である。小生は他國ものだから、怪我でもあつたら事面倒である。だからこの二人には相當に注意を要するので、萬一の事がない様にしなければならぬ次第と拜察をした。

二人のうち小生を先に登らして下さつた。胴中に細引(麻でよつた細い繩)を結びつけ、萬一頼りにしてゐる岩角の瘤がとれでもした時には、綱でぶら下る様にし、Yさんは小生の足もとにつき、「右上の瘤をもて」とか「左のかどに手を掛けろ」とか、下から言つて下さると同時に、「左足又は右足をあげろ」といふ工合に、或は左或は右の踵をもつて適當な足がかりの瘤の上にのせて下さつた。どうしても都合のいい足がかりのない時は、自身の膝を曲げた上を踏臺と

して使用さして戴いた。かくして漸く岩の上に首を出してみても驚いた事には、私の胴中に結びつけた細引の先は、既に岩上にゐた大門小學校の若い先生が二人でしっかりと持つてゐて、登るに連れて少しづつ手繰つて下さつたのである。事故のあつた時、一人では危険だからといふ注意から、二人で細引をもつて下さつたのである。小生の次にはY翁が全く同一の方法で登つて來られた。Yさんにしてみれば、四回昇降して四個の荷物——内譯ほんとうの荷物二個、生きた荷物二個——を無事に岩上に運んだのである。さぞおつかれになつたらうと、それこそほんとうに恐縮をした。

岩上はどの位あつたか、はつきり覚えてゐないが八疊か十疊敷であつたらう、その位の小さい平たいところがあり、其一部に目的の塔はたつてゐた。初めてみたのが非常にうれしく、天氣は最上である代りに、上から眞夏の太陽が遠慮なく照りつけはするが、當分は雷雨の襲來もなさうなので、大に落つき最初

に適當な場所に運んで寫眞をとった(一四・一五)。次に拓本をとる事にしたが、兒玉さんのお宅から拜借してきた笠は、どの位役にたったか判らない。あの笠がなかったら日射病にかからない迄も、随分こたへたであらう。基礎四面・塔身四面・屋根軒口四面と、基壇の四面と、合計十六枚の拓本製作は容易ではなかった。

一升瓶の冷水は熱湯の如く沸き、私が常に愛用してゐた(今でも)曲尺二尺の折れ尺の水準器は、強烈なる日光に照されて破裂をしてしまった。ついとうっかりして日光の直射する所へ出して置いたせいで、何かの拍子に物差を手にもたした時は、水準器の硝子は無残に壊れてゐた。日射病にでもやられたかも知れないところを、身代りになったのだらうと思つてあきらめた。

午後三時半になつて、同行者何れも拓本を終つたので歸る準備をした。今度は登つた時と反對にYさんが先に下りかけ、私の身體へは同様に細引を結びつ

け、左右の踵を交る交る下の岩の瘤の上へ誘導され、どうしても届かない時は、やはり自身の膝を曲げ、其上へ臨時に托す事を許された。かくして漸く下りて丸木橋を渡り、道路へ出て絶對安全となつたのを見て、Yさんは再度登つて今度はY翁を同様の方法を以て誘導、下降を極めて安易ならしめた。實にYさんの苦心に對しては感謝の辭に苦しむ次第である。上の方は到底寫すことができなかったので、最早殆んど下りきる時と、松の枝に引懸けた細引をたよりに丸木橋を渡る時の、Yさんの補助誘導の有様を後世に傳ふるため、Y翁の場合を寫眞にして一二、一三に掲げておく。一二に於いては、立つてゐるのがY翁で這つてゐるのがYさんであり、翁の身體には細引が結へてあり、丸木橋を渡る時の頼りにする細引が松の枝にかけてある(一つ結んで萬一の場合に備へてある)ところが見え、一三では其力綱をY翁が右手で持ち左手は岩を支へ、右足を橋の上へのせたところを、Yさんが安全な場所に足首を据ゑてゐるのがよく判る。私も同様にして

戴いて無事なるを得たのである。まことに有難い次第である。他の人人はいふ迄もなく何れも人手を借らず、自分の始末は自分でしたのである。

朝同行したのは小生を入れて六人に、大門小學校の小使を加へて七人、後に此學校の先生が三人おいでになり、とうとう總勢十人あつたが、往路に大迂回をしたのと反對に、歸路は眞直に近途をし、川畔に一休して四時には兒玉さんのお宅まで歸着することができた。

間もなく大門小學校の先生達は辭去されたが、歸校して直に車を呼びよせてくださる事になってゐたのに、待つ事三時間半餘り、七時半になつても來ないので、ともかくも學校まで行くことにして出かけたら、學校の少し手前で校長さんに出あつた。自動車は故障のため今漸く着いたから、これから直に迎にやるところであつたとの事。漸く出發したのは後れに後れて夜の八時十分。八時五十分丸子驛着、九時發の電車へ乗った。

其當時では、丸子發の電車は午後六時二十五分の次は九時であつた。だからわるくすると自動車は故障ではなく、其つもりで一つぬかしてゆつくり來たのかも知れないといふ惡口も出た。一行五人のうち三人とは大屋驛でお分れし、故Kさんと小生とだけ上田驛迄來る事は來たが、おそいので人力車も何もなく、徒歩で都筑旅館へ入った、時に九時五十分。入浴して二日分の汗を流し、夕食を終つたのは夫から一時間後。大正の末年頃だからよかつたものの、今であつたら食事もできなかつたであらう。夫にしても故Kさんには洵にお氣のどくな次第で、全くのおつきあひでひどい目に遇はれたのであつた。

斯様な次第で無事宿望を達し得たのは、全く小縣教育會上田部會幹部諸先生御厚志の賚であり、深く感謝の意を表する次第である。信州在住の人でも、めつたに見る事のできない石塔を、心ゆくばかりに觀察ができたのは、ほんとうに皆様のお蔭で、一人では到底手も足も出せなかつたのである。さすがのYさ

んも最初岩の下迄來たが、どうしても道と岩との間隙を越す事ができないので、止むを得ず其儘歸り、更に細引を持って出かけ、漸く目的を達したと述懐されたのでみても、普通では到達し得ない所にあることが推察できよう。夫だのに他國者でありながら、一度で無理な願が通り、幸に天氣もよく驟雨も神鳴もなく、寫眞も拓本もとることができたことについて、少しばかり自慢をしてもよからう。

佛岩寶篋印塔



私が此塔の存在を知ったのは、既記の通り【長野縣史蹟名勝天然記念物調査報告書】第三輯に「小縣郡大門村寶篋印塔」と題した、調査員小山眞夫氏の論文であつた。夫には寫眞版が一枚添へてあつたが、上圖には特立した岩上に明らかに寶篋印塔が見え、下圖には塔の大寫しが出てゐた。併し不思議な事には、笠の四隅にあるべき突起がない。小山氏は其方面には素人だから、形式に就いては何等記載がなく、従つて四隅突起の有無等には一切觸れず、又銘文等に關しても、形式が多少とも判つてゐれば、其書き起しが「應長」か「慶長」かは、一見判斷がつけ得られる筈なのに、どちらか決めるのにも相當苦心をされ、遂に應長と斷定を下されたのはいいが、基礎の四方と笠の軒四方に梵字を刻してあるとばかりで、何をかいたのかは記してない。これは判らない方が當然であらうが、拓本をとつて遠齋九郎さんにでも調べて戴いたら、何だか知れるだらうといふ氣もしたので、是非一度實見したかつたが、小山さんは其現狀を記し

た中に、「寶篋印塔のたてられてゐる岩柱は上部がふくらんで、下部が細いから登るには極めて危険である、四方何れもあぶないが、わけて東方は千仞の谷にのぞんでゐるから、容易に訪づれることはむづかしい……」とあつた。これが前記の様に教育會へ無理な願ひをした原因になつたのである。

塔は最初は岩上のどこかにあつたのであらう。文政十年秋に岩茸採りを業とするものが岩上で見つけたのださうな。夫を時に適當に動かしたと見え、いい加減なところにあつたから、私も亦然るべく位置をかへて都合のいい様に日光をあて、基壇に刻してある最も長い銘文が見える様にして寫した、だから一部分基礎の下がすいてゐるが、夫は止むを得ないのである（一四・一五）。

私は一寸尺を測らなかつたから、報告書記載のものに従つておく、さうして下から上に順に記して行かうと思ふ。先づ基壇であるが、高八寸一分に幅一尺四寸一分、其四方の銘文は草體の細い字で、充分注意をして拓本をとつた積

りだが、到底私には讀めない。併し書き起しの第一行だけは、最後の一字を除いて他の十字は明瞭によめるのは幸である。

應長第一之曆南呂上旬□

□□弟子

妙法三□人生□滅罪生□

出離生死□□□佛果

圓滿乃至法界平等利益爲

□□□石塔婆一基所奉

造立供養如件敬白

肥前太守成阿彌陀生□

息女並日光峯宮□

近江禪閣□善生□

右銘文は殆んど報告書によつたのである。私は私の拓本と随分首っ引をしたが、結句報告書のは誤植か誤讀であらうと思はれたのが二字と、きまり文句のために讀めたのが一字あつただけで、どうもこの方面は全く苦手で何とも致し方がなかった。

基礎は高三寸五分幅一尺一寸七分、周圍に細き輪郭をつくり出し、四面共三列十五行の梵字を刻し、上に三段を刻み出してある。

塔身は方六寸、左右と上方——下方ははっきり判らないが、多分あつたので

* 第一面第六行「□□□右塔婆……」の「右」は「石」

第二面「肥前介守」の「介」は「太」

** 第一面第四行「出離生□□……」の生の次の「□」は「死」

佛岩寶篋印塔

あらうと思はれる——に細き輪郭をとり、内に四方に四佛の種子を刻してある。塔身の上部は少しく笠の下部に嵌入してゐる。

笠は軒口の下に三段、上に五段を刻み、軒口は下幅は上幅に比べて少し狭く、同じく四方に輪郭をとり、内に各面十五字づつの梵字を刻す。四隅の突起は何れも缺きとってしまったものの如く、缺いてとつた跡がある。夫も其缺いたところが可なり古くなつてゐるのでみると、相當以前にいたづらをしたものと思はれる。笠の高七寸七分幅一尺一寸六分とあるが、これは多分幅の最も廣いところを測つたのであらう。

此笠の軒の上幅と下幅とを異にしてゐるところは、私は甚だ面白いと思ふ。其軒口に梵字を刻したのは恐らく類例があるまい。四隅の突起のなかったのは、初めからではなくて缺きとつたことが判つたので、實は失望もしたし、又安心もしたのである。四隅に突起のないのが、こんな古い時代のものにあつたら夫

こそ問題で、大に考へなければならぬが、大分面白い。だから初めからなかったのではないと知れて失望をしたのであるが、同時にそんな塔はないときめてゐたのだから、やはりなかった事がはつきりしたため、夫で安心をしたのである。やはり自分で實物を見なければいけない。

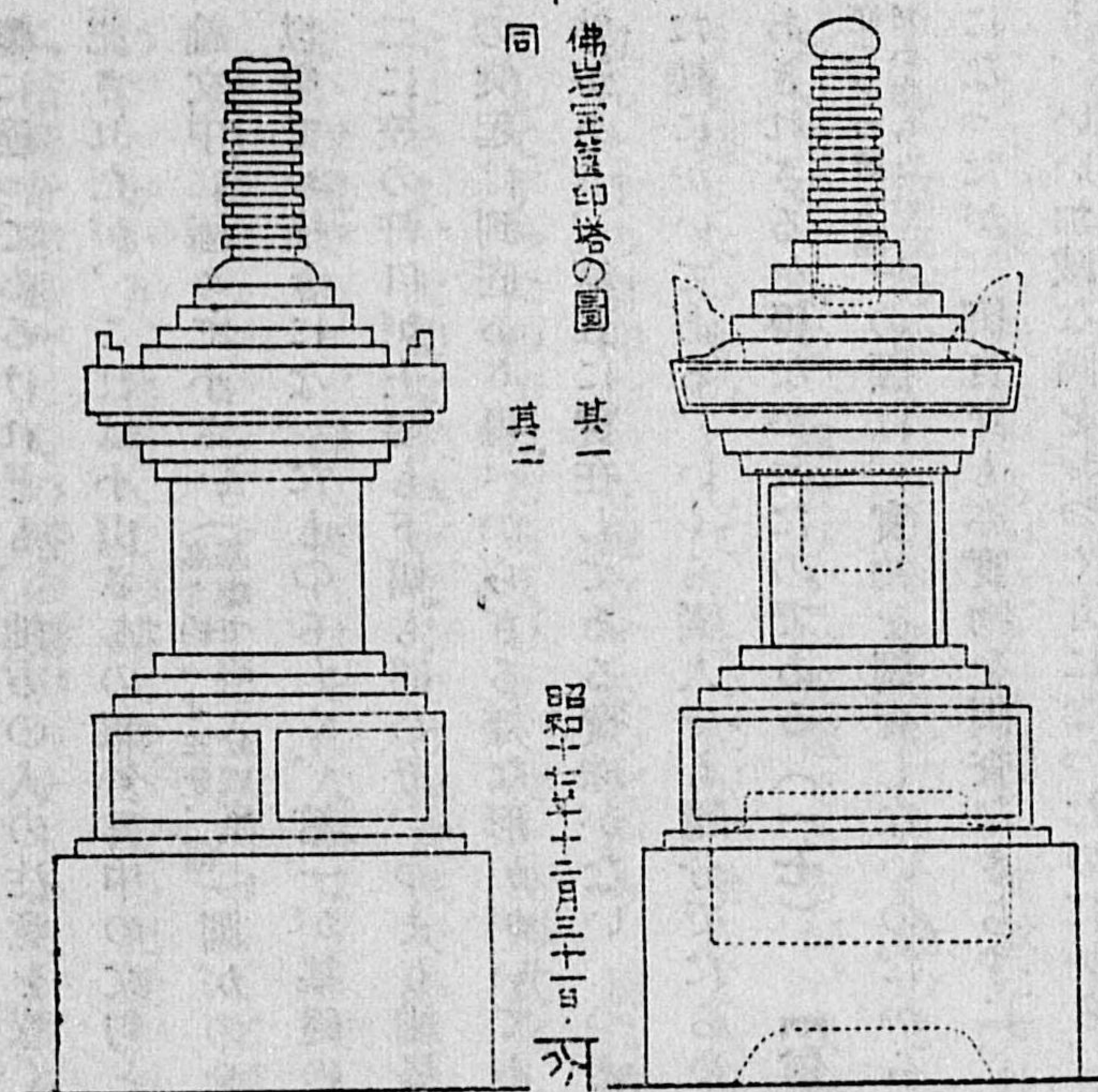
最後に相輪である。其高七寸六分幅三寸といふ。此相輪は不思議千萬にも伏鉢なく、而も柄はあり、笠の上には柄穴があり、夫で第一輪が笠の上についてゐる。輪は定數の九個あつて、最上部には——相當に磨滅はしてゐるが——寶珠をつけてゐる。

以上が此寶篋印塔に就いての記載である。一四・一五の二圖を見ながらこれを読み直して了解ができる筈である。併し私はここに半ば見取圖の様なものをつくり、凸版にして掲出しておいたが（一六）、夫には笠四隅の突起を推定で

復原しておいた。伏鉢はやめておいた。なぜなら現在の儘で柄迄できてゐるのだから、最初伏鉢があったとすれば、何故に其外まわりをかき取り、又柄も短くして現在の如くしたのであるか。その邊のことがはっきりと判るまでやめておいたのである。随分ひどい想像であるが、伏鉢をつくる事を最初に忘れ、どうも纏らないものにしてしまったが、殆んど人の行かない險阻な岩の頂上へ、ほんとうの信仰心から建立するのだから、別に造り直すこともしないで、其儘にして丁ったのではあるまいか。たとひ形式化したため單に裝飾になつて了つたにせよ、大切な伏鉢がなくては無意味であらうが、夫は我我の考へるつまらない理窟であり、建立者にはそんな事はどうでもよかったのかも知れない。

然るにもう今からざっと十年も以前のことだが、某氏が某雜誌に石塔や石燈のことをかき、其中にこの塔に就いての記載があったのを見つけた。某さんは【信濃奇勝錄】にこの塔の圖がのせてあるが、その圖は想像で描いたらしく大

變に違つてゐるけれども、地方の人の注意を惹くには大に効果があつた、と記されたが、これは小山さんの報告書中の文句と符節を合せた如くであり、其論文中に極めて小さい（高さ約一寸三分、幅基礎で約六分五厘）圖がのせてあつたが、其圖は某さんが想像でお描きになつたものらしく、第一が基礎の各面中央に縦の線があり、第二に笠の軒口が上幅も下幅も同じで、つまり細長い長方形であり、第三に四隅の突起は到底あり得べからざる様な形がかいてあり、第四に全く缺いてゐる伏鉢があり、第五に實在してゐる寶珠がない。つまり第九つ目の輪の上から折れた様にかいてある。いくら素人でも随分でたらめをかくものだ、少なからずあきれざるを得なかつたのである（一七）。【信濃奇勝錄】所載（私はこの本を見ただか知らない）の圖は、實物を調査しないのだから、大變に違つてゐるとお書きになつたが、御自身も亦實物を調査なさらずに、人の書いたものをおとりになり、いい加減な圖をおつくりになつたのだから、甚だお氣のどくな次第である



右、一六。佛岩寶篋印塔見取圖。

左、一七。同 想像圖。

一六に於いては、笠の軒口が上廣く下狹く、四方の突起を失ひ、相輪は伏鉢なく、第一輪が露盤上に直に接してゐる。併し柄がつくりだしてあるのでみると、當初から伏鉢はなかったものか、又は何かのはづみに柄が折れでもしたので、伏鉢をとって柄をつくり出したか、其邊がはつきりしない。とにかく現状はこの通りである。一七は全くの想像で描いたものの如く、失った突起と伏鉢をつくり、現存してゐる寶珠を失った様にかいてあるのは不都合である。

が、猿の尻笑ひといふ様な結果になつた様である。私は決して某さんを閉口ますつもりではないが、何ぼ何でも餘り間違ひがひど過るから、私のつくつた見取圖と並べて参考のためにだしておく（一六・一七）。

次に梵字であるが、其梵字がさっぱり何だか判らないので、自分ではできるだけ調べてみたが、どうも結果が思はしくない。そこで例の慣用手段をとり、遠齋九郎さんにどうか讀んでくださいとお願をした。面倒なむづかしい事は人に考へて貰ひ、其間に先の餘り長くない身は、他の仕事をした方が時間と勞力と腦力とが大分儉約になり、一石三鳥といふ所である。かうお願をしておく、適當な時にお返事を戴ける。遠齋さんも神様ではないから、お判りにならない時もあるかも知れない、その時は判らないといふお返事がある事と確信をしてゐるが、未だ嘗て判らなかつた事はないのだから、安心をしてゐた所、豫期の通り間もなく、あれは寶篋印陀羅尼を途中から書いたのだと判つた。

物が寶篋印塔であり、夫に無やみやたらに梵字があるのだから、及ばずながら小生と雖も、或はそんなものではあるまいかといふ様な見當をつけて、夫と首っ引もした事はしたが、夫は初めから書いてあった時に見當はつけ得られるかも知れないが、どうも途中から書くなんか以てのほかである。スリーピー・ホローの化けものの様に、首無しでは素人には見當のつけ様がない。さすがに梵字の隠れたる大家だけに、遠齋さんはいつもの様に御高教を賜はった。ここに敬みて深厚なる謝意を表して筆を擱く。

(昭和十七年十二月三十一日稿了)

コヅナに就いて

長野縣小縣郡滋野村に、もう彼此二十年も御懇意を願つてゐる山浦政さんといふ方の本宅がある。山浦さんはある中等學校の校長さんで、平素は滋野村か

ら遠くない所に住んで居られる。私はほんの不圖したことで最初お近付になったのであるが、古美術に就いて深い關心と興味をもつて居られるので、こんな點が共通してゐるせゐか、永年に亘りおつきあひをしてゐるのであるが、實はコヅナがはつきりと判らないので、去る一月某日思案の結果、山浦さんへ伺つてみたのである。ところが、縦からも横からも、更に十文字に検討され、これなら間違はないといふ、洵に痒いところへ手のとどく様なお返事を二月八日に戴いた。人から何かきかれたら、かういふ風な態度で返事をするものだといふ事を教へて戴いた様な氣がして、うれしかったから、山浦さんのお許を得て、其返事の一節を掲げることにした。送つて戴いた圖は其まゝ凸版にして掲出した(一〇の一・一〇の二)。

……實は私にも「コヅナ」が解りませんものだから直に現在の大門國民學校長小林俊樹君に依頼してやりましたところ幸にも老大工で知つてゐるものがあつたので聴取して書きわざ／＼學校まで来てくれましたが私が出張留守なので例の「松本さん」が小林校長より聽き取つてそれによつて概略圖を



一一。今井千尋氏邸正面破風

(長野縣諏訪郡平野村今井・大正十三年八月十日)

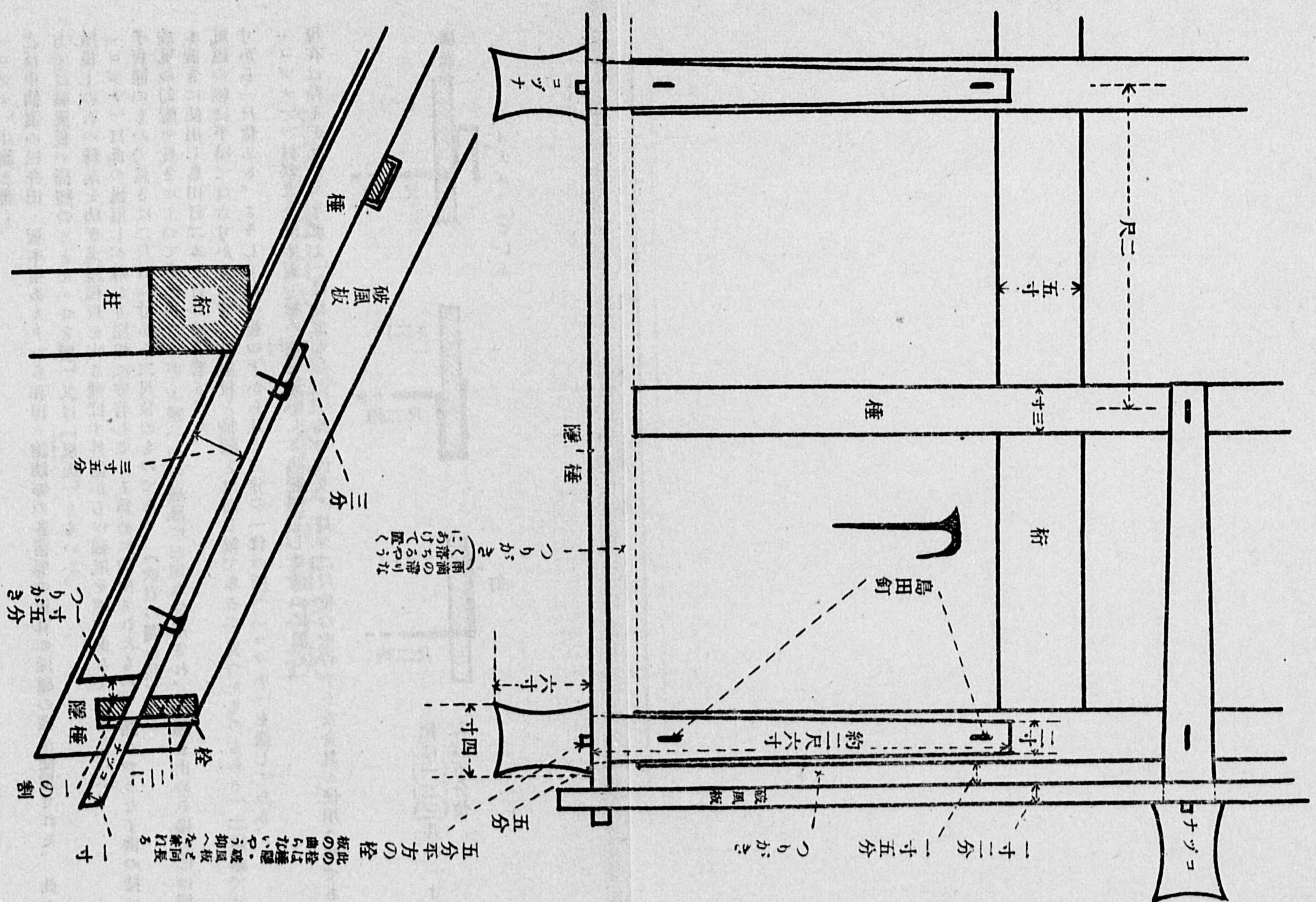
破風のコヅナ(小綱)と、併せて拜みの懸魚及び其上の裝飾とを見せる目的の寫眞。前圖と比較する時は、破風板を其位置に固定するためのコヅナと其桙とが、はっきりと判る。尙ほ正面破風の拜みには、(形はどうせ新しいからよくはないが)大きな立派な懸魚が下がつてゐる。斯様な懸魚は格式の高い家でないとつけられないさうだ。破風の拜みの上の、鬼版の乗る位置には、大きな平たい上端を反らした板の飾りを置き、上には鳥衾に相當する様な木片が取りづけてある。小綱も漸くなくなり、一〇の二に説明してある様に一種の鐵釘を以て代へられる様になってきてゐるさうだから、これ等

もいづれ腐朽したら最早ほんとうの木製コヅナは用ひられないだらう。

かきくれたので更にそれを寫して差上げる様な次第です。

と、これで見ると不用意な老書生の質問が、知らず識らずの間に皆様に随分御迷惑をかけてしまひ、何とも申譯のない次第であつた。松本さんが最初に製圖をしてくださったのを、山浦さんが更に寫して送ってくださったのである。其圖が専門家はだしであり、解説簡にして要を得てゐること、恐らく讀者も一讀三嘆されるであらう。而も大門國民學校の校長さんが、態態御多忙中にも係らず、山浦さんのところ迄返事に來てくださった結果であることを思へば、いくら不用意な老書生でも皆様の御親切に對し、心からなる感謝の意を表したのであつた。

(昭和十八年四月二十二日追記)



一〇の二、小網の説明。此説明はY氏より送られたもので、原稿は薄美濃にインクを以て認めてあったのを便宜活字にしたものである。

「コツナ」小網と書く。

之は中仙道の松井田・坂本宿あたりから和田・諏訪等の各宿場の板葺の屋根の家に使用された。此の地方では破風板や極隠のことを「せき板」又は「風返」ともいふ。

屋根上の石の轉落を防ぎ又屋根板を吹き飛ばす外側からの強風を返すからであるといふ。

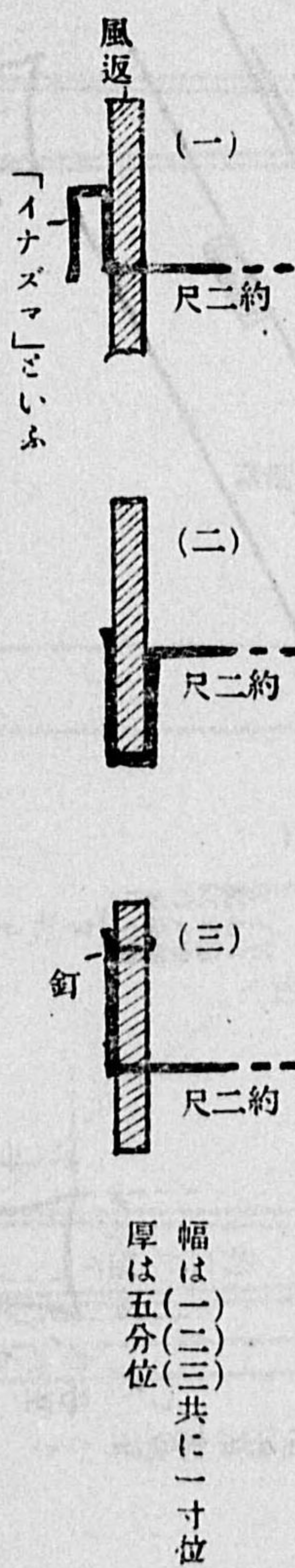
「コツナ」は此の風返しに確かり屋根に安着してゐる爲めに使用されたもので圖のやうな子供の持つ羽子板様のもので長さは二尺五六寸から三尺位のものである。(次頁の圖参照)

破風の勾配や長さによつて多少異なるが大體一つの破風に三四本使用され、極隠を止める場合には極一本置きに使用し島田釘二本を打つて安着された。

風返の幅は平屋では六寸から八寸(破風板と極隠とは同じ幅であるが異つたものもある)二階建では八寸から一尺位ある。さうして此の板の下から凡そ三分の一位の所へ「コツナ」を通してある。

「コツナ」の材料は全部栗板で松の煙を溶かして防腐劑として塗つて置く。

現在は殆んど此の「コツナ」は見當らない。其の代りに長さ二尺位の次のやうな金具が使用されてゐる。



多治速比賣神社本殿向拜手挾

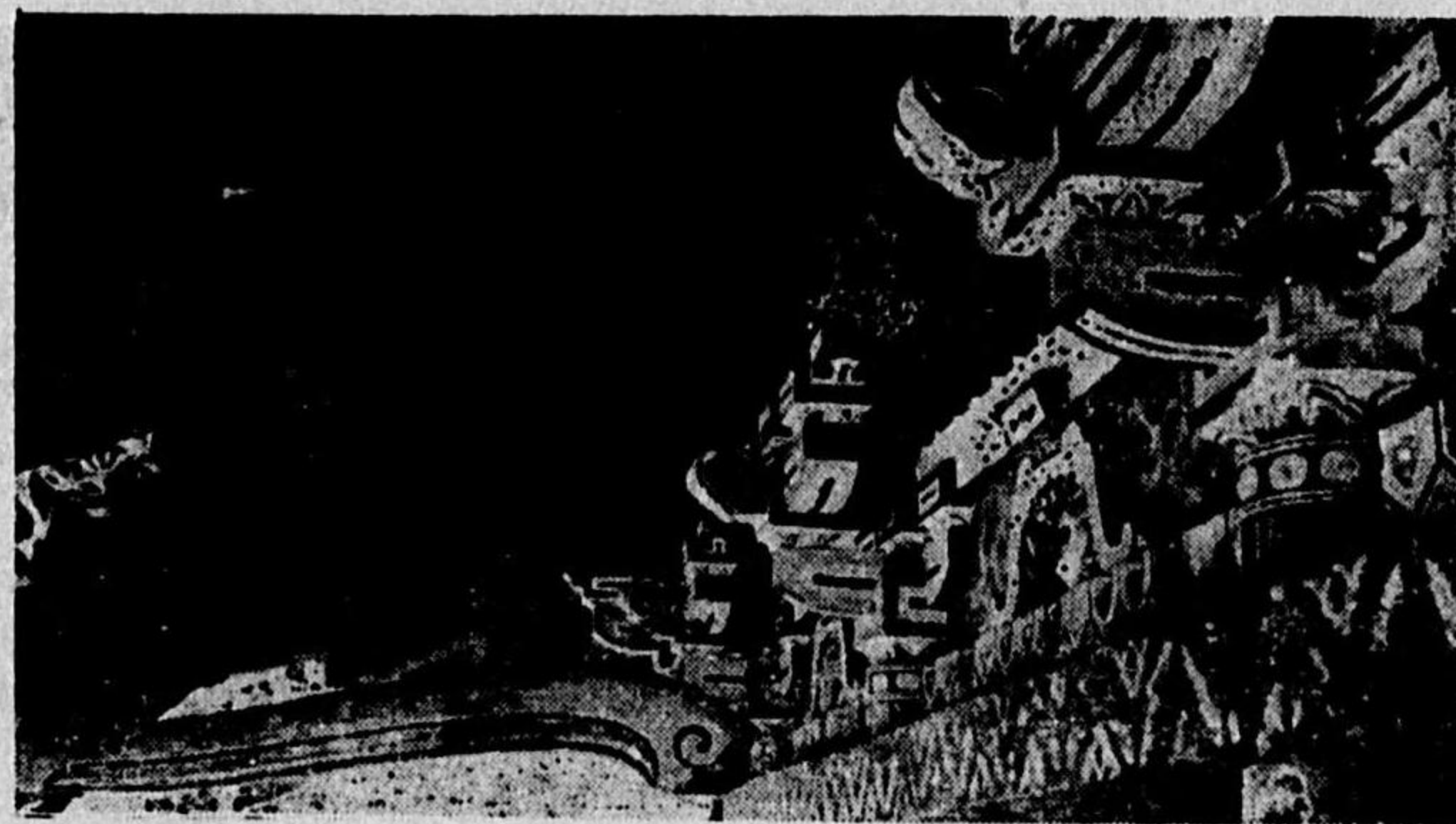
今では最早はつきりと記憶してはいないが、たしか昭和十一年の夏であったらう、大阪市東區豊後町の懷徳堂で近付になったNさんから數枚の寫眞を見せられた。さうして未だ殆んど誰も知らないが、こんなお宮さんがあるから、見込があつたら一度見に来てはどうかと誘はれた。手挾・墓股・木鼻・料拱等を大きく中版にとつたもので、近年彩色を新にしたため臺無しにしてつたのは惜しいが、物は中中よろしく室町位ではないかと思はれたので、早速おじゃま致し度く考へたが、いろいろの都合で漸く翌十二年五月七日に、遠齋九郎翁をお誘ひ申上げて出かけたのが最初であつた。

神社は大阪府泉北郡久世村和田にある。私はもう全然失念してつたが、遠齋さんの談によると難波驛から電車で堺東驛下車、驛前からバスで和田といふ所迄行き、そこから三町位歩いた。Nさんは堺東驛へ出迎へてくださったので、バスでお宮さん迄連れて行つて戴いたとの事であつた。遠齋さんは御老體では

あるが、頭腦明晰記憶力は壯者を凌ぎ、大分以前の事を恰も前日の出來事の様にはつきりと言はれた。

神職吉田民藏さんは、よく來たとて大に歡迎してくだされ、おかげでいろいろの寫眞をとる事ができたが、實はつい近頃になって、其手挾の一に浮刻にしてある蠅螂の寫生がしたくなり、遠齋さんに準備を願ひ、二度目で昨年十二月四日に參拜をした。雨が降つたので豫定が一時間後れ、堺東驛に下車したのは大體十時半であつたが、和田方面行のバス（片藏（カタクラ）行へのものだが）はつい二三日前から二時間隔となつたさうで、次は十一時一分にでるといふのを、行列をつくつて待つてゐたら、漸く十一時半にでたのはいいが、超満員といった有様で身動きができず、四十分を費して十二時十分和田着、徒歩十分で社務所に着いた。

此時も吉田さんは前回同様に便宜を與へてくださった。梯子の片方へつぎ足しをして手挾へ掛けるのを手傳つてくださった。頭が悶へるので窮窟な思ひを



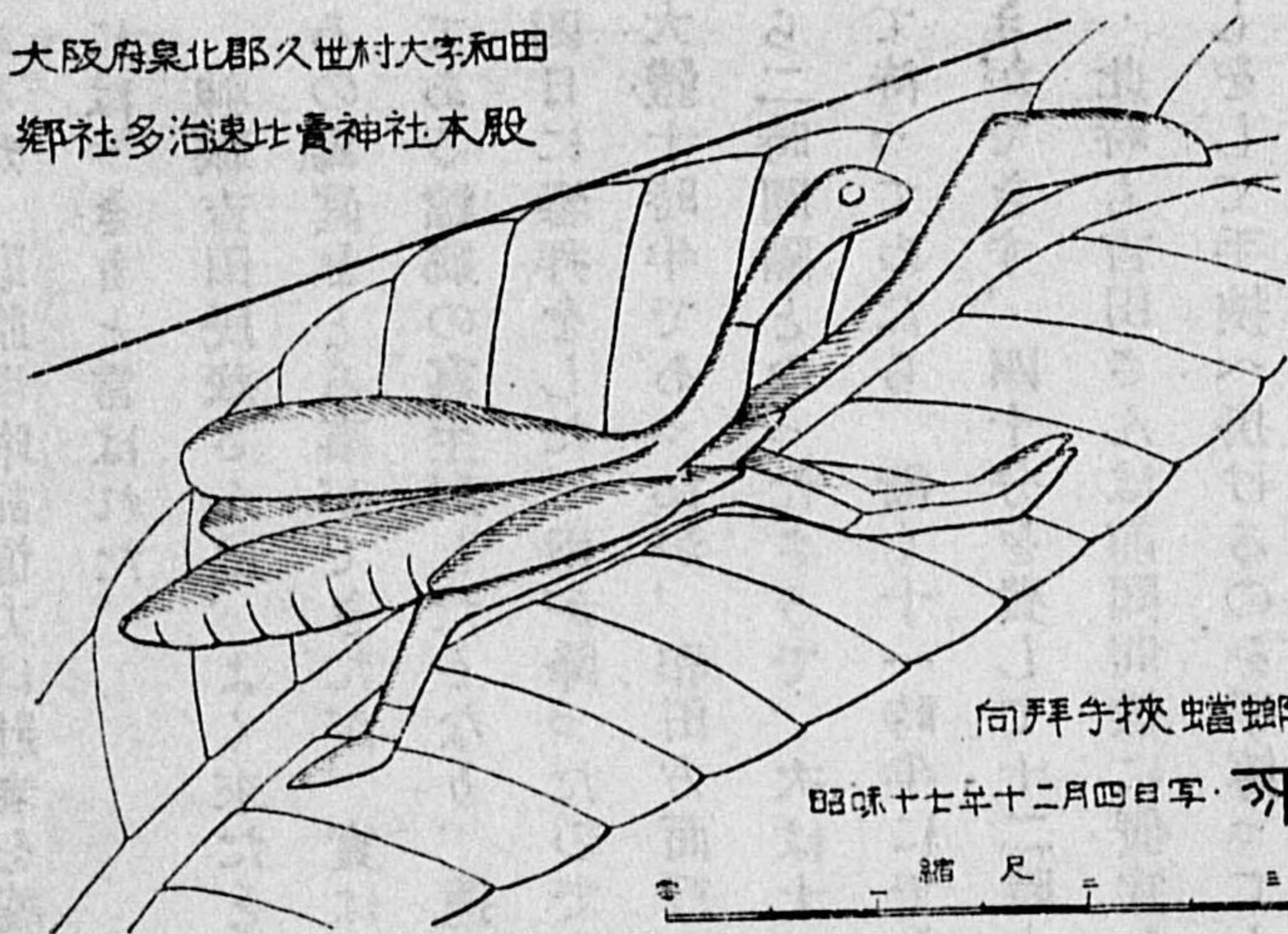
上、二五。多治速比賣神社本殿正面部分(一二・五・七)。

下、二六。同 向拜東裏股の裏面。

(昭和十八年一月二十五日・遠齋九郎氏)

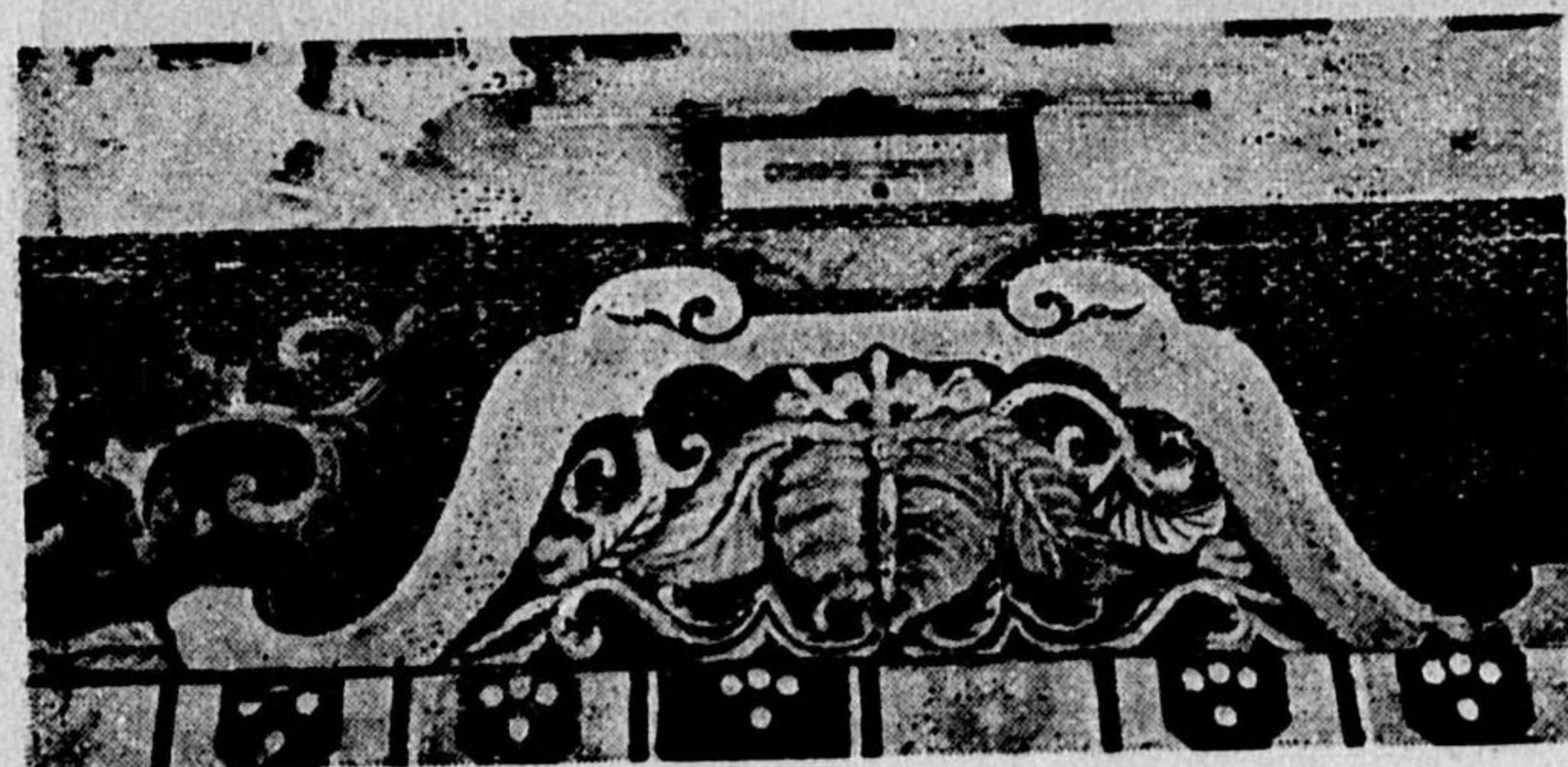
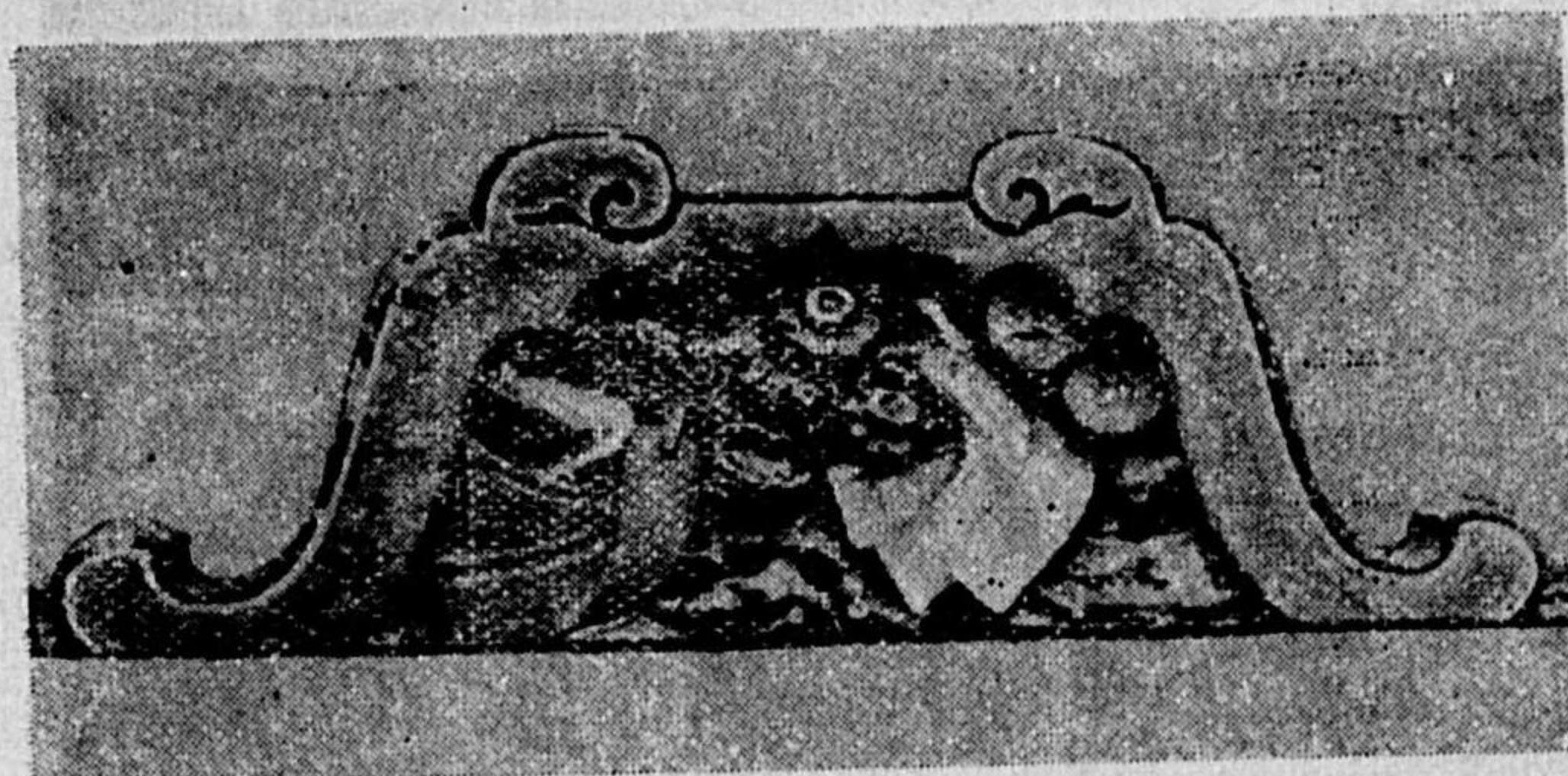
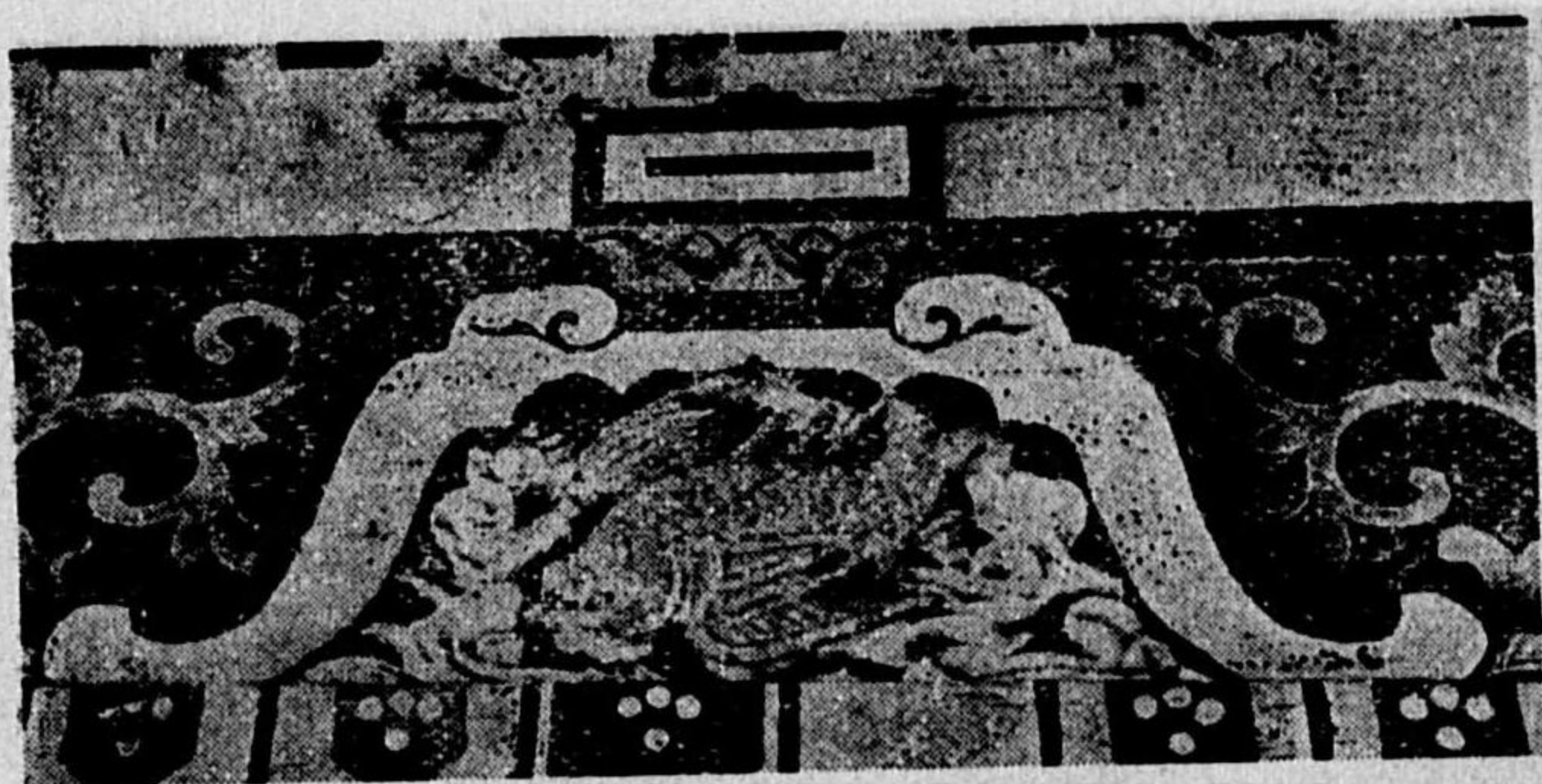
上圖により料拱は和様出組、料拱間は裏股を以て裝飾してあることがよく判る。正面中の間裏股は、二八に示してある。下圖は向拜料拱間の三つの裏股の内東端(西端のも同じ)のものの裏面で、雲に寶珠一つを刻んであるのは面白い。正面は牡丹に唐獅子。

大阪府泉北郡久世村大字和田
郷社多治速比賣神社本殿



二四

脚が三對即六本あって、初めて昆虫たる資格の一が備はつてゐるのである。蟬螂は昆虫だから脚が六本あるのは當然だが、生來肉食だから、自己保存のため、第一對の脚が非常に進化して鎌状をなし、他の昆虫を捕へるのに適してゐる。陸棲のものでは、カマキリ及び其一族以外に、相當の大きさのものはゐないから、この鎌は大に目立つ。その様なところから、大變に誇張して彫刻をしてあるのであらう。同じく六本の脚のうち、ある種の蝶に於いては、第一對の脚が反對に退化して了ひ、第二・第三對の四本だけで用をなし、退化脚は胸につけてゐるから、捕へてさがさなければ判らない。此等は何れも必要に應じていろいろになるのだから、さういふ點は非常に面白いのである。此カマキリの彫刻に於いては、右方の鎌と第三對目の右脚とは、少し離してほつてあつたせゐか、惜しい事に折れて了つた。



上、二七。多治速比賣神社本殿正面北端裏股

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十二年五月七日)

中、二八。同

中央裏股

(昭和十八年一月二十五日・遠齋九郎氏)

下、二九。同

南端裏股

(物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十二年五月七日)

此建物には裏股が向拜に三・正面に三・兩側面に一つづつ、合せて八個用ひてある。背面は糞束。この八個の裏股の内、向拜の三個は表裏異なった彫刻が入れてあり、兩側面は二つとも同じで、共に「鯉・松・瀧・波・雲」をほってある。本殿正面料拱間のは、上から順に「鯉」(?)・「山茶花」(?)に松に幣・「桐」であるが、二八・二九の裏に夫夫次の様な墨書がある。

おもて?の

おもて

うち

うち

北方

中

本殿は東面してあるから、北といふのは向って左端である。してみると現今中央にある「山茶花」(?)に松に幣」は元は左端ので、右端の「桐」が中央のであったのである。即ち二八・二九は一つづつ順繰りに左へより、二七が右端にきて「桐」の位置にあった筈である。文政二年の修理の時にでも、いい加減にとりつけたのかも知れない。

此等三つの裏股の内、「桐」が最も平凡で、これは類例はいくらもある。次は二八が面白い。山茶花らしいものが梅だと一層面白いが、さう註文通りにはいかない。二九は多分「鯉」であらう。胸鰭が発達しすぎてはゐるが、どうも鯉らしい。果して然らば頗る愉快である。

しながら寫生をしてゐる間、遠齋さんは傍で話をしながら相手になってくださった。か様な次第で一時間餘りを費し、下手ではあるが私の見た最古の蠅螂の寫生はできた(二四)。併し何分泥繪具で厚化粧がしてある上、右前肢と右後肢が一本づつ折れてなくなつてゐたから、折角骨を折つて下手は下手なりにした寫生は、乍遺憾實物とは多少の距離があるのは覺悟をしてゐる。

斯の如く目的は容易に達せられたので、時計を見たら十四時が相當に過ぎてゐた。まだ墓股も一通り全部に互り見たかったが、本殿正面の中央にある「枝に金銀の幣を吊つてある山茶花(?)・松」を見ただけで更に他日を期して社務所へ引あげた。Nさんはおいでがなかったが、前回見えたKさんは再び來會され、吉田さんお心盡しの歡待をうけ、遠齋さんも私もはじめて神酒しろきを戴き、十六時半のバスで堺東驛歸着、乗物の都合は甚だよく、十九時半頃歸宅する事ができた。

此本殿は西面し三間社入母屋造で正面に千鳥破風があり、大きな向拜があつて夫に軒唐破風がついてゐるから、全體としては相當に複雑な建築である(一八・一九)。此機會にもう少し詳しく書いておく事にする。

三間社で向拜柱は大面取料栱三科だが、本殿のは圓柱で料栱は出組(二五)。向拜柱一邊約四寸五分(乃至六分)に對し、面見付五分、即其比 $1\frac{1}{9}$ 。向拜料栱間は墓股で、中央の分は

表、龍・雲・浪。(此は表だけの裝飾墓股)

左右の分は

表、牡丹に唐獅子。裏、雲、中央に寶珠一(二六)。

本殿正面及び側面共料栱間墓股で

北(向つて左端)、鯨?(原始的飛龍とも見られる)(二七)。

中、央、松・山茶花(?)・幣(二八)。

南(向って)、桐(二九)。

側面は左右共同一で

浪・雲・松・瀧・鯉魚。(但し南側の分後補)

を入れ、後面は料拱間總て撥型の蓑束にしてある。丸桁が随分上方に反ったりしてゐるため、極は不揃で見たところ大してよろしくないが、化粧飛簷隅木の先が特殊の線形を有すること、高野山金剛三昧院多寶塔・木積釘無堂の夫の様にしてゐるのは、事小なりと雖も注目し値するものと思ふ。破風の妻飾等は何れも後補で感服しかねるが、向拜の木鼻は鳥頭の如く獸形の如く大分變つた珍しい形がつけてあるし、其桁隠は南側(向つて右)の分だけではあるが、當初のものが残つてゐる。其他場所によつては極の下端に面をとつたり、可なり注意をしてゐる。相當注意をして修理したら、見違へる様に立派になるであらう。

何にしる今では毒毒しい彩色がしてある上に、本殿正面の墓股も、文政修理

の時か又は其後間違へたものか、其位置が變つてゐる。といふのは現在中央のもの(松・山茶花・幣)は北端即向つて左方ので、右端の桐が中央のであつたのだから、自然向つて左にある鯉(?)が右即南端に來なければならぬのである。どうして判つたかといふと、とれかけてゐたので、盜難を恐れて神社へ注意しておいたところ、次に行った時に二個ともはづしてあつた爲、裏面の黒書で判つたのであつた、即夫夫「おもてののうち北方」「おもてうち中」といふ文字で知れたのである。式内社ださうで延喜式卷第九に

多治速比賣命神社

とあるが、折角の檜皮葺を臨時に亜鉛鍍の平板で覆うてあるので、遺憾ながら見劣りがする。本殿の屋根裏から次の様な棟札が見出されたさうで、今社務所に保存してある。大分ひどくなつてゐるが、長一尺七寸幅三寸厚三分五厘、材質は梅らしい。

天

文十二年丑二月廿四日□建久貳百九十壹年ニ成文政二年与

文政二年卯十一月廿五日大工棟梁太平寺村 藤原重兵衛

年番太平寺村木寺三左衛門

同 久兵衛

役人壹人つゝ毎日御奉行

字數不明

中氏子二人つゝ番人足共

其表面書き起しの「文十二年丑二月廿四日……」の一番上の字は「天」でなければならぬ。即「天文十二年云云」の「天」がとれてなくなったのであらう。果して然らば天文十二年は卯歲(卯)であり、丑歲(辛)は二年前の天文十年でなければならぬ。マア「丑」は「卯」の誤りとして、「天文十二年」

とすると、文政二年迄は二八七年となる。若し二九一年を正しいとすると文政六年にならなければならぬ。干支(實は干はなく、支だけだが)を誤った上に年數の勘定迄間違へたのは、少なからず念入だが、夫はどうも仕方がない。天文の棟札は既に亡失して了ったのだから、この勘定の合はない寫しでも今となつては貴重品である。夫で今天文年間の再建を是認すると、此本殿が室町時代の様式を現はしてゐるのとよく一致してゐる。そこでたとひ隨所に多少江戸時代の後補があるとしても、室町建築たる事は確かだとなつてくる。さうすると向拜手挾が透彫である事と、其兩面の彫刻が面白くなつて來るのである。

向拜の手挾は左右二個あつて兩面彫刻を異にしてゐる(二〇—二三)。斯様な形式の彫刻をもつた手挾は、既に鎌倉末に現はれてゐるのだから(奈良縣宇陀郡宇太村大字古市場・縣社宇太水分神社本殿)、室町にあるのはいふ迄もない。ある一定の厚さをもつた板を所

要の深さにほり凹め、其凹めた部に彫刻を浮き出させる。つまり一種の「肉合彫」である。輪郭に添ひて刀を直角に入れ、あとを浮き出させるのではなく、初めから刀を斜に入れて、彫刻を浮かせるのである。この向拜の分は、その兩面の圖案

- 左。(一) 左面、芭蕉に蟻螂。(二) 右面、水に蓮。
右。(三) 左面、海藻に貝類。(四) 右面、水に花菖蒲。

であるが、左に簡單なる解説を試みておく。

(一) 芭蕉に蟻螂 (二〇・二四)。

植物は實は芭蕉か何か判然しないが、葉の工合から考へるとさうらしいので、假にさうきめておいた。幹から四枚の葉を出し、蕾も出て居り、右の方に出てゐる大きな葉の上に、一疋の蟻螂が敵(獲物であらうが)を抗撃する姿勢でとまつてゐる。芭蕉は渡來植物で、白井博士の【植物渡來考】によると原產地は支那ださ

うで、平家物語や源平盛衰記等に芭蕉の葉が風に破れる文句があり、又東鑑には芭蕉が開花した記事があるさうだから、夫等によつても漸く裝飾として建築彫刻が發達してきた室町時代に、かういふ所に用ひられたのは當然かも知れないが、ここ以外未だ見た事がない。

葉上の蟻螂は前肢(即武器に變形したもの)に少し誇張があるだけで、可なりよく出來てゐる。室町時代の彫刻家としては、餘程いい瞬間を把握したものである。特に獲物に向つて飛びかからうとしてゐるところで、翅をひろげかけ、胸部を起し、鎌を一ぱいにひろげてゐる、惜しい事に浮彫にしてある中肢を除いては、前後肢共右側の分は折れて亡くなつてゐるが、其姿勢は實に勇壯活潑、よく此蟲の習性を捕捉してゐるのは、洵に敬服にたへない。殊更に鎌を誇張してあるところは、多分此彫刻家が特に意を用ひたのであらう(二條城二の丸御殿欄間の蟻螂の項参照)。葉の上には何か蟲でもとまらしてあれば申分はないが、生憎芭蕉の葉の上などには、蟻

螂が捕へる様な蟲はめったにとまるまい。だから強ひてこの彫刻の缺點を探し出せば、相手が居ないのに蟻螂は何に飛びかからうとしてゐるのか、といふ事になる。けれどもよくできてゐる。此蟲の習性を多少なりとも觀察しなければ、これだけの彫刻はできまい。

(二) 水に蓮 (二二)。

蓮とかいて「はす」といつてゐるが、ほんとうは「はちす」ださうな。右同書に「亞細亞溫帶地方に自生す……普通の蓮は滿洲邊にもありと言へば渡來の年代詳ならず、古事記に雄略天皇の御製に答へたる赤猪子の歌に蓮花の事見ゆ……」とあるのでみると、随分古くきたものらしい。何にしる建築の細部には飛鳥時代から用ひられてゐるし、繪畫・彫刻も亦然りで、天壽曼荼羅繡帳にも法隆寺金堂天蓋にも、乃至佛像光背にも、どこにもここにもある。其以降各時代にある。其蓮が生えてゐるのは古代建築の支輪板、臺股内又は後世棧唐

戸綿板の彫刻、軒瓦の文様等は少しも珍らしくはないが、手挾の側面等に用ひられたのは、これ等は古い方であらう。

葉は卷いたのも開いたのもあるし、花も蕾もあるが、桃山になると、もっと發達して込み入ってくるし、又精巧な透彫もできたのである。(奈良市・法華寺本堂向拜手挾、大津市・圍城寺金堂向)これ等がもう一層進歩すると菊や牡丹の透彫・籠彫等と同様で、彫

刻としては美しいが手挾としては其本來の意義を失つたので、墮落の第一歩を踏みだしたといふべきである。

(三) 海藻に貝類 (二三)。

海藻はいつも貝につきもので、斯様な意匠は手挾や臺股脚内の彫刻等に於いて、桃山以降左迄珍らしくはないが、やはり其元は室町であつた。私は未だ鎌倉のを見た事はない。常識で推定しても、恐らくは未だなかつたのであらうと思はれる。

海藻は昆布か若布か何か知らないが、天人の天衣の如くで、ただわけもなく空隙を充たしてゐるだけだが、貝類は何れも誰でも知ってゐるものばかり。これ等のうち判然してゐるのは「アワビ」「ホラガヒ」「ハマグリ」「ホタテガヒ」と「ウニ」とである。蠃螂の習性を観察した彫刻家は、ウニの研究はしなかつたと見えて貝の中に入れてゐるが、此は仕方がない。ウニは刺が一面に生えてゐるから、毬に入つてゐる栗と誤られる虞が多分にあるせゐるか、いづどこにあつても、きまつて裸にしてゐる。

私が子供の時分にも、町に繪草紙屋といふのがあつて、店頭に彩色一枚摺乃至三枚續きの様な美しい繪を賣つてゐた。私共が買ふ事のできたのは最低級のもので、大概一枚一錢であり、魚盡しとか蟲盡しとか、至極原始的の繪がかいてあつた。魚盡しには烏賊も蛸魚も一角も鯨も蛤も淺蜆も何れも魚に、又蟲盡しの中には蛇や蛙は勿論、蝶・蛾・守宮・蜥蜴等も入れてあつた。外國でも Curle

fish だの Devil fish だの Jelly fish だのといふのだから、昔は仕方がないと

我慢しても、近頃でも蛙を蟲の中に入れてゐる人があるのだから、少しばかりあきれるのである。だから室町時代に貝類の中に海膽位は何でもない。

(四)、水に花菖蒲 (二三)。

假に花菖蒲としておいたが、「カキツバタ」か「アヤメ」か何か判らない、「イチハツ」かも知れない。いづれにしても「アヤメ科」の植物たる事は誰人も疑ふ餘地はあるまい。これも亦桃山には珍らしくないが、多くは墓股の兩脚内に用ひられてゐるので、手挾の裝飾に應用した實例は稀である。實は土佐神社向拜手挾の夫と共に、目下小生の知つてゐる二例の一で、これにより此種の花が建築裝飾として室町時代から用ひられた事が判つた。桃山時代以降、相當に流行はしたが、其實前代の踏襲に過ぎないのである。

池中から生えてゐる菖蒲(?)は、蕾が二つに花が二輪、あとは葉でうまく

間隙が埋めてある。不規則な輪郭内に無理に入れたから、上から押しつぶされた様で、多少形が不満足かも知れないが、さう言へば隣りの蓮だってさうである。蓮の方はまだいいが、菖蒲は大分無理がある。

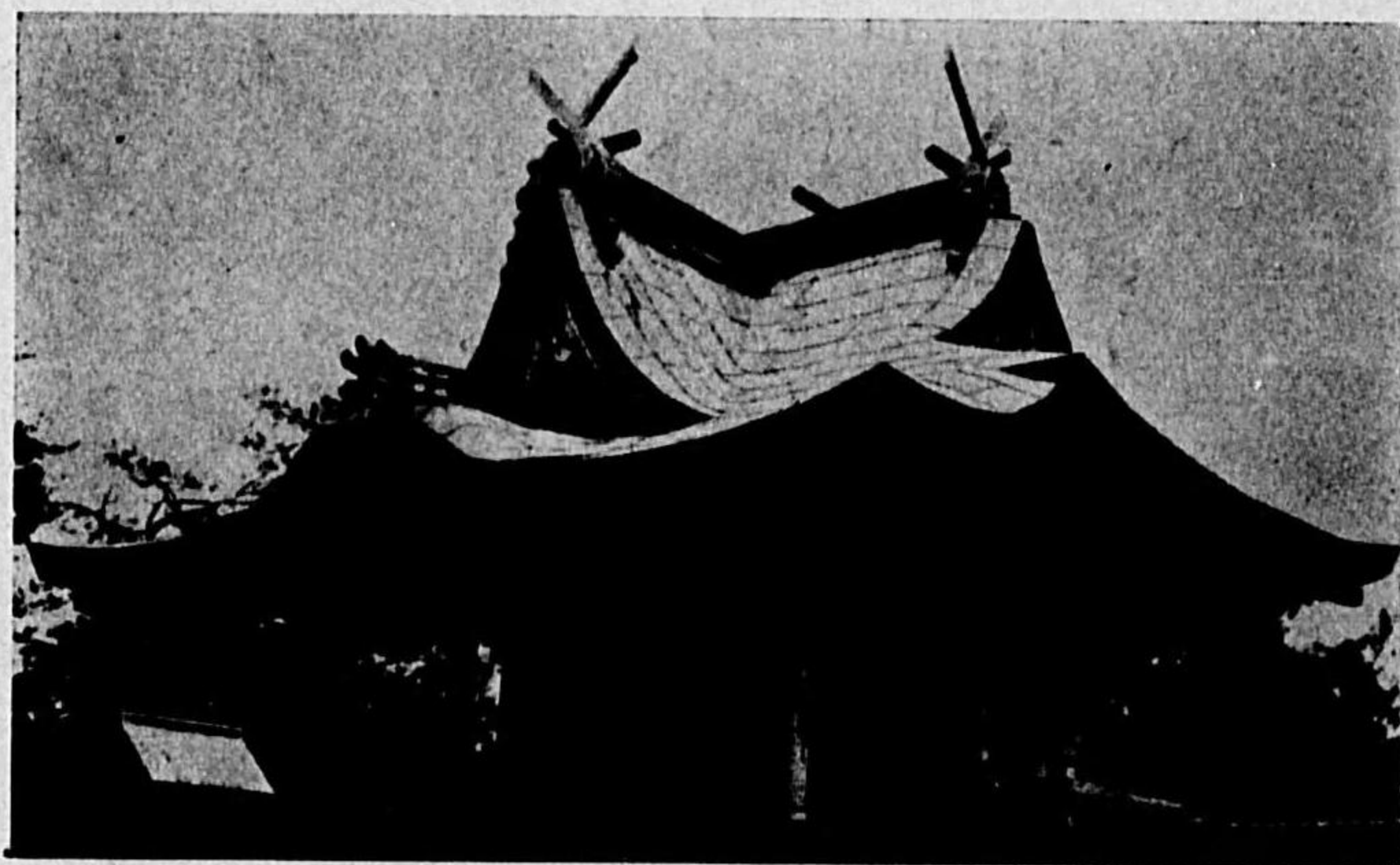
此様に繪畫的でなくて、大きな花一つが中心飾をなし、これが主眼で左右に葉を添へ、夫が附屬物の様な觀を呈してゐる圖案的のは、もう少し早いところ、即大福光寺（京都府船井郡高原村大字下山）多寶塔初重墓股内の彫刻に用ひてある。だから比較的精確にいふと、花菖蒲は最初は鎌倉末に建築彫刻に採用され、室町に入りて進歩して繪畫的となり、桃山になって相當に賞用され、江戸に於いても同様であつたと考へられるのである。さうすると此手挾は繪畫的花菖蒲の建築彫刻としては、初期に屬する貴重な實例といへるのである。（昭和十八年一月五日稿了）

元來此種の植物は餘程特別の事情のない限り、水中又は水邊の泥土から垂直



に生えるべきである。然るに墓股にせよ此手挾にせよ、輪郭が輪郭だから眞直には生長ができず、南禪寺大方丈廣椽欄間の竹と同様、無理に曲げて輪郭内におさめてあるから普通である。然るに筆者は寛文十一年再建されたといふ書寫山圓教寺奥の院（開山堂）背面右端の料栱間墓股に於いて、多くの此種の植物が眞直にのびて何れも上部に花をつけてゐるのを見た。ところが何れの花も大概輪郭即兩脚のところにはみだして刻してあつた。つまり後世だから内部の彫刻が輪郭へはみ出してしまったので、これが幸になつたのである。輪郭を無視してまで内部の彫刻が幅をきかしてゐるのは面白くないが、こんな場合には好都合である。序だから書いておいたのである。（昭和十八年五月五日追記）

■版二〇—二三の表題中の「東」は「南」、「西」は「北」の誤記につき訂正す。



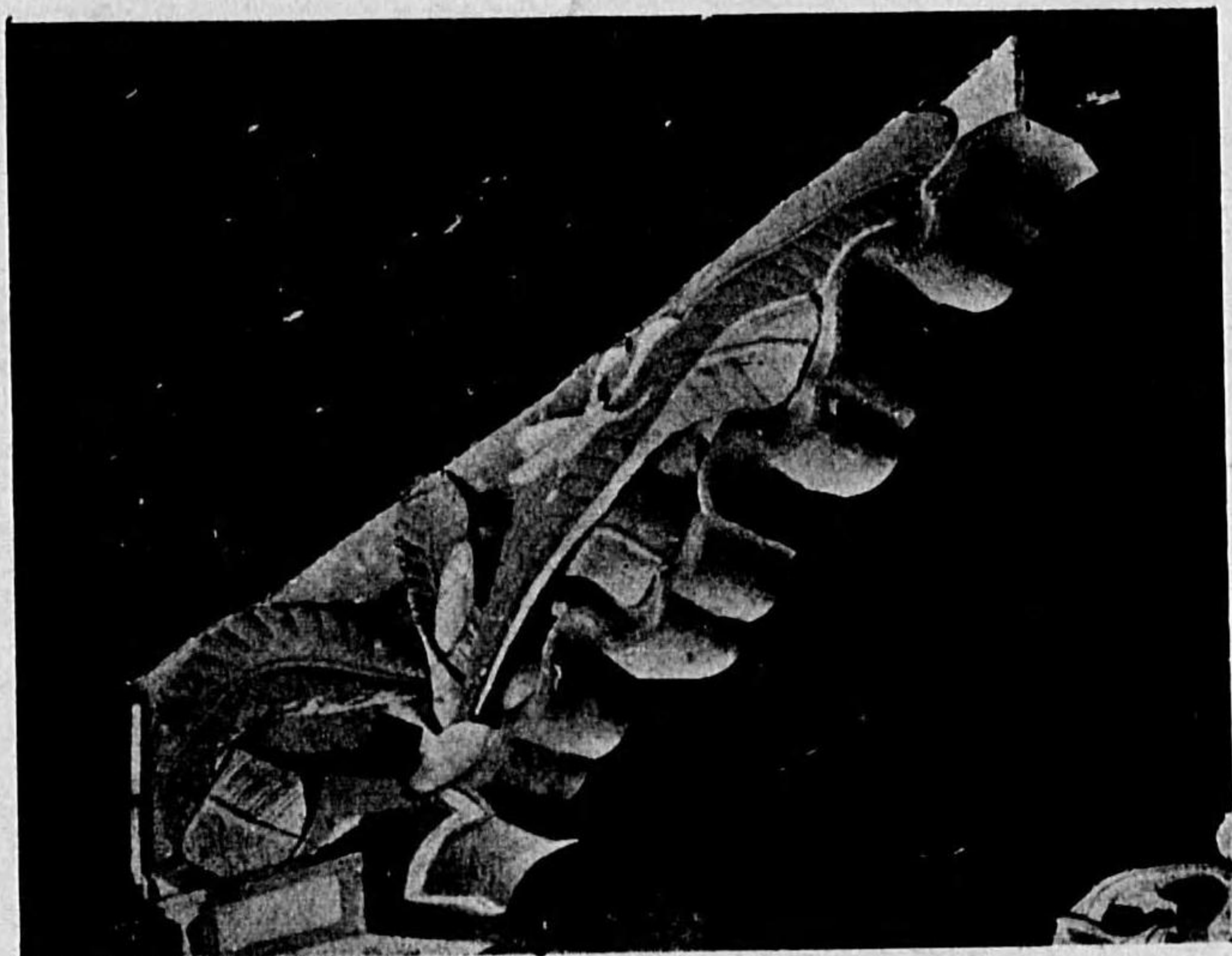
上、一八。郷社多治速比賣神社本殿正面部分
下、一九。同

左側面

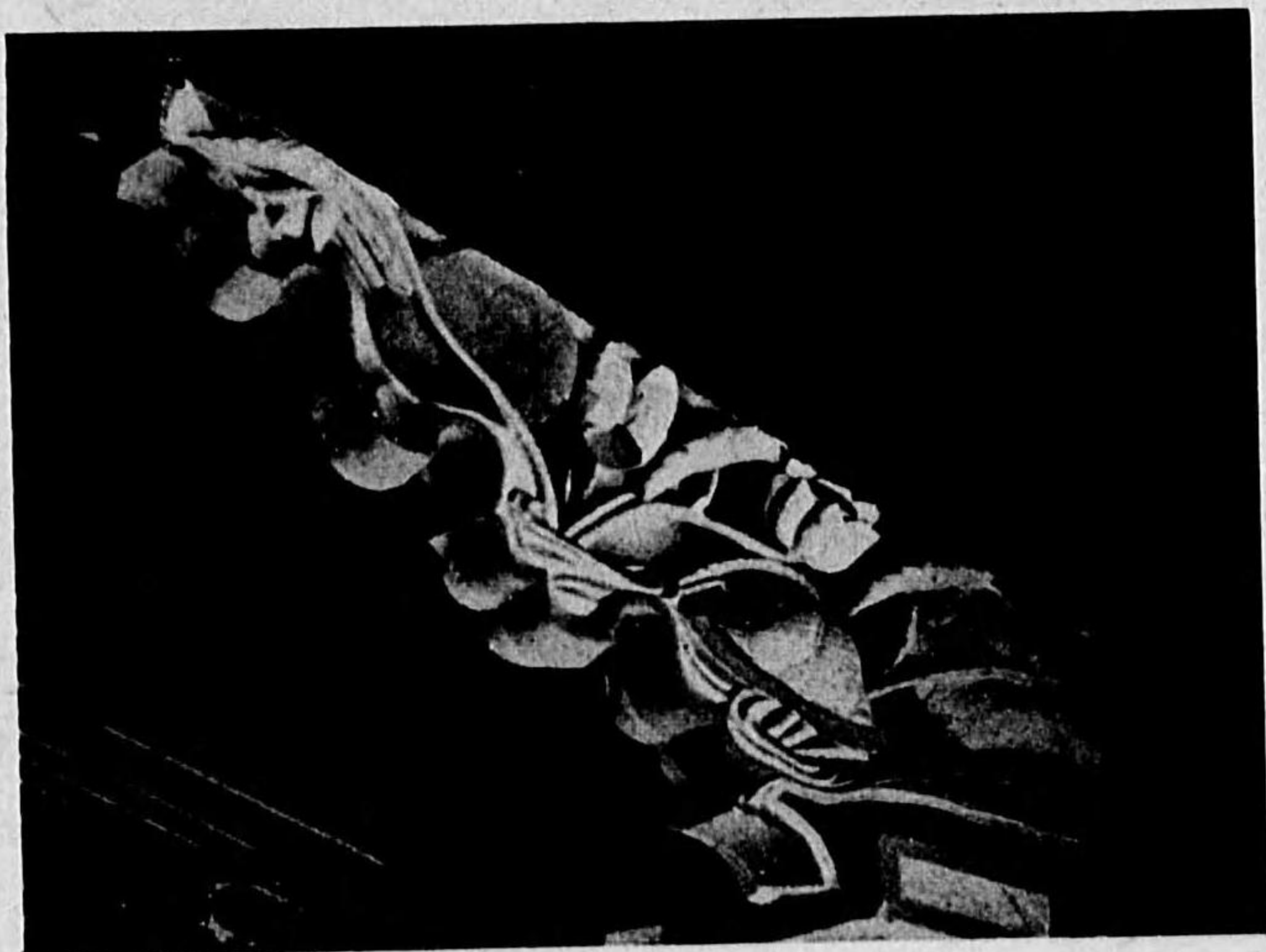


(兩圖共昭和十二年五月七日)
三間社入母屋造に、軒唐破風をもった大きな向拜がつき、本殿の正面屋上には千鳥破風があるので、頗る賑かな外観を呈してゐる。元は檜皮葺であつたのに、現在は亜鉛鍍板を以て覆ふてあるのと、彩色を新にしたのとで、遺憾乍ら可なり見劣りする。向拜の手挟は何れも透彫にしてある。

上、二〇。多治速比賣神社向拜東側手挾東面



下、二一。同 西面



(上圖物差は曲尺の約五寸(六吋)・兩圖共昭和十二年五月七日)

上、二三。同 西側手挾東面

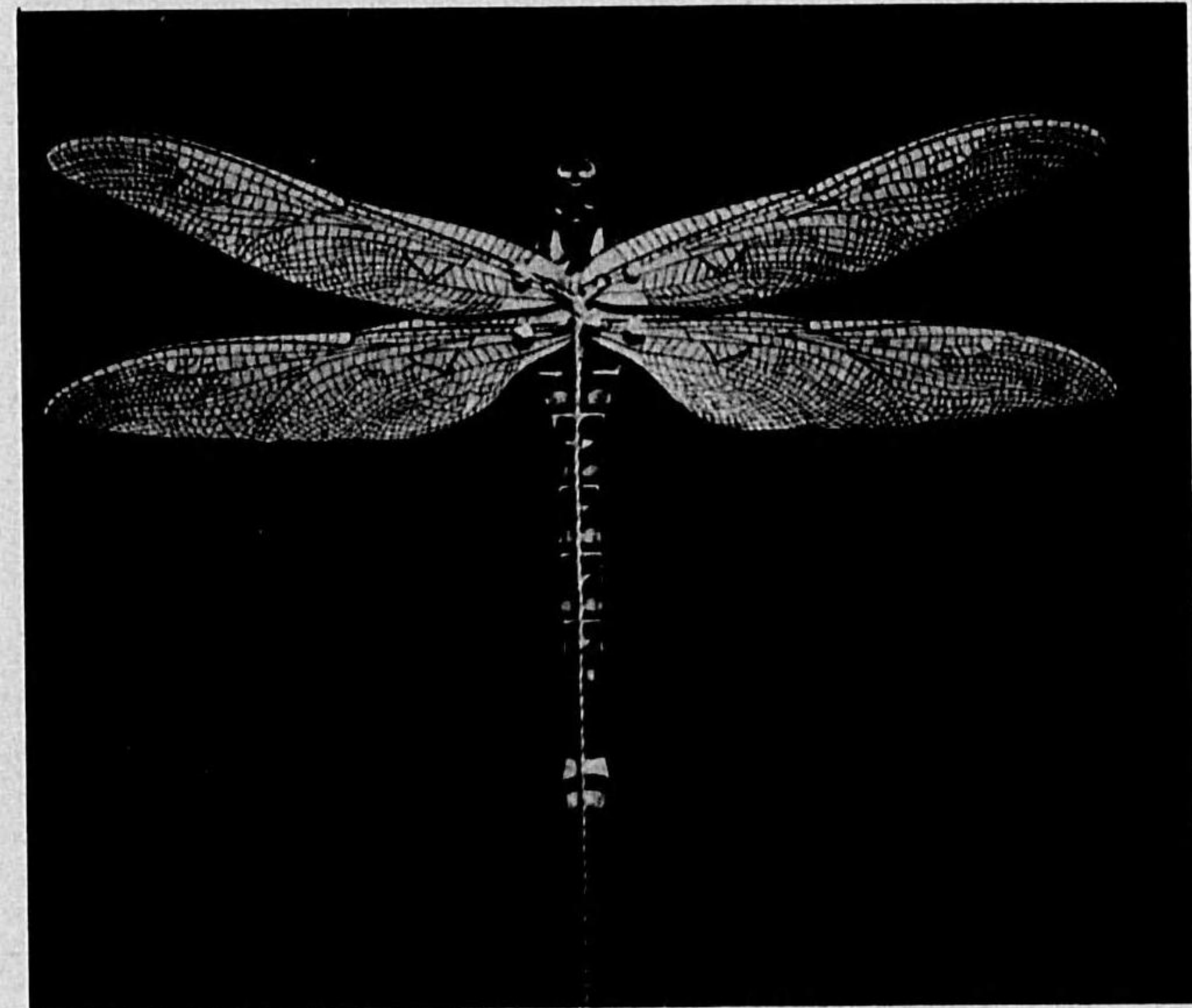


下、二三。同 西面



(下圖物差は曲尺の約五寸(六吋)・兩圖共昭和十二年五月七日)

蜂 鳥



三二。英國製繪はがきの「やんま」

胴體と四枚の翅を原色版で厚手の紙に印刷してあり、切り抜いて圖の様に絲をつけ、左手に腹部を持ち、右手でゆるく絲を引張ると、四翅が少しく動く。傍にでき上りの圖を添えてあるから、切りぬけば子供でも、極めて容易に組みたてられる。この圖は「とんぼ」か「やんま」か何かといふに、前翅の三角室が翅の長軸に平行してゐるから、これは一見直に「やんま」といふ事が判る（三一参照）。編輯者とか發行人とか乃至は畫工とかが、この様な急所に氣がついていたかどうか知らないが、とにかくはつきりと描いてあるのは感

心である。日本では遺憾ながら、昆蟲學者以外

には、恐らくあるまいと思ふ。

私は明治十八年から十九年にかけて、東京市下谷區車坂町に住んでゐた様に思ふ。可なり廣い道路があつて、其一方は大きな下水が流れ、下水の向ふは當時の日本鐵道會社の構内であつた様である。片側町であり、砂糖屋の角を入つた露地裏で、つまり上野公園の直ぐ下といった位置であつた。其時分から公園内には帝室博物館があり、もう一つ、上野だか湯嶋だかはっきり覚えてゐないが、教育博物館といふのがあつた。其何れか——後者だと思ふが——に鳥の剥製標本があつた中に、非常に美しい非常に小さい鳥があつた。羽をつぼめたまま胴中を紙か何かで巻き、小さい札がつけてあつた。あんな小さい鳥は、他の大きな鳥の様に、樹の枝にとまらして羽をひろげさせたらいいのに、なぜあんなにして棚板にころがしておくのだらう。さうして又、ほんとうにあんな小さい鳥があるのだらうか知らん。どうも餘り小さいから、こしらへものではないだらうかと思つたりした。棚の中を覗きながら欲しくて仕方がなかつた。博物

館へ行く度に、必ずこの棚を見て、小鳥がいつも同じ様においてあるので安心をした。

兩親共かういふ方面には全く無關心で、札に名前が書いて貼つてない限り、何等の説明はできなかった。當時の事とて圖録があるではなし、否あつたらうが夫は外國製のが大學とか圖書館に備付てあつた位の事で、一般には普及等してゐなかつたのだから、名等はまるで判らなかつた。ただ子供心に綺麗な小さい鳥として、はつきりと記憶に残つてゐる、至極小型のが二三羽、稍や大きなのが一羽あつたと思つてゐる。明治二十年から先は、最早此鳥の標本を見る事もなく、いつか忘れて了つた。

中學時代に夫は蜂鳥 (Humming Bird) と稱するもので、蝶や蛾の様に蜜を求めて花から花へ飛び巡つてゐるので、主として南米産だといふ事を知つたと同時に、あれは小さいのがあたりまで、別につくりものでも何でもなく、天

然自然に小さい事も判然した。其頃私は初めてクサギの花に白晝ある種の蛾が蜜を求めて集ってくる事を知った。芝の汐止町にゐた頃で、宅の玄關の脇、門を入ったところにクサギがあり、夏になると花が咲く、さうするといろいろの蟲が来る。

其多くの蟲の中に、蜂だと思って生捕り、螫されるといけないから、網の上から藥液を注射して始末をつけ、出した時に夫が翅の透明な、胴體は鶯茶・赤・黄に彩色され、尾に長い黒い毛の生えた蛾であつたので、これは大變に珍らしいものだと思ひ、喜んだのはいいが、蜂と思つて網の中で始末をする時に、背中を網にこすりつけたせゐか、偉大な禿が出来て了ひ、残念でたまらず、次には美しいのを標本につくり、早速上野の博物館へ出かけて、昆蟲の標本を見たところ、あるにはあつたが和名も學名も書いてなかつた。恐らく當時(明治二十四五年頃の事)は未だ命名ができてゐなかつたのであらう。其後やつの事で英國できの昆蟲

學の書物で探し、似た形の蛾に *Hylas bee hawk moth* と普通名稱を記し、學名を *Sesia hylas* としてあつたので、日本産ではなくとも、ともかくも名が判つてうれしかつた。今なら國民學校の生徒でも「オホスカシバ」位の名は知つてゐるのに、いくら半世紀以上前でも餘りひどすぎる。思へば通俗昆蟲學も非常な進歩をしたものである。

其クサギに集つてきた透明翅の珍蛾(だと思つたもの)の中には鳳雀等(ホウジャク)も交つてはゐたが、初めに夢中で數足の標本を獲た後は、大分氣も落着いて來て、最早さう珍らしくなくなり、旁觀察も進んで來た、この透明な翅の蛾は長い吻を花の中に挿入して、飛びながら蜜を吸つてゐた。

夕刻になると各種の雀蛾科の蛾が來て、夫は實に驚くべき長い吻で蜜を吸ふのがよく見えた、オホスカシバ等は到底も及ばない大きな蛾であつた。時にはメンガタスズメ——あの頃は觸髅蛾といったが——も來たりした。英國で Hawk

moth (ホーク・モス(鷹蛾))といふのを、日本では「雀蛾」といふのを知ったのは實は大分後であつた。雀蛾の幼蟲が芋蟲で、芋蟲は土中に入りて蛹となり、越冬して翌年羽化して土から出る等といふ事は、今ならどの書店の店頭にも、原色版で美しい書物がいくらかあるから、知らうと思へば誰でも直に判るが、私の子供の時分は及びもつかなかった。シモフリスズメを芋蟲から飼つて翌年羽化させ、立派な蛾を得た實驗等は、漸く一昨年やつた位のこと、何にしる参考書一冊ない(あつても横文字で頗る難解の)時代だったから、蟲一つとると上野迄出かけなければ埒があかなかつた。其頃の交通機關といつたら、人力車か鐵道馬車だけで、前者は賃金が高いので見込はないから、後者が唯一の乗物であつた。併し何にしる二頭の馬が挽くのだから、曲り角では大概脱線するし、停留場はなく、手さへあげればどこでも停るのだから、どの位時間が費へたか判らない。私が大學生の時代でさへ未だ電車なんか影も形もなかったのだから、中學生時

代の狀況は推して知るべきである。

併しながら要するにスフィンジナの蛾は、翅が甚だ強く、蟲體は現今の最新式戦闘機の様な形で、吻は著しく長く、花から花へと蜜を吸ひながら飛び巡つてゐるといふ事實は、前記の様にクサギの花に蛾の集るのをみたから、相當に前から知つてゐたのであつた。蜂鳥といふ題なのに、鳥でもないある種の蛾の事を長たしく書いたのは、花から花への飛び方が、蜂鳥とよく似てゐることを知つたからである。

蜂鳥が花から花へと蜜を吸ひながら飛んでゐるのを最初の最後に、換言すれば唯一回見たのは、大正十年の初夏、北米加洲の海岸の都市サンタ・巴巴ラ(Santa Barbara)のある富豪の庭園に於いてであつた。といつて別に其富豪と知り合ひでもなし、招待されたのでもなし、去りとして知らない人の家の庭園へ

だまって入ったのでもない。其いはれは次の通りであつた。

加州の沿岸には、往昔スペイン人が残した耶蘇會堂がある。其一二を見學の目的で五月八日の夜桑港のある驛からロスアンゼルス行の汽車へのり、翌日ひる頃着いて同市に於ける日本人の經營せるホテル・ミカドへ泊る事にした。第一は費用の節約、第二は私の最も得意の日本語で用が辨するからである。同じ日本人の宿でも、桑港のは主人が米利堅化したせゐるか、客に對して甚だ不愛想であり、全然言葉を交へず知らん顔をしてゐたが、ロスアンゼルスのは大變親切で、心地よくいろいろの話をしてくれた。

宿の主人から初めて Holly Wood の話を聞いた。そんな所は全く無關係で且つ無關心であつた爲、其上にハリウッドときこえたので、何を言つてゐるのか全然判らず、そのハリウッドには日本人の早川雪洲といふ役者がゐることも、さうして其人が大概の日本人よりはゑらいといふことも、總てが初耳であつた。

そんなせゐで主人は、あらゆる日本人、而もロスアンゼルスを訪れるあらゆる日本人の知つてゐる事につき、私が全く無知であつたので、話がトンチンカンとなり、始末におへなくなつて來たので、可なりあきれ氣味に見えたから、私は活動寫眞に就いては何等關係なく、ただミッシヨン・チャーチと、バサデナの住宅區域を見るのが目的だと告げて、この話を打切ることができた。

所が其夜になって、主人は同じ宿の泊り客なる一日本人に紹介をしてくれた。サンタ・ババラに住んでゐるKさんといふ人で、自家用の自動車を自身運轉して來たのださうだ。どうせ用事がすんだら歸るのだから、歸りには私を乗せて行き、同地のチャーチを見せてやるとの事であつた。主人は私の目的をKさんに話したのださうで、そんな事なら何でもないと引受けてくださったのださうな。私は随分喜んで主人とKさんとに禮を述べた。そこでKさんと近附になつたから、私はバーロー・アルトのスタンフォード大學に於ける日本人學生寄

宿舍の庭に、どこから持って来たか小さい雪見型の石燈籠がある旨を話したりした。ところが石燈籠ならKさんが自分で造ったのがサンタ・ババラにあるから、耶蘇會堂を見てから、時間が餘ったら夫を見せるとの事であった。

此市は新聞紙の報ずる所によると、昭和十七年二月二十三日二十時十八分、日本の潜水艦が加州海岸へ押寄せて、最初の米本土砲撃をやったさうで、私はここへ行った事があるから、記憶を呼び起したくらのことで、恐らく一般の讀者諸君の記憶には其名さへ残って居ないであらうが、甚だ美しい町で、富豪の邸宅別荘が宏大無邊の區域に建つてゐるが、Kさんは庭園師で、此様な邸宅の庭園を設計した時、先方の希望により全く自己流ではあったが、石燈籠をも圖案をして造ったのださうな。だから五月十日の十二時四十分此町へ着いた時第一にチャーチを見、夫から庭園や石燈のうち、Kさんの關係したのを三四

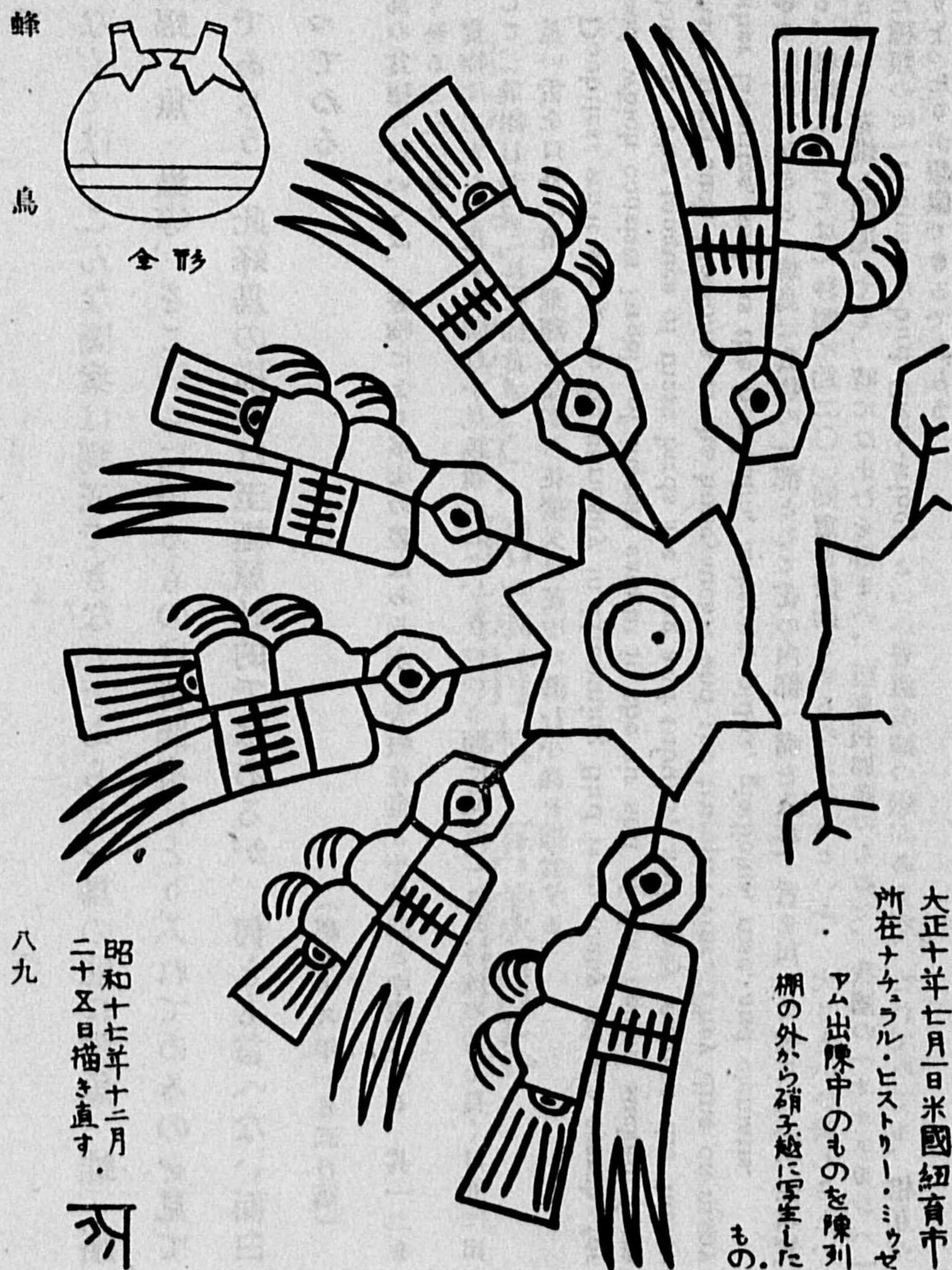
見せてくださった。

そのうちのある家の庭にゐた時であったが、餘りいい天氣なので、同じ人間でもこの様な美しい庭と家とをもつてゐる人もあると思ひながら、ぼんやりと灌木で赤い花の咲いてゐた樹を見てゐたとき、其幾つか咲いてゐた花を、小さいスズメ蛾式のもものが飛びつつ蜜を吸ひながら、一つ一つ訪れてゐるのに氣がついた。見てゐるうちに二つも三つも來た。其來る時は上から急降下で突然と花に現はれ、すんで了ふとどこかへ飛びさるのが、スズメ蛾そっくりなので、最初はさうとばかり思つてゐたが、不圖氣がついたら、夫は蛾ではなくて蜂鳥であつた。Kさんのお蔭で初めて蜂鳥の生態が見られたのであつた。元より多くの種類があるだらうから、各多少習性も異なるであらうが、一つでも見たのだから、洵に以て欣快にたへなかつた。初めて教育博物館で剝製標本を見てから、大體三十六年目で生きたのを見ることができたのである。

ロスアンゼルスからソート・レーク・シチーに出で、市俄古を通り紐育市に落着いたのが同年五月二十五日。八月二十三日英國に向ふ迄大した用事もなかった。在留を命ぜられたのだから、文字通り在留してゐればよろしいと心得、其通り實行をしたが、唯ぼんやりしてゐても仕方がないので、よく博物陳列館へ出かけたものだ。列品中南米の土器に興味を持ち、陳列棚の硝子越しに寫生をして、彩色をしたりしたのが手帳に少しばかり残つてゐる。そのうちには鳥の圖案もいろいろあつたが、我國の木魚の様な輪郭で口が二つある土器の表面に、口の周圍に花を描き、其花に蜂鳥を配し、夫を巧に圖案化したものが、私の眼についた。私は一生懸命になつて夫を寫生し、彩色を試みた。原色で複製すると随分面白いと考へたが、遠慮をして輪郭だけとし凸版にしておいた(三〇)。これ等は野生のこの種の小禽がいくらかゐて、始終住民の眼に觸れてゐる様な

三〇。實物は原始的色彩を以て美しく裝飾してある。

南米ペルー國ナツカ土器の蜂鳥文様部分
ナツカ(NAZCA)は首都リマ市南方約220哩、太平洋岸より約50哩に位置す。



大正十年七月一日米國紐育市
所在ナチュラル・ヒストリー・ミュージ
アム出陳中のものを陳列
棚の外から硝子越しに寫生した
もの。

昭和十七年十二月
二十五日描き直す。

八九

地方でなくては、こんな圖案は到底できないであらう。鳥の他に鰐魚・蛙・蝌蚪・蝙蝠・魚・蟲等、そこいらに居るものは皆圖案にとり入れてゐるのを見ても判るであらう。此蜂鳥の描法は至極原始的ではあるが、何とも言へない面白味をもつてゐる。

(昭和十八年一月五日稿)

蜂鳥の食物に就いては、書物により多少の差はあるが、大概花蜜と小昆蟲との様である。其一二を記してみると左の通り

一、食物は主として花中に潜む小昆蟲類にして、きつつき類に見るとき特殊の舌を長く口外に出して、飛翔しつつこれを捕食す。

二、長い舌を口外に出し飛翔しながら花蜜又は花中に潜む小蟲を捕食する。

一 Doubles; what seems to be curiosity in Humming Bird is in many cases a search for food, which consists largely of insects caught in the air and of the nectar sucked from flowers. The tongues of these birds are long and tubular, and they extract the honey easily from such blossoms as the honeysuckle and the trumpet vine. They dine on many other favorites, such as the bee balm, larkspur, phlox, gladiolus, rose, and clematis.

此等の記事でみると、蜂鳥は食物の一部として花の内部へ嘴を入れ、舌を出して蜜を吸ふのは事實である。種類によつては一秒間に約二〇〇回翼を振動させるのがあるといふ。大さといひ美しさといひ、とにかく雀蛾と間違つても、時には止むを得まい。亜米利加産のもので、我國の「オホスカシバ」と似た種類の「Humming-bird Clear-wing」といふ普通名稱の蛾があるが、これで見ても、相互の似たりよつたりが想像できるであらう。

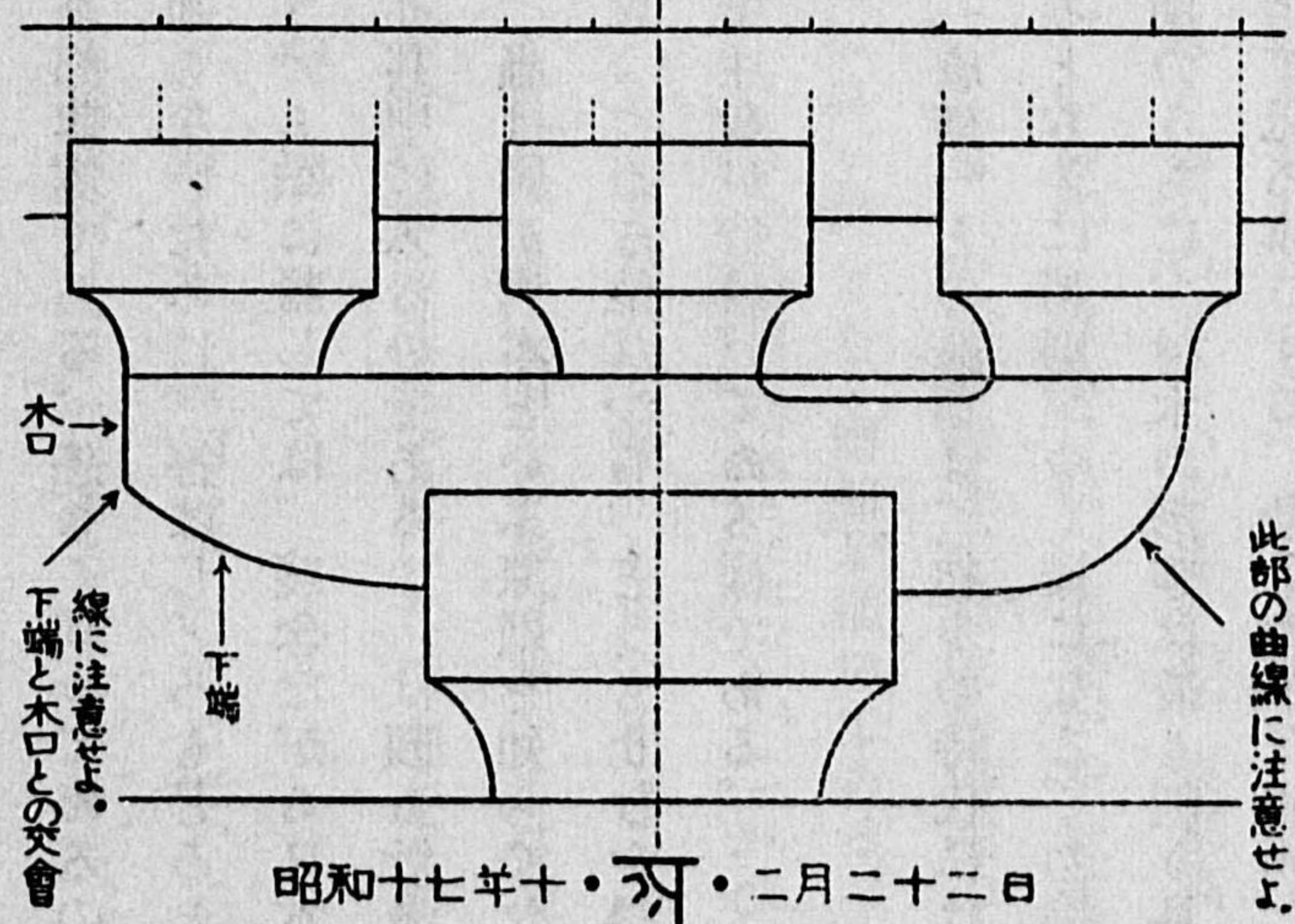
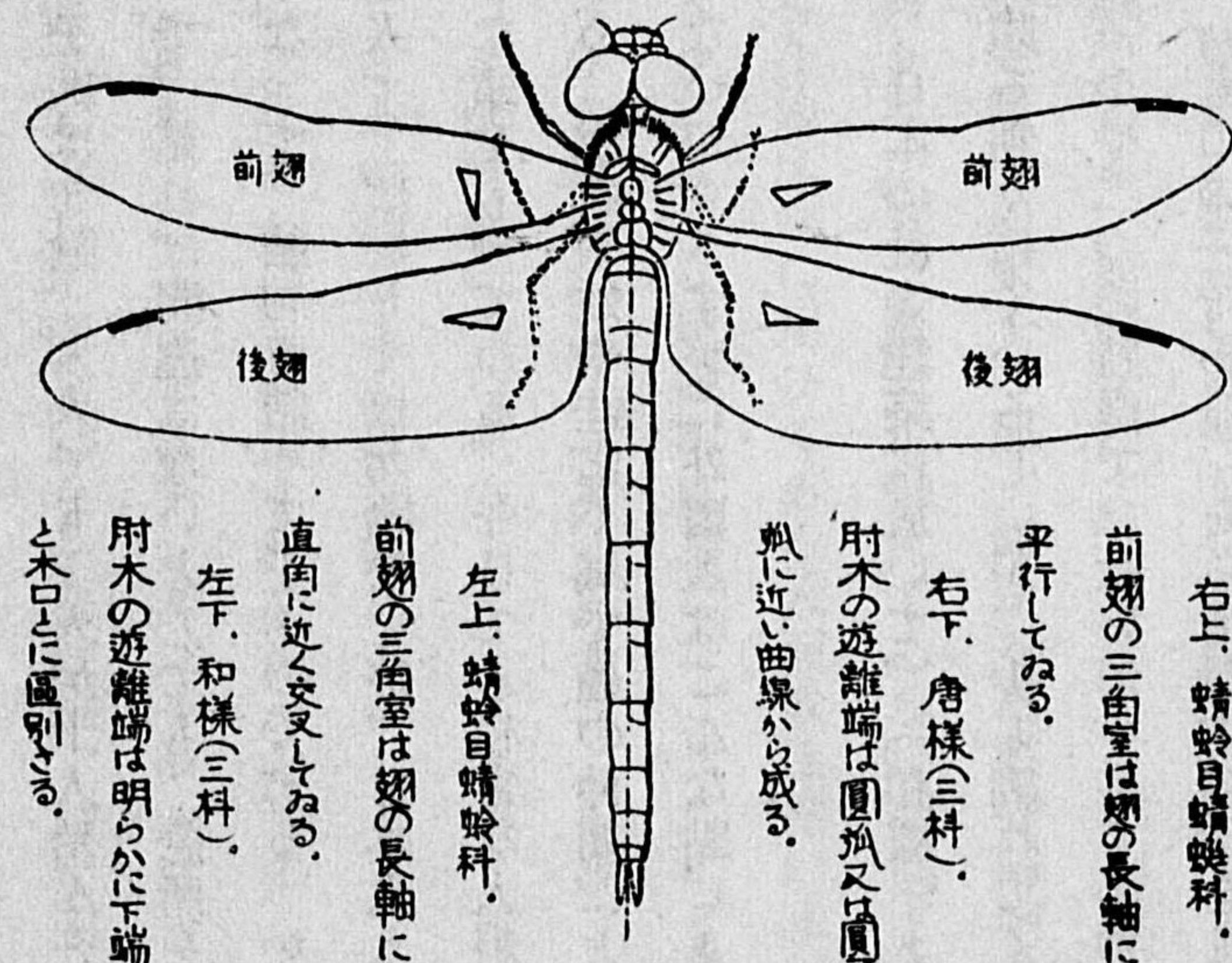
とんぼ・やんま・和様肘木・唐様肘木

蜻蛉が割合に建築又は美術工藝品等の裝飾文様に出て來ないのはどうも不思議である。蜻蛉が出て來るのも、桃山位が最も古いものではあるまいか。京都高臺寺靈屋の廚子の扉、謂ゆる高臺寺蒔繪等、あんなに立派に秋の七草がかいてありながら、蟲一足飛んでゐないのはどういふものか。醍醐寺三寶院白書院の現今の床框に用ひてある大面取漆塗の木材には、珍らしく蜻蛉が描いてある。大きな猛烈な蜻蜓類は別だが、チョウトンボ（といっても蝶と蜻蛉とではない。）がひらひら飛んだり、池の面の草にショウジョウトンボの（さういふ名のとんぼである）が靜止してゐるところ、乃至は睡蓮の白い花の上にハグロトンボがとまり、時に四翅を半ば開いては閉ぢるあの特有な動作を續けるのなどは、充分美術家の注意を惹いたであらうのに、なせもつと應用されなかつたであらうか。

日本ではトンボはトンボ、ヤンマはヤンマと明らかに區別がついてゐて、子供でも大して間違はない様だが、扱て夫では其區別はどこにあるかといふと、

子供は勿論、大人でも十人が十人殆んど全部落第である。恐らく判つてゐるので、見れば間違はないとしても、急所を知らないために、答はしどろもどろとなつて、結句行詰つて了ふのである。かういふ點に關しては、殘念ながら日本人——ばかりでは勿論ないが、日本人も亦其中に入るのである——は頗る散漫な頭をもつてゐる。今日でも相當な人が、蟲は脚が六本といふ原則を知らぬため、蜘蛛や蛇や蛙迄平氣で蟲の仲間だと思つてゐる位だから、どうも止むを得ないが、さすがに外國人はこんな點にまで注意が行届いてゐる様である。

日本の社寺建築に於いて、「和様」と「唐様」との區別は、初歩の時代には頗る判りにくいらしいが、少し馴れてくるとちきに判別がつく様になる。勿論一つや二つの特徴ではないが、多くの差別のうちに、肘木の形等は最も判り易いものの一である。そこで肘木の例をとつて見る事にする。最も簡単な組物だ



昭和十七年十月二十二日

と「舟肘木」だが、相憎「舟肘木」や「大料肘木」に唐様がないから、其次に簡単な「三料」の場合を考へてみるが、三一下圖に於いて、左は「和様肘木」で右は「唐様肘木」である。圖と記入の文字とを見れば判る筈だが、念のため一通り書いておく。

和様では肘木の下端が圓弧に非ざる二次曲線より成り、木口との取合はせが明らかであるから、木口の方から見ると料尻の下に長方形の部分が見えるが、唐様は反對に肘木の下端から木口に移るところは、圓又は圓に近い弧からできてゐるから、下端から自然に木口に移行してゐて、其區別がつかかねる。これは洵に著しい事實で、これさへ心得てゐれば、肘木の和様と唐様とは、間違へることはできないのである。尤も時には肘木其物は唐様に近く、殆んど下端と木口との區別がつかない位にしてあり、夫に一連續曲線から成る面をとったりしたのもある。こうなつてくると、和様と見ても唐様と見ても差支のない事に

なるので、不明瞭な曖昧な場合は何にでもあるのである。

そこでトンボとヤンマとの區別であるが、これには細かい點はいろいろあらう。併し夫等に就いては、私は素人だから知らないけれども、肘木と同じ様に間違へようとしても、間違られない明らかな相違がある。それは前翅に於ける「三角室」(Triangle)である。

尤も蜻蛉目の昆蟲は、學者の分類によると五種ある様である。ヤンマ科、トンボ科、ムカシトンボ科、カワトンボ科、イトトンボ科であるが、翅に「三角室」のあるのは初めの二つで、第三は一寸そこいらにはゐないし、又ゐても後翅の形が格段だから誤りやうがない。第四・第五は全く他と形が變つてゐるから、これ等も亦間違へることができない。だから今ここに問題にしてゐるのは第一と第二、即ちヤンマとトンボとの區別である。

三一上圖で見る通り、トンボ(左)に於いては前翅の三角室が其長軸と略ぼ直角に交叉してゐるが、ヤンマ(右)では長軸と先づ平行してゐる事に注意すべきである。三角室の輪郭は大體頂角が鋭角をした等脚三角形といった様な形だが、其等脚三角形がひっくり返つて短邊を上に向けてゐるか、横になつてゐるかで、一はトンボとなり一はヤンマとなるのである。これさへ心得てゐれば、トンボとヤンマとは間違へることはできないのである。老若男女の別なく直に學術的に分類し得るのである。

扱て何故に素人がこんな事をかいたかといふに、坊間に流布せる兒童用の繪本に、満足にこの區別を描いたのがめつたに見當らない——昨年迄は僅か一種以外に絶對になかつた——のに、外國の繪端書には、子供のおもちゃにするものに迄、この特徴をはつきりとかいてある。つまり夫だけ我國の繪師級は勿論、

堂堂たる畫家、並に一般が全く無關心なので、これが洵になさけないと思ったからである。豈眇乎たる一昆蟲のみならんやで、此頃はやつの事でなくなつたかも知れないが、つる草の蔓の右巻左巻がいい加減であつたり、平安時代の邸宅の長押に江戸末期の釘隠しが打つてあつたり、畫家だから繪は上手だし、従つて展覽會へも出品されるのであらうが、よくもあんなに出鱈目が描けたものだと、あきれざるを得ないのである。

今は國運を培つて米英相手に戦争をしてゐるのだから、褒めては不都合かも知れないが、私が今問題にしてゐるのは英國製の繪葉書で、夫には蜻蜓目の昆蟲が描いてあり、四枚の翅と胴體とは別別になつてゐるから、夫を切り抜いて指示の通り糸で然るべく綴り、其糸を引くと四枚の翅が動くので、ほんの子供相手のものに過ぎないが、さすがに急所をつかまへてゐる。三二はつくり上げた形の寫眞であるが、三角室の輪郭は實に特にはつきりと描いてある。だから

これは一見してヤンマ科の昆蟲だといふ事が判る。頗る學術的で科學的である所、洵に敬服にたへない。但しこれだけ注意が行届いてゐるのに、縁紋がないのと後翅の形が少しく變だが、英國にはこんなのがあるかも知れないので、この様な精しいところ迄は私は知らないから何とも言へないが、三角室だけは確かである。

我國でも昭和十七年の夏に出版された兒童用の繪本に、割合に正確にギンヤンマの畫が描いてあるのを見つけた。二冊あつて雙方共同じ畫家が描いてゐる。其一は【昆蟲ノハナシ】といふので、文部省推薦になつてゐるが、ギンヤンマのものは翅の先が少し尖りすぎてゐる位の事で、結節も縁紋もあり、三角室も割合にはつきり描いてあるけれども、英國製の繪端書程ではないから、あれでは輕輕に看過して丁ひさうである。夫にしてもこの特徴をつかまへてゐるのはるらいもので、これなら立派な學術的描寫である。筆者は不幸にしてこの書の著

者を知らないが、此著者が標本畫の専門家でない限り、まことに恐らいものである。然るに【ホテルとヤンマ】と題したもう一冊の方には、肝心の三角室は崩れてしまつて有無不明で、遺憾千萬といふほかない。

専門家以外の人の、十人が十人氣のつかない様な、小さなどうでもいい事かも知れないが、兒童の觀察力を養成するため、どんな小さい部分でも、何によらず急所は急所でおさへておき、子供のうちからさういふ點に注意を集中せしむる様に習慣づける事が望ましい。

私は曩に外國人は細かい點に迄注意が行届いてゐると書いたが、勿論いつもきまつてさうとは限らない事はいふ迄もない。やはり子供相手の博物學の書物に、翅脈のでたらめなトンボだかヤンマだかの繪をかいてゐるのがある。

(昭和十八年一月七日稿)

虹梁の上の墓股の數

墓股は後世謂はゆる「板墓股」と「刳拔墓股」と二種類あるが、当初は板墓股のみで、奈良時代に初めて出現したものの如く、其頃は虹梁上に構造兼裝飾材として用ひられたので、平安時代になってから、時に單に裝飾専門として料拱間に使用される様になり、兩脚内の彫刻も漸く發達して、室町頃から遂に輪郭のないものができ、これで行詰りとなり今日に及んだのである。この事は再三あちこちへ書き、自分でもあきてしまったから、もうやめておく。

そこでその虹梁上に用ひられた墓股は、少ないのは一個だが、多いのは幾個かといふ事を考へてみる。勿論奈良時代に於いては比較的短い繫虹梁上のは一個、長い大虹梁上のは二個が普通である。假に命名した「二重虹梁墓股」式の妻飾（或は化粧屋根裏の室内）に於いて、東大寺轉害門妻の様なものは別だが、たとへば法隆寺・傳法堂、同經藏、海龍王寺西金堂の様な場合には、大虹梁上には二つ乗つてゐる。平安時代に入つては前期の例がないから、差向き平等院鳳凰堂中堂の尾廊

と翼廊とが例になる。中堂の大虹梁上には三個竝んでゐる。高いのと薄暗いのと、餘りあちこちに裝飾が多いために、こんな事に氣がついた人は専門家以外には殆んどあるまい。

鎌倉に三個の實例の有無を知らぬが、室町になると——あれでも墓股といふ事ができるなら——四つ竝んだのがあるから可なり壯觀である。今治市（愛媛縣）東禪寺藥師堂のが即夫で、先づ四個が最多の例であらう。さうして現在ではこれが四個の唯一例らしい。

刳拔墓股が三個頭貫の上に竝んでゐる例をあげておく。有名な大德寺唐門の北側、控柱上の頭貫の上に、表裏で彫刻を異にしてゐる墓股を三つ竝べたのはいいが、這入らないのを無理に入れたためか、中央のだけが兩脚端が完全で、左右のはびっこである。東から西へ表（北）裏（南）の順に彫刻を記してみると、「桐に小鳥」「牡丹」「椿に小鳥二羽」「雲に天人」「桐に鳳凰」「桐」であ

る。彫刻はいいが輪郭はドットしない。二つにしておけば樂だのに、脚の先をちょん切つてまで無理に三つ入れないでもよからうのには思はざるを得ない。此他に板と刳抜との中間墓股が三個並べてある桃山建築を知つてゐる。玄關先きに突出してゐるのだから、そこへ行けばいやでも見える。夫は天津市園城寺塔頭圓滿院の玄關で、刳りぬかずにただ彫りしづめてあるだけ。桃山のだから形は決してよくないが、いやに多いことが目につく。江戸のもあるだらうが、鎌倉の例と同じで、擧げると言はれると少し困る。

然らばくりぬいたのはどうか。此はいふ迄もなく二木片を中央で合せたのが始りで、平安後期に初めてできた様である。これもいつも書くから讀者諸君はまた始まったかと思ふかも知れないが、こんな事は専門家にはお談義をする必要はないし、素人で其方面に興味をもつてゐる人には、何度話しても直にお忘れになる。だから折がある毎にくり返しておく、そのうちには御記憶になるだ



三三。中尊寺金色堂墓股中央部料受下摺本

(昭和十六年九月七日菊池氏手摺)

らうと思つて書くのであるが、宇治上神社に二種、醍醐寺薬師堂・一乗寺三重塔・中尊寺金色堂に一種づつと、合せて五種の遺例があるだけである。このうち四種は單に二木片を合せたのみであるが、一種だけが兩脚の内輪に沿ひて簡單なグリグリをつけてゐる。

以上五種は、ほんとうは六種といた方がいいかも知れない。といふのは中尊寺金色堂の分は、外陣と内陣とで裝飾が異なり、前者

は漆箔で後者は螺鈿入だからであるが、形は全く同一だから 夫からいへば正に一種と見るべきである。故に五種が至當である。然るに此金色堂のは、二木片を合せたのか一木を刳抜いたのか判然しなかった所、先年修理の際、一つためしに多少手を入れて充分調査してみたら、確かに二木片を合せてあったといふ事を、文部省のH君からきいたので安心ができたが、昭和十六年九月二十四日附で、未知の人菊池康雄氏から、自身參詣した序に二木片を合せたものである事を確認したとて、摺本まで添へて(三三) 態態知らせてくださった。其手紙の一節に

(前略)「私は初めに内部外部の墓股を詳細に見る考へでありましたが寺院では普通拜觀者は保存上内部へは入れないし只あるくだけでもミシミシと音がするので臺を持ち込む事を遠慮して外部にある十二個を一個一個長く見たのです。

向つて右側面の出入口の上にある墓股から見初めたのですが高い爲め長く見えないので机とイスを借りて机の上へイスを上げて懷中電燈で照し擴大鏡で見たのですが二木片を合せたのがはつきりわか

ります右の木と左の木の合せ目は右の木が少し高くなつて食ひちがつて居ります私は乾拓を取りました合せ目がはつきりと表はれて居ります又電燈を下から上へ照らすと合せ目に當るところへ光が入り中程迄長く見えます」(後略)

とあり、尙ほ同氏は詳細見て歩いた結果、もう一つ同様に接目の確かに見えてゐるのを見出したので、残りの十個を充分調査したが、『前に記した如き個所は見付ける事が出来』なかった。夫から『左側面の入口の上の墓股は木の目が横に見えました又ヒビが横に入つてゐるのが見えましたこれは横木を使用したからです』云云、さうして結論として

『金色堂の墓股は純然たる一つの木を刳抜いた墓股ではなく二木片を合せたので横の目を使用したと言ふ結論に至るのではないかと思ひます横の木を使用した墓股がありますから全部を横の木を使用したと見て良いでせう又横の木を使用すれば縦に割れる事は無いと思ひますこの墓股は二木片を合せて作つたのである事は斷じて間違ひ無いと思ひます』

とあった。私の知つてゐる他の例は何れも扱首掉の様に斜材を使つてゐるので、本目が横(平)に通つてゐるのは、法隆寺中門・金堂上層勾欄腰組の間の割束

様に、一木片をくりぬいたもの以外に、平安時代のもは知らない。鎌倉時代の刳抜墓股には水平に奎目の通ったのに殆んどきまつてゐる。併し二木片を合せたとなると、假に一つや二つ横に木を使ったのがあつたとしても、全部をさう断定できるかどうか判らない。ものが裝飾専門だから、大體さうしておいてもよさうに私も思ふが、用心にしくはないから、少しばかりかいた方が安全であらう。

木の使ひ方は姑く措き、これにより少なくとも金色堂の墓股も、二木片を合せたものである事は確かである。この様に別に手術をしないでも、外から見て判るのであつたら、先年もう少し丁寧に調べればよかつた。とにかく態態菊池さんから、自身調べられた事を知らしてくださつたのに對し、厚く感謝の意を表する次第である。

後世になつてからはとにかく、初めの間は刳抜墓股は料拱間に使はれたのが

きまりの様である。板墓股はどこ迄も構造兼裝飾材であり、これはどこ迄も虹梁上の様な場所が似合ふのである。平安後期の——殊に末期に近くなつてからは——木割の繊細な建築の料拱間には、刳抜いた如く見える脚内空虚のきやしゃなのでなくては到底調和しない。從來料拱間の裝飾といへば、若しあつたとすれば間料束に限られてゐたのに、この様な新しい型式の墓股が發明されたので、一般に大に歡迎され賞用されたのであらう。

奈良時代から使用されてきた板墓股は、鎌倉時代に特殊型式——例へば奈良市極樂院本堂や京都市東福寺月下門の料拱間に用ひられてあるものの様な——のができ、其方面に活路を見出した迄は、全くの行詰りであつた。我等は平安前期の實例を見ないので、多少隔靴搔痒の嫌はあるが、恐らくまだ前代の繼承で、板墓股であつたらう。後期になり支那との交通がなくなり、純日本化したし、終りに近くなつてから二木片を合せた新しい型式の墓股を發明するにはし

だが、虹梁の上に使用するのには餘りにきゃしゃで、板墓股になれた眼には、どうしても調和しないからやめ、料拱間に間料束の代りに用ひて十分の効果を収めたのであらう。

然るに鎌倉になってから、平安のつづきの木割の繊細な和様建築は益々其方に發展して、遂に極端にきゃしゃな——一例を引けば奈良丹波市大字布留鎮座官幣大社石上神宮攝社出雲健雄神社拜殿の様な——建築に於いては、虹梁の上にさへ二木片を合せた秀高清楚な原始状態の刳抜墓股を用ふる様になった。それと同時に、板墓股も亦背を低くし、脚を左右に充分にのびさせたものをつくり、夫を料拱間に用ひたりした、例へば播磨小野町大字淨谷の八幡神社拜殿の夫の如きである。

料拱間に板墓股二個を用ひた例は室町にある。又間料束を二本用ひたのもある。併し刳抜墓股の實例の有無は知らない。室町のは知らないが桃山のならあ

る。鐘樓等には左程珍らしくない様である。明治以後は公共建築の車寄せの料拱間等によく二つ竝べてある。

墓股が裝飾として使用されてゐるのは

- 一、板墓股。主として虹梁上、一個より四個。後世は料拱間に一個又は二個。
- 二、刳抜墓股。最初は料拱間だけであつたが、後には虹梁上に用ひられ、大瓶束と混用された場合もあり、一個乃至三個とす。

といふ風であるが、實は「板」と「刳抜」とははっきりと判つてゐる様であつて、どちらにもとれる曖昧なものもある。墓股の兩脚を残して内をある深さにはり凹め、其部分に彫刻をしたの等は、表からは刳抜と見え、裏からは板である。板といひ刳抜といふのは、先づ大體常識で判斷のできる程度をいふと思へばよろしい。

墓股は支那や朝鮮にもあるにはあるが、其形は大して振はず、獨り日本内地の建築に於いてのみ異常の發達をとげ、建築裝飾としてはなくてはならない最も重要なものになったのである。その位發達したためか、其墮落も随分ひどいもので、江戸末位になると、よくもこの様な拙劣な情ない形に迄なったものだと感心させられる様なのができ、其儘今日に傳はつてゐるのである。獨り墓股のみならず、木鼻でも臺輪でも、随分進展したのであつた。だから墓股にしても木鼻にしても、其發達したといふ點に於いては、正に世界に冠たるものといへるのである。

(昭和十八年一月七日稿)

校 正

随分以前の話であるが、大正八年に施本として小生はある書物を書いた事があった。さて出来上ったのを讀んでみたら、誤植の多いのでうんざりした。自分ではできるだけ注意をしたつもりなのに、なせこんなに多いのだらうかと、實は不思議でならなかった。其書物にかいたもののうち、項目の切れ目に一枚色紙を入れて、其紙には二號活字で唯三字刷っただけのがあった。三字だからこれは大丈夫だと印刷所の主人もいったし、私はその頃はまだほんの駈出しであつたから、如何にもさうだと思ひ先方に任かしたところ、でき上つたものは三字のうち一字大間違があつた。正に33%の誤植。こんな風であつたから、私は印刷所の責任者に遺憾の旨を述べたところ、故森鷗外さんが【美奈和集】の誤植に就いて、第十版か十一版になつた時初めて誤りがなくなつたと言はれたが、誤植といふものは、どうもなくすわけには行きません、寧ろあるのが當然です、といった様な返事をされて、少なからず驚かされたのをよく覚えてゐる。

其後曲りなりにも、人並に書物をだしてきた。中學時代夜學へ通つて稽古をしたアーピングのスケッチブックにあつた「製本術」を思ひ出しながら、苦笑しつつ下らない書物をかいたが、校正の時今度こそはと思ひながら充分注意をするのである。併しできたものは誤植だらけである。大概四校迄とる。最後の時どうしても見出されないから、安心して校了にする。併し見本製本をみるといくらでもあるのが、私にとっては何といつても不思議でならない。

見本製本ができてから、書物が書籍店の店頭に並ぶ迄には若干日の餘裕があるから、できるだけ叮嚀に讀んでみて正誤表をつくり、印刷して間に挟む様にして、これで先づいくらか申譯ができた様な氣持になり、多少安心もできるが、もう一度讀み直すと更に同じ位か若くは夫以上にも誤植がでてくる。これでは困るから、ある時ある人にできるだけ誤りを探しだして貰ひ、そのあとを私がもう一度見直して三校をとり、更に四校迄とつて刷つたが、其結果は稍や良と

いふ程度で、大して思はしくなかった。時には又見本製本ができたのを、何かの都合でよみ返すことができず、初めにバラバラとやった程度でおき、漸く讀み通して誤りを拾ひ、正誤表をつくつても間に合はず、書物は市場に出され、大部分がなくなった頃なので、残ったものにだけ挟み、あとは他日再版の機を期さねばならないといふ様な、洵に申譯のない場合もある。併しこんなのは皆小生の不行届で、只管恐縮してゐるのである。

然るに時には不思議なことがある場合がある。といふのは最後の校正——夫は校了でも責任校了でも——の時によかつたものが、本印刷の時とんでもない工合に間違つて了ふのがある。まともであつた字が寝轉んだり逆立をしたり、字の順序が前後したり、こんなのは著者の責任ではないが、印刷所に抗議を申込むと、夫は仕方がないので、あきらめなければならぬのださうな。そんな筈はないと思ふが、さうだといふ事である。

印刷所の校正係は、時には實に有難いと思ふ時と、困ると思ふ時とある。生れつき不得手な假名遣等を頼んでおくと皆直して貰へる。假名遣は考へれば考へる程まごつく。「様」の字なんか「ヤウ」か「ヨウ」かどうしても覚えられない。そこでいい加減にしておくとか皆正しくなつてゐるから、これは洵に有難い。ところが時には有難がつてばかり居られない場合がある。夫は校正係が常識で、これは著者が字を誤つたのだらう位のところから、然るべく直してくれるので、お志は感謝するが、結果は困つた事になるのである。

其一例としてある時ある印刷所である本を刷つた事があつた。どうせ小生の書いた駄本であり、内容は建築の事であつたが、夫が日本のではなくて、回教建築に就いてであつたから、此種の建築につきものの細い高い尖つた塔のことがいくらか出て來た。回教建築附屬の此等の細い塔は「ミナレット」(Minaret)といふので、其譯として「光塔」(クワウタフ)といふ字を我等は常に用ひてゐ

る。だからミナレットの事を記す度びに、いつも「光」の字と「塔」の字を用ひてゐた。併し世間一般にはさうは言はない、尖つてゐるものだから「尖塔」(セントーフ)とかいてある。建築家に非ざる旅行者は常にさうかいてゐる様である。我等はゴシック建築に於ける細い尖った塔、即 Steeple, Spire を指して「尖塔」といふ。

「光」と「尖」とはぞんざいに書くときよく似てゐるし、世間一般がさうだからどうも厚意で訂正される虞が多分にあると思ひ、特に注意して頗る叮嚀に書いておいたところ、植字工は「光」にしたのに、夫が校正係の手許で全部「尖」に訂正されてゐた。併しこれは幸に未然に防ぐことができて全部助かった。

最も極端な場合は、これもある時ある印刷所での出来事であつたが、小生は一度も校正刷を見ないうちに、再校迄すんで校了になって、印刷ができて了つてゐた。夫も誤さへなければ結構此上もないのだが、間違だらけで書いてある

文句をとつて了つたり、頁數がはつきりしないのでぬいておいたのに其儘刷つたり、善後策の講じ様もない有様であつた。これ位困つた事は今迄になかつた。どこをどう經廻つて而も再校迄すんだのか、きいてみても誰も知らないといつた有様。かうなつては手のつけ様がない。結句刷り直しとして漸く埒はあいたが、こんな事が重なつたり、初めと後と話が異つたりすると、もう書物なんか誰が何といつてきても書くものかといふ氣になる。他の著者の書物は皆うまく行き、小生のだけがかうへまばかりやる様な氣がしていけない。人の書物には誤植等は一つもなくて、自分のばかり澤山ある様な氣がする。

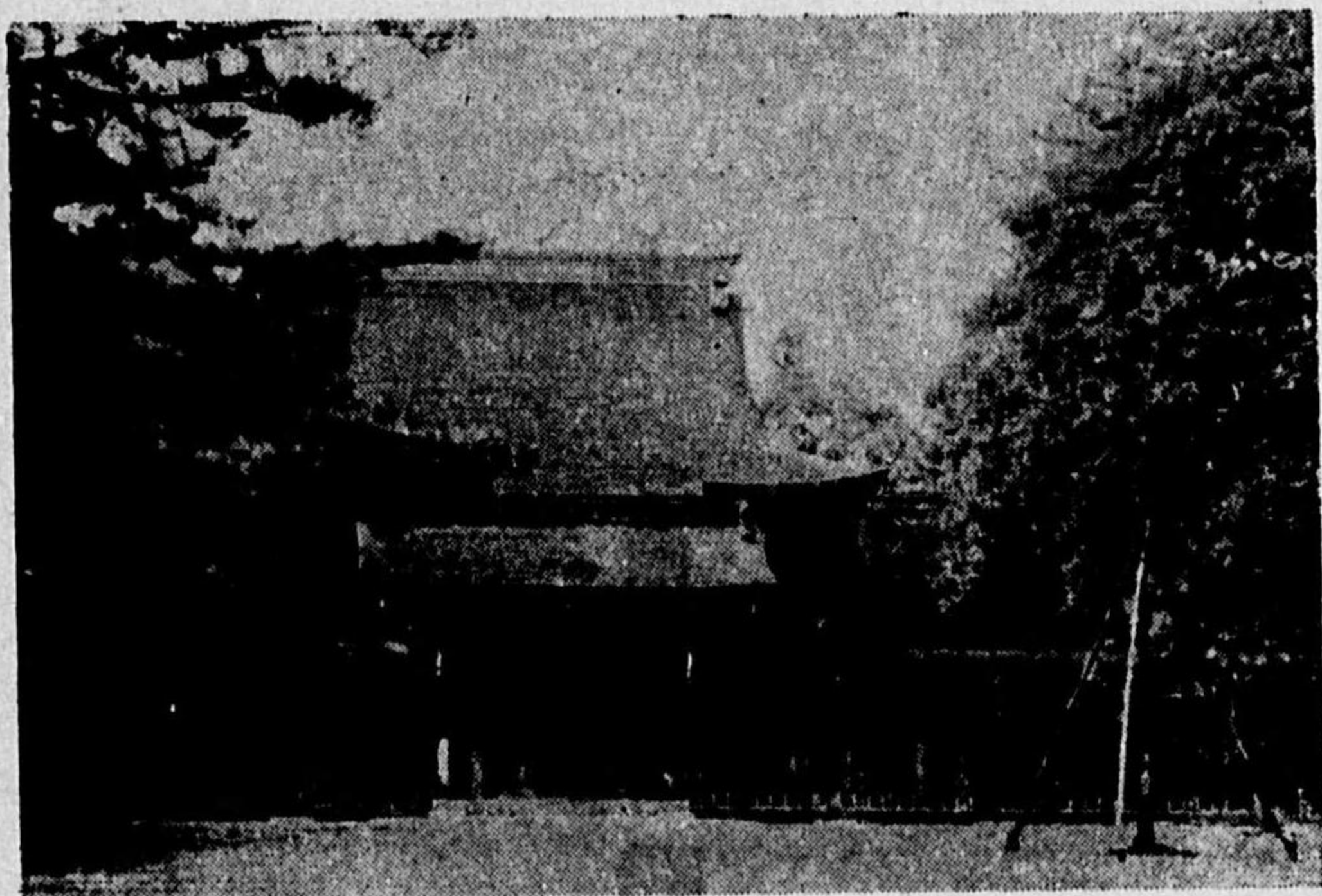
校正も校正だが、原稿の書き方も驚くべく不良な時がある。校正刷を讀んでみても、何が書いてあるか判らないので、けしからんと思つて原稿を出してみると、「あ」の字をかいいたつもりであるのに、夫が「た」になつてゐたりして、自分がいけなかつた事が判る。其くせ讀み直しをして、推敲もするにはするが、

校正の時と同様、さうでない字を勝手に都合のいい様に讀んで了ふので、誤りが見出せない。こんな場合、植字工は頗る忠實に活字を組み、校正係は變だから原稿と比べてみても、字に誤りはなし、意味不明だから、やはり仕方がなしに其儘にしておくのであらう。こんな時は最初に校正刷を讀んでけしからんと思つたのをそつと取消し、どうもすまなかつたと思つて正しい字に直しておく事にしてゐる。

どう考へても、校正なるものは思ふ様にならないものの随一であらう。

(昭和十八年一月十四日稿)

土 用 殿



三四。土用殿の一廓（昭和十七年九月七日）

海上門を出ると、真正面に土用殿の一廓が見える。正面入母屋造の大きな建築は権殿ださうで、土用殿は其右の遙か後方に一部見えてゐる。

官幣大社熱田神宮境内の土用殿は、到底拜観は出来ないものとあきらめてゐた。然るに昭和十六年夏、信州勇猛團の一行と共に神宮へ参拜した時、外部からだけであつたが、至極容易に拜観ができた。實は神宮にある國寶建築なる海上門と鎮皇門とを見學するの目的であつたのに、案内しにくださつた神職は土用殿の一廓（三四）の横の出入口か

ら柵内に入れてくださったので、近寄つて充分に見學し得た。これは全く豫期しなかつた副産物で、洵に有難いことであつた。寫眞をとつても差支はないらしく、勇猛團員で寫眞機を持參の面々は、何れも折柄の晴天に、早撮寫眞を寫してゐた。八月二日午後の事。

此日は朝雨が降り、宿を出る時は未だ歇んでゐなかつたので、拙者は寫眞機を宿へおいてきた。だから寫眞をとる事ができなかったのも、復とない機會を失つた様な氣がした。そこで特に同行の園造氏を煩さうと思つたが、海上門迄は確かに一所であつたのに、どうした事かどこかへ紛失して見當らず、遂に思ひ切つて了つた。此時以後名古屋へ行く折もなし、従つて土用殿の寫眞の事も其儘になつてゐた。

昭和十七年の夏のある日、東京のある大きな役所の一室で、何か喋つてゐた席に、當時□□省に其人ありと知られたる令名高きS技師が居られたので、此

建築の話を持出してみたところ、内部は今なら拜観ができる、といふのは草薙の劔は他にお移ししてあるからとあった。尙ほ宮司は元江近の多賀神社宮司時代に、拙者の知ってゐたH氏ださうで、甚だ好都合だから、改めて土用殿見學の件をH宮司に照會をしたところ、差問題なしといふ快諾を得たので、昭和十七年九月七日、其頃あつた九時五十二分京都驛發、鳥羽行の快速度列車の三等に、納り名古屋に向つた。「割れ鍋にも閉蓋」式の仲間Hは私用に東京行の途だし、もう一人のKは丁度休みがとれるから、是非同行を希望するとの事に、思った通りにならなくても、私の責任ではないといつたら、勿論承知だといふので、然らば三人一所に出かけようといふことに話がきまつた。

九月七日は朝からよく晴れてゐたので、喜んで驛へ向つた。HもKも既に來てゐた。Hは例により東京行とは思へない程の小さい手提鞆を持ち、Kも亦黒い革製の大きなスーツ・ケースを重さうに下げてゐた。私が切符を買ふ間、此

二人の荷物の加の1¹/₂位よりまだ小さい、豫てから愛用の馬革製の手提鞆を、H君が持つてやるといふので頼んだ。汽車は京都仕立ではなくて、どこか大阪か神戸あたりから來るのだが、其汽車が京都驛へ着くほんの少し前、僅かの不注意——(H+K)と拙者と五分五分位の——から、私だけが汽車へのり、二人は乗り後れて了つたのがあとから知れたのである。

乗つて發車してから、大津へ着く迄にはHが満面に笑を含んで出現するだらうと豫期したのに、大津は愚か草津迄行つても影も形も現はさないので、こりやあどうも變だぞと思ひ出した。柘植驛を發車して間もなく、車掌が私の姓を呼びながら、私あての電信をもつて來た。夫によると自分達は乗り後れたから龜山か柘植で待合せてくれ、次の汽車で行くといふ意味であつた。待つな勝手にしろといふ電報であつたにしろ、私は切符を買ふ時寫眞機入の鞆をHに預けてあるから、先へ行つたって仕方がない。そこで一つ龜山の町を見よ

うといふつもりで途中下車をして歩いてみた。

龜山の町は驛から可なりある。歩いてても何一つ見るものはなし、汗ばかり出て結句つまらなかつたが、漸く時間を消し次の汽車へ乗ってみたが出會はず、遂に名古屋驛へ着いてしまった。改札口でもう一つ待ったが夫でも來ない。驛食堂で食事をすまして電車で熱田神宮へ行き、來意を告げたら先方はよく承知してゐてくださった。待つ間もなく(H+K)が來着してやつとの事で會合ができた。第一に拙者の鞆はどうなったか訊いたら、Kが自分の偉大なる黒革スーツ・ケースと一緒に持つて社務所の門外にあるとの事に、やつと安心する事ができた。

H宮司は此日所用のため不在であつたが、目的の土用殿は神職に案内して戴いて直に拜觀ができた。前回外部のみ觀て、少なくとも室町を下るものではあ

るまいと思つてゐたが、今度は内部を觀る事ができたので、豫て噂にきいてゐた通り、成程これは鎌倉迄上らせることができるかも知れない、まことによく昔の型式を保存してゐる建築と考へるのが最も穩當である、といふ結論に到達した。洵に今日この様な古建築が熱田神宮に残つてゐるといふ事は此上なく喜ばしい(三五―三八)。

建物は方一間、妻造檜皮葺、床の高い板倉で、床下には前後に四本づつ、中央に三本、合せて十一本の八角に削つた柱を立ててある(三五・三六)。何故に中央の列が三本にしてあるかは、私には判然しないが、建築物の中心に柱を立てる様にしたのであるまいか。中心に柱をたてるには、特殊な場合を除いては左右に、つまり正面に平行して最少限は三本で其次は五本、以上奇數ならいくらでもよろしい。併し土用殿の場合、五本では多過るし、一本ではものにならない。だから三本が適當である。さうすると左右の方向に正面と背面とに

四本づつ、中央の列に三本の柱がたてられ、其上に薄い——といつても相當の厚さはあるが——木を竝べ、更に其上に夫と直角に同じ厚さの木を竝べて、其上に板倉をたてる（三五・三六）。其板の厚さは約四寸五分、幅は一尺九寸、長さ正背面の分十四尺、兩側面は十三尺五寸。五寸の差があるだけで略ぼ正方形の平面である。

建物の四壁をなせる此等の板は四隅で合ひ缺きとし、先が約一尺七寸五分出てゐる。板の厚さは四寸五分だから、差引をすると床の面積は約九尺五寸八分に九尺一寸の乗積で、ざっと二坪八合餘となる。切妻造檜皮葺。懸魚は拜と降とに覆輪付銅板を以て被覆した猪目懸魚。妻飾豕首で上に料なく直に舟肘木をのせて化粧棟木を受け、支外樑は四本の内、壁付及び破風板付一本づつ。蛇腹のおき方は拜みに近づくに従ひ漸く水平となる。箱棟は銅板葺。鬼板に五三の桐がつけてゐるのは神紋との事だが、拙い形の桐である。國寶建築ではない

のだから、次の修理の機會に鬼板と鳥衾の形とをもう少し何とかして、軸部と時代を一致さしてどうか。現に懸魚は拜みのも降りのも、相當にいい形をしてゐるし、六葉も面白い、だから棟の形も何とかして、もう少しよくなる様に、工事に従事する技術家に豫め進言しておく（三五）。

正面に出入口が一箇所あるだけで、残りは全部板壁である。其出入口の左右には、上を兜巾形に切った片蓋柱をたて、夫と直角にあひ缺きにして、これも上部を斜に削った水平材を取つけ（三七）、かくして限られた長方形内に片引戸（高さ五尺三寸四分、幅三尺五寸八分、厚約二寸七分）をたつ。向つて右方に引あける様にしてある。内開ならじゃまにもならうが、外開なら大したこともあるまいに、引戸にしてゐるのは變つてゐる。さうして此引戸の裏側には二所棧が打つてゐる。

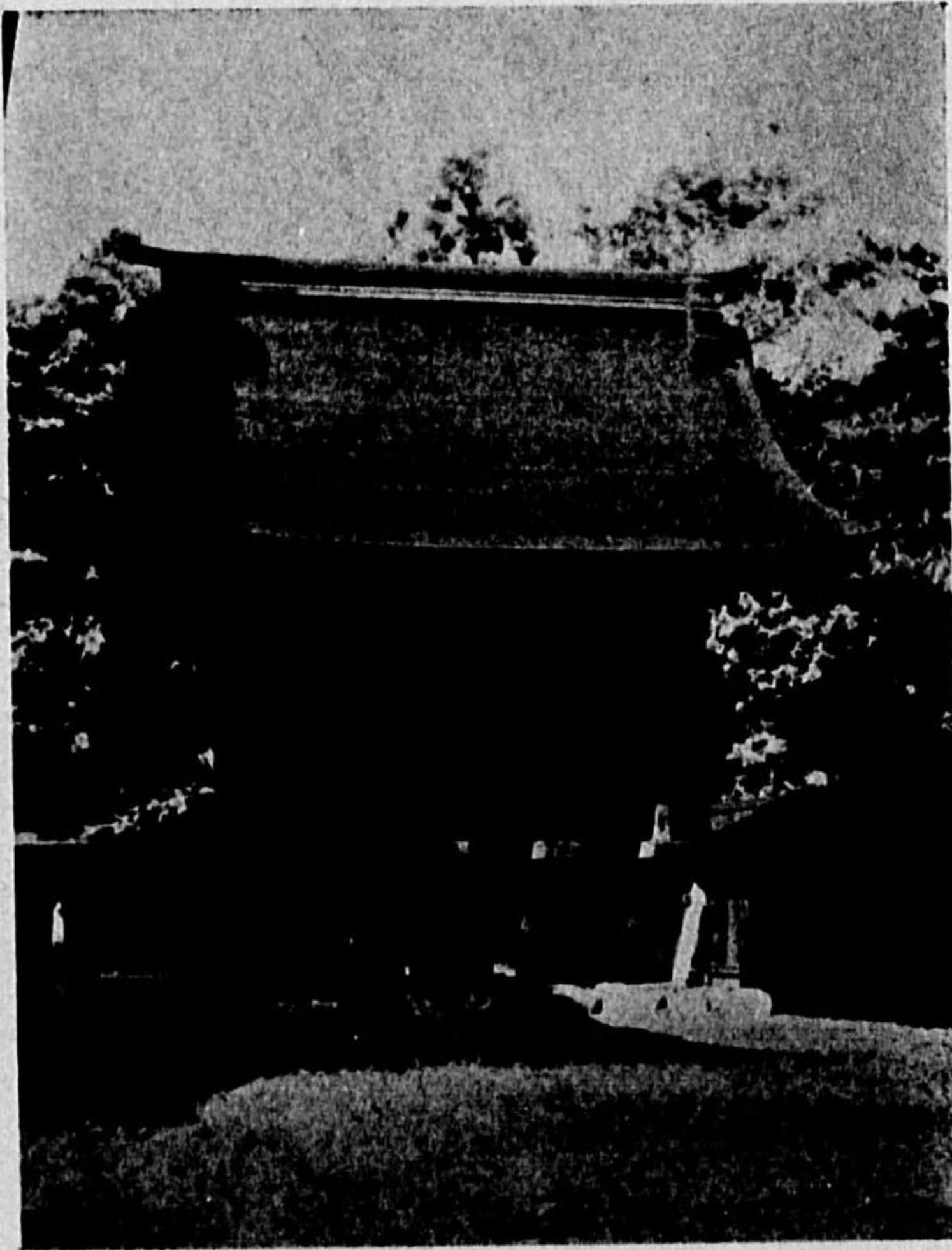
内部は長押上に板の「あり壁」*があり、唐戸面をとつた天井格縁に猿頬面をとつた小組格天井をはつてゐる。格間の數東西十五に南北十四で一つ違ひ、僅

か東西に長いのをうまく取扱つてゐる。外部よりは内部の方が餘程鎌倉式を發揮してゐる。内部を一見しただけで、たとひ鎌倉はむづかしいとしても、どうしたって室町を降るものではないといふことを、恐らく誰人も異議なく承認するであらう。全部素木でただ「あり壁」だけ胡粉塗にしてある(三八)。

一般に古建築といふ部類に入る建築の内、校倉は相當に現存するが、板倉は少ない。本建築は其珍らしい板倉造で、一部分は新しい様式が入つてはゐるが、これは修理のためであり、今ならいくらでも古式にかへすことは左程むづかしくはない。此小建築が鎌倉時代のものかも知れないといふ説に賛成する。

*「蟻壁」とも「有壁」ともかくが、どちらもあて字であらう。天井長押と天井廻縁との間にある壁、三八の白い細長い壁が即夫。

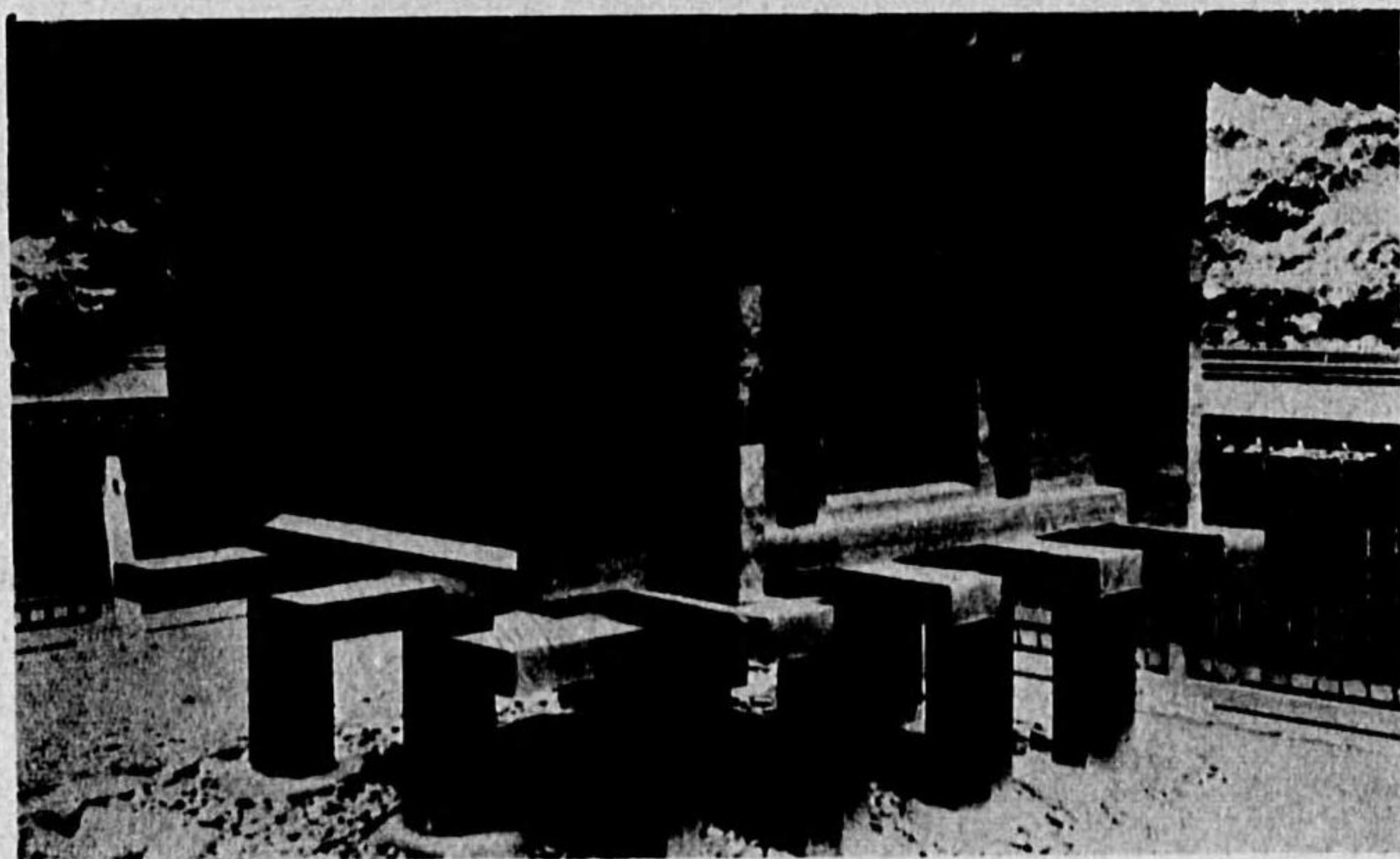
(昭和十八年一月十四日稿)

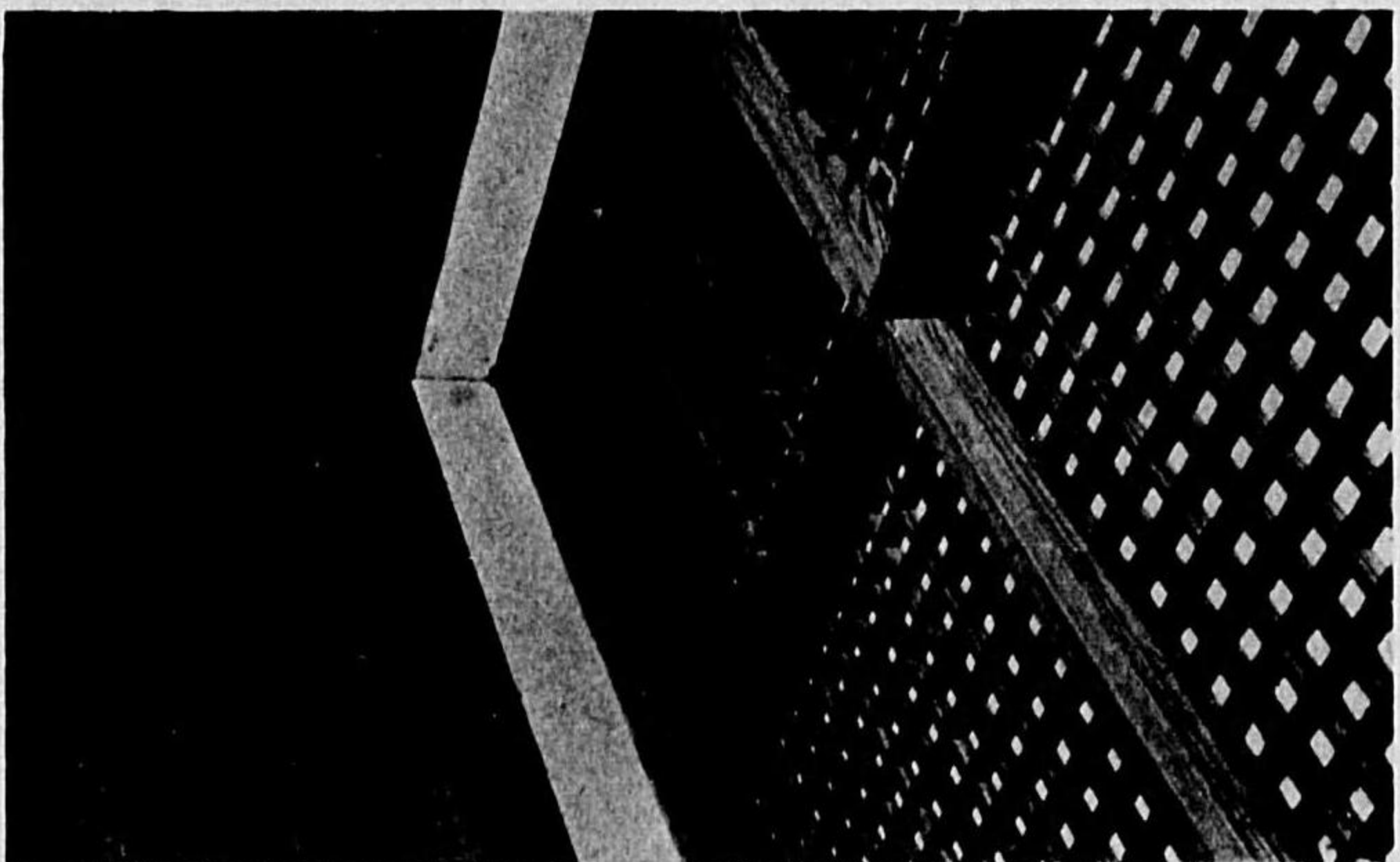


上、三五。土用殿 全景
下、三六。同 部分

(昭和十七年九月七日)
(昭和十七年九月七日)

方一間切妻造檜皮葺の板倉。これでは判らないが、妻の懸魚の形は中よらしい。上圖では軸部が真つくりになったが、床及び正面出入口の様子は下圖で略ぼ判る。





右、三七。土用殿正面部分
左、三八。同 内部天井
(昭和十七年九月七日)
右圖は正面出入口左右の言はば添柱(片蓋)といった様なものと、
楣上冠木とでもいふべきものの一部を見せたところ。左圖は内部
の小組格天井の一部分で、長押、其上のあり壁等と共に、取扱は
鎌倉時代と見られる。

石燈籠見物旅行談の筆記

私のよく知ってゐる男に、大分世間とかけ離れたのがゐる。世間一般に彼を「變人」とか「變り者」とかいつてゐる。但し本人に向つては言はない、居ない所でいふのである。併し本人は決して變人でも變り者でもない、頭には罅はいつてゐない、たしかなものだ、そんな事をいふ世間の人間こそ變りもので、自分はどこ迄も普通なのだといふ風に、頗る眞面目に考へてゐるらしい。私はもう随分長年月に亘り、彼と交際してゐるが、私も彼と同類なのか、不思議に未だ一度も論争をした事がない。内密で姓名をあかすが、姓は内浦、名は最、つまり内浦最といふので、内浦はウチウラだか、名の最は何と訓むのか、何度きいても笑つてばかりゐてはつきりと言はない、だからサイとしておく、つまりウチウラ・サイとしておく、住所だけは氣の毒だから預つておく。先づ親友の一人である。

内浦君は今年一月の寒い時、これも彼と五十歩百歩の青井之登君と一所に江

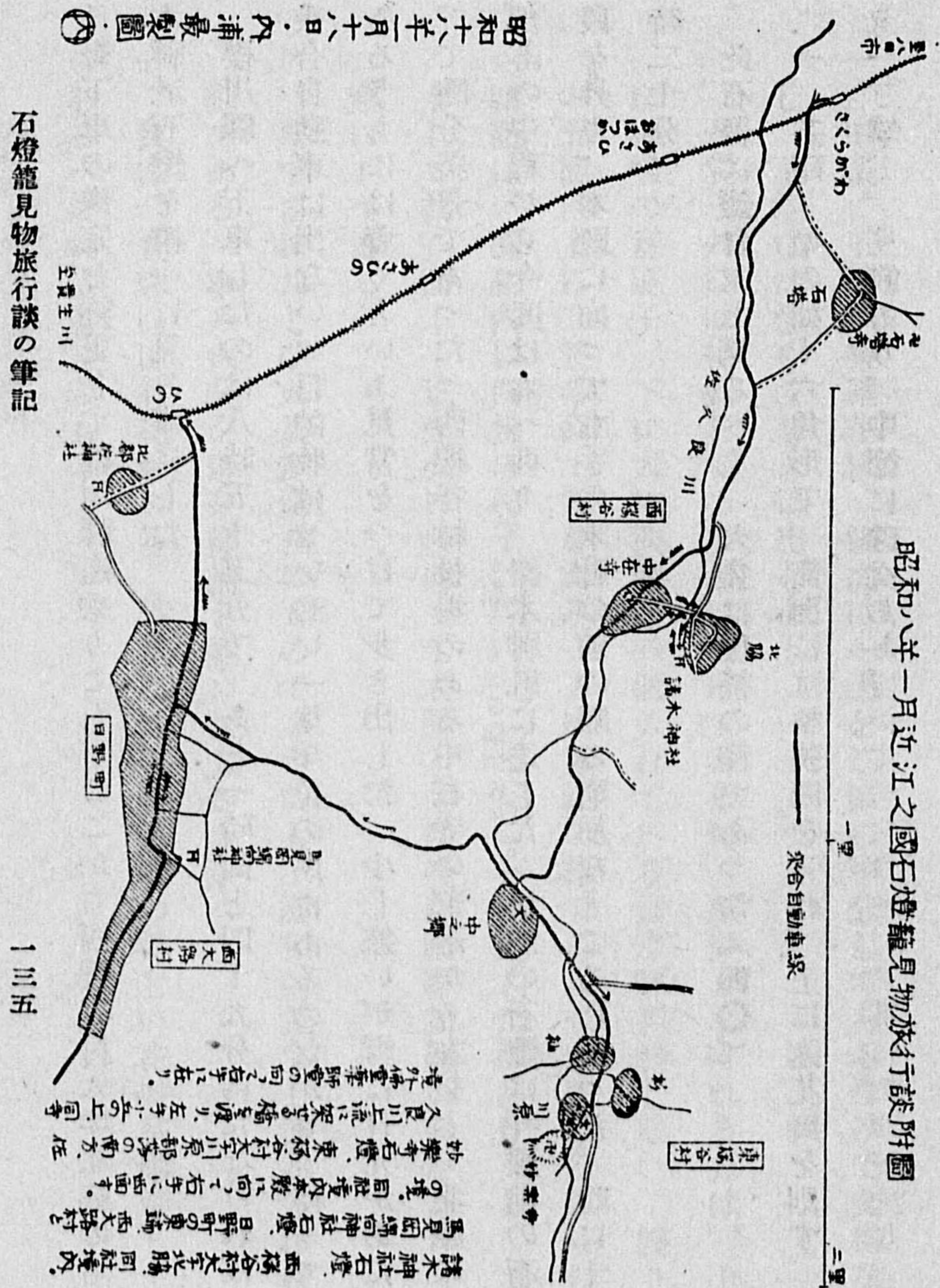
近の國蒲生郡の田舎を歩いてきたさうで、歸つてきてから拙宅へ來て旅行談をしてくれた。何だつて一月の様な寒い時候に歩いたのかと訊ねたら、其答はかうであつた。毎年三月頃から先は大分春めいて來るので、大して用事のない人がそこいらを歩いたり、汽車や電車へ乗ったり、どうも混雜をして困る。國家非常時とあつて、團隊旅行は遠慮をするとしても、夫でも随分人が出る。うるさくて仕様がなない。だから出歩くには酷暑か酷暑か、そんな時の方が乗物も割合に樂だし、又野外で實測をしたり、建築物の寫眞をとったりするにしても、用のない見物人が無遠慮に覗き込み、判りもしないのに下らない質問をしたり、することがなくてよろしい。ただ自分が少し寒さや暑さをがまんすればいい、どうだい、正にさうだらう、といふのであつた。では君は青井君と二人で歩いたのかときき直したら、滋賀縣の古建築技師のH君を頼んで案内をして貰つたといった。成程これなら無駄なしに歩けた筈だ。夫も内浦君が總てお膳立をし

たのかと思ったら、さうではなくて彼は何もせず、全部青井君に幹旋して貰ったのださうな。狡い事夥しい。こんな旅行なら、小生と雖も誘はれば直にでも出かける用意はある。

以下内浦君の談であるが、便宜上内浦君をU、青井君をA、技師はH君としておく。さうでないと筆記した私即成蟲樓と間違ふ虞があるから。

Uの旅は昭和十八年一月九日から十二日迄四日三泊で、蒲生郡日野町附近にある鎌倉時代の石燈籠を見て歩いたのである(三九)。其目的を達するため、一月九日朝七時に京都驛からでる柘植行の汽車でA君と一緒に出かけた。大津驛からH君が乗って來たので、一行三名貴生川で近江鐵道に乗換へた時、幸ひ昨夜から降り始めた雪もやみ、晴天となってきたので、夫ではやっかいな方を先へすまし、明日の日程を少し樂にした方がよからうといふ事に相談が決り、

昭和十八年一月近江之國石燈籠見物旅行談附圖



日野下車の豫定を變更して櫻川驛迄乗りこし、ここから西櫻谷村大字北脇の諸木神社石燈を第一に見る事にした。

櫻川驛へ下車したのは八時五十五分で、あと一時間と四十九分待たなければ乗合自動車は出ない。目的物はせいせい一里半位の所にあるのだから、待つてゐるうちには着くといふ見當をつけて歩き出した。少し寒い雪に日光があたりて随分美景であつた。西櫻谷村役場のある中在寺の部落から左折し、北脇の部落の中程から今度は右へ曲り、諸木神社に達した。目的の石燈は拜殿前の石段を昇り、本殿に向つて右手の末社の前の頗る窮屈なところにあつた。時に十時二十分。

此石燈は鎌倉末と見るべく、火袋は後補の様であつた(四〇)。

- 一、基礎。型の如く六角形で、側面には格狭間を入れ、上に蓮花瓣を刻す。
- 一、竿。三節あり、中節に珠文あり。

一、中臺。下端單瓣蓮花紋、側面は一邊を二區に等分してあるだけで文様なし、上端には極めて薄き繰出しあり。

一、火袋。火口は相對してゐる面にあけてあるが、正面と思はれる方は、上に縦横の盲連子、下に大格狭間を一個入れてある様だが判然しない。残りの五面は上に二重の斜十字を刻み、下は無地の様である。火口二所以外の四面は、圓相内に四佛の種子(キリクとアクとだけ漸くよめる様である)を線刻した様に見える。さうして其一面——正面火口の向つて右隣——は後に粗雑な圓い孔をあけて窓にしてある。

要するにたとひ火袋が當初のものであつても、圓相と梵字と圓窓とは後刻である。寧ろ火袋全部を後補と認めた方がよからう。

一、寶珠。寶珠には請花がある。請花には平安系統の美しい花瓣が彫刻してある。これは當初のもの。

昨年重美に指定されたが、假に重美に甲乙丙丁の四階級ありとすれば、これ等は丁種位のところだらう。

一通り見學を終つたのは十一時半頃であつた。H君の斡旋で村役場へより、折柄出勤して居られた助役さんにお願ひして、休憩して持參の辨當を開いた。この村には名物「櫻川餅」といふのがあり、一に羽二重餅とも乙女餅ともいふさうで、今焼いてゐますからお試しくださいとの助役さんの言に、此は近頃耳よりの話と大に喜んで賞美をした。十二時二十五分の車で中之郷迄、ここから徒歩約三十分の後大字川原の石燈のところに着いた。といふと何でもなく行けた様だが、實は川原といふ部落は道路の南側で、北側は杉といふ。其川原の部落への曲り角に國民學校の分教場がある。そこから折れて二三度曲ると川がある。此川に架けた橋を渡ると方一間寶形造の小堂がある。此堂を左に見て小徑を行くと左手に石段があるから、夫を登れば何でもなかったのに、H君は以前

雪のない時行つた経験から、右の辻堂の傍から斜面に積つてゐた雪——朝から誰一人歩かなかつたと見え、橋の上からまるで足跡がなかつた——を踏みながら上つたので、UもAも後からついて上つたところ、やがて竹藪の中へ突入して了つた。恐らく足元には一人やと歩ける位の途があるのだらうが、雪で一ぱいの上に、竹に積つた雪のため、とても歩けたものではないのを、H君先頭に立ちて勇敢に奮闘を続けながら、漸くにして廣いところへ出た。見ると左手に新しい堂がある。これは藥師堂といったさうだが、所屬不明なので妙樂寺に合併せしめたのださうである。此堂に向つて右手の大木の間に目的の石燈はあるにはあつたが、雪が一ぱいに積つてゐた(四一)のを、H君が拂ひ落してくれたので(四二)、ともかくも銘文が見えた。銘文は火袋の一面に二行に刻んであつた。

天氣はよくなつたが、浮雲が去來してゐたので、太陽は出たり引込んだりの

有様、幸ひ風はなかったが、手も足も先は切れさうであるし、大木の梢から粉の様な雪が落ちて来るため、まるで雪が降ってゐる如く、地上には一面に雪があり、物をおく場所もない様なところで、銘文の拓本をとったのは、我ながら洵に御苦勞様といひたくなつた。何も彼も全體としてすべて濕つて了ひ、其處置に少なからず困つた。ぬれてゐた拓本はH君の持つてゐた新聞紙を貰つて巻いて持歸る事にした。

此石燈はどういふ動機で見付かつたのかを尋ねたら、實は寶篋印塔を見に來たので、石燈なんかまるで知らなかつた。寶篋印塔（鎌倉時代と認められる可なり大きな立派なものだが、何分不完全でものにならぬ）の方は駄目でこの方がよかつたとH君は答へた。

一、基礎。平面圓形、側面無地、上端複瓣の蓮花文を刻す、形は非常によりしく意匠も亦珍らしい。

一、竿。三節あり、中節に珠紋を併列する事例の通り

一、中臺。圓形で上に極めて薄く六角形の繰出しがあり、側面はこの六角形の角に合せて六つに區劃してあり、その區劃内は無地。下端單瓣蓮花文。

一、火袋。火袋は六角形で相對する面に火口をつくり、残り四面の内の一面に銘文を刻す、曰く

應安二乙酉十月

願主比丘尼□□（二字）

火口の上部に横縦の盲連子を刻んである事前例の如く、下部には雙方共格狹間がある。

一、笠。六角形で蕨手あり。

一、寶珠。缺。今は寶珠形をした破片が笠の上にのせてある。

此も大したものではない。基礎と中臺とが何れも其平面圓形であるのは割合に珍らしいが、寶珠はないし、全體が揃つた一つものかどうか疑へば疑へる

し、若しUが重美の會議に列席したとして、其前にこれを実見してゐたなら、保留説を持出したかも知れないといつてゐた。

私はUのとつて來た拓本と寫眞と見せて貰つたが、銘は決して後刻とは思へないし、中臺の側面がいやに厚過ぎるが、これも別段こんなのがあつても不都合とは言へないし、ただ寶珠亡失が如何にも惜しいが、これは亡くなったのだから仕方がないとする、吉野時代即鎌倉末の石燈の一例を加へたことを喜ぶものであるが、Uのまねをして今年の眞夏の暑い日にでも出かけて、充分ゆつくりと觀察したく考へてゐる。(筆記者)

拓本を終り、寫眞をとつて了つても、まだ漸く二時十分。日野行河原發の最終の車は四時二十五分である。あと二時間と十五分をまさか藥師堂の階段に腰をかけて暮すこともできない。そこで先づ石の寶篋印塔を見、次に藥師堂の向拜を見た。向拜の中央にはとても素敵な墓股が入れてある。口を開けば人を擔ぐか、さもなくば辛辣骨を刺す様な警句を吐くA君は、初めから無氣味な笑ひ方をしてゐたが、これはきつとN君が圖だけ書いて渡したのを、田舎の大工が

判らずに造つたのに違ひないと明快な斷定を下した。HもUも此説に無條件で賛成をし、今度は雪の積つた笹のトンネルを避けて正面の石段を下り、川原部落の曲り角の國民學校分教場の小使室で、火にあたつて休憩するべくH君から話をつけて貰つた。

車はこの國民學校分教場の角からでる。つまりこの角が終點になつてゐるのだから、ここは正に最も好都合の休憩場であつた。時間は正確に守られ、先刻下車した中之郷から車が上つてきた。これにのつて中之郷迄、ここで乗換て日野町へ着いた。九日の宿は豫てH君が日野町のS屋といふのにきめておいてくれたが、何かの都合で先方から斷つてきたので、更に同町大字村井の眞樂院(シンギョウケン)といふ、甚だむづかしいよみ方の寺へ一泊する事になった。これは思はぬ幸で、寺へ泊るのの大すきなUは随分喜んで、大分うれしかったといつてゐた。

初めて日野町を歩いた。車庫前で下ろされてから寺迄十二三分かかったから、つまりその間だけ町を見た。非常に美しい町だ。殊に眼についたのは、ここに

街路禁煙

署 警察 署
團 防 團
青年 翼 賛 團
日野町 日野町 日野町

記した様なビラで、赤と黒と二色あり、五軒目に一軒位の割合で町の家の壁や戸にはつてある。其爲か煙草等啜へて歩いてゐるもの等なく、従つて巻煙草の吸殻等是一个

も落ちてゐなかつた。而も下の小文字は左横書なので一層氣に入つた。これこそあちこちの町で眞似したらどうか、其利益は述べる迄もない。愈よ此町がすきになつてしまつた。(七月の末には京都市でも見る様になつた)

併しながら往來で煙草を吸ふなといふのは、實は日野町が本家かどうか知らない。東京には既に大分以前から、あちこちに路上禁煙の札が出てゐるさうだ。其他はどこにあるか知らないが、大阪市には未だ見受けないとのことである。

これは一つ各都市で實行して貰ひ度いものと思ふ。これが實行されると、筆者の様に郊外電車へのる迄は何ともなく、下車してみたら僅に一枚しかもつてゐない外套の右腕の後ろに圓形の燒焦の孔をあけられる様なことはあるまい。煙草のみはいぢの汚いもので、車内禁煙は漸く實行してゐるやうだが、終點につく少し前になると、出入口の前に立つて巻煙草に火をつけ、マッチは床上へ捨てる。悪い癖だが中中直らない様である。車掌も見えて見ない振りをしてゐる。どつちもどつちである。これが街路禁煙が隨所で實行されたら、こんな事は自然なくなる筈である。善事は躊躇せずに即刻まねをしてはどうか。

眞樂院は日野町の東端から左程遠くなく、極靜かな町にあり、大寺で座敷も廣く室多く、案内されたのは最も奥の室、裏は人家なく川を距てて小高いところに對し、靜かであつた。ただ何分にも寒いので、雨戸を締め火鉢にかちりついた。久し振りで純米に精進料理、U君は大喜びで随分平げたと、後にA君

が話してくれた。

十日は一同七時に起きた。昨夜九時に就眠したのだから正に十時間。透き通る様ないい天気で寒い事も随分寒い。不圖庭を見たら一基の石燈籠があり、全體としては室町と見られる。基礎・竿・寶珠は室町で、中臺・火袋は新らしく、笠は稍可といふ所らしい。Hが一番先きへ飛び出し、次にAが見た。皆何も言はないので我輩が最後に出て行って、歸って皆の意見をきいたが、笑つてゐるばかりで埒がわからないから、仕方なしに考へを述べたら皆賛成をしたのはずい。起ぬけに室町燈籠は思はぬ儲物であつた上に、朝食は雑煮が出てきた。すましの雑煮で切餅の特等品が豊富に入つてゐたので、昨日は「櫻川餅」で今日は「日野餅」だから、此調子だと明日は「安土餅」だといつて、AもHも随分詰込み、最年長のUでさへ、兩人があきれる程食べたさうだ。まこにあきれた次第だと成蟲樓は考へる。

眞樂院から綿向神社迄は七八分位で近い。ほんとうは馬見岡綿向神社といふのださうで、縣社だが境内廣く社頭は森嚴の氣にみち、とても立派である。目的の石燈は社殿へ向つて右側、即ち東側に西向きにある。石を積んで小高くして、基礎のあたりには躑躅だか何だか、そんな種類の樹木を植ゑて、甚だぢぢむさくしてあり、窓には白紙をはりつめてあつた。紙が新しく破れてゐないところをみると、新年早早から燈火をつけたのかも知れない。

火袋の窓の一に紙の上から觸れて其輪郭を辿つてみたところ、どうも何だか「月」らしかった。其向ひは可なり大きな圓窓であるのが火口から知れたので、若し果してあれが「月」で、これを「日」とすると、今迄窓の日 月は室町かかと考へてゐたのが駄目になる。これは一つ何とかしなければならぬ、そこでH君を煩して神職へ紙破りのお願をして貰つた。丁度其時居られた神主さんは快諾をされ、直に破りかけてくださったので、我輩は一緒に手傳ひながら、

漸く一通り紙を除くことができた。見ると指先で紙の上から輪郭を辿った時の感覚は全くの誤り。盲人でないせゐか指頭の神経は大分鈍麻してゐるのであらう、夫は月ではなくて「散蓮花」であつた。而も此種のものとしては餘程古い型式のもの如く思はれた（四四）。

一體に此石燈はまことに逸品である。竿は割合に短く、火袋は大きく、頗る莊重である。河桁御河邊神社の延慶四年在銘のもの（滋賀縣神崎郡御國村神田）や、少し後れるが石部の常樂寺のの仲間である。鎌倉時代には竿の割合に長い、すらりとしたのと、反對に竿は短く従つて背は低いが、火袋の大きい奈良時代の直系と考へてもよさうなものと二種あつたと見られる。勿論其中間のもあつたから、さうすると三種ともいへよう。各部を別別に記してみると

- 一、基礎。六角形で上端に單瓣蓮花文（十六）を刻む。
- 一、竿。三節あり、中節に珠文を併列してあること型の如し。

一、中臺。下端單瓣蓮花文、側面は輪郭のみで無地。

一、火袋。六角で相對する面は火口、下に格狹間、火口の向つて左方の相對面は無地、火口の向つて右方の相對面は、一方が「圓窓」だが、此は割合に大圓窓であることに注意すべく（四三）、他方は既記の通り「散蓮花」である（四四・四八）。

一、笠。六角形で蕨手あり。

一、寶珠。受花なく、頂上部少しく缺損をしてはゐる様だが、形は割合によりしい。

といふ様な次第で、基礎より寶珠に至るまで當初の儘を存し、總高さ約六尺一寸。其割に大きく見える。

Uは此石燈が大分氣に入つたと見えて、先づこの種のでは最も意匠の働いてゐるのが河桁ので、次は高木神社（蒲生郡朝日野村大字岡本）の正和石燈、最も莊重雄大なの

が此。何れも蒲生郡所在である。「滋賀縣に於ける」では餘り大袈裟で不都合なら、少なくとも「蒲生郡に於ける鎌倉石燈の三幅對」といへるだらう。重美としても特等品とすべく、正に甲種一等だらう、國寶の價值は十分だといって、大分得意になってゐる様であつた。

十一時に眞樂院へ歸つてきた。早ひるを終り十二時三十分に車庫前から日野驛の車へのつた。寺から車庫迄十二分。今日歩いたうちで「街路禁煙」のビラのせゐるか、町は美しく效果正に百%、唯一つ吸殻が踏みつけてあつたのを見ただけであつた。日野驛前には回収されるべき寺の吊鐘が約三十ばかり竝べてあつた。時間があつたので一一點檢したが、何れも揃ひも揃つて駄物ばかり。此際慶長以後のものは特別の事情ない限り回収するとは、洵に一石二鳥の名案だと思ふ。只くれるといつても御免を蒙り度い様な醜惡な國辱的吊鐘は、梵鐘でも半鐘でも、此も同じく五十歩百歩の銅燈籠と共に、應召した方がどの位國

家の爲になるか知れない。何れ坊さんのいたづら書きだが、朱を以て池の間等に筆太に「劍トナリ彈丸トナリテ米英ヲ屠レ」とかいたのもあつたが、あの不様なみつともない形をして、これも負けず劣らずの拙い鐘樓からぶら下り、いつ迄も生恥をさらしてゐるよりか、回収されて鑄潰された方が、どの位役に立つか判らない。吊鐘ばかりではない、神社佛閣の拙い金銅燈籠も亦然りである。とはいふものの全部なくしてはいけない。此等のうちから代表的のもの若干を選出して後世に残す事が必要である。其選定と方法は當局に一任する事として、大部分は米英撃滅の材料の一部に使用した方がよささうである。

日野驛から八日市驛迄、更に八日市驛から新八日市驛迄徒歩、ここから近江八幡驛迄、此日は日曜日のせゐるか、超満員で座席なく、近江八幡驛から次の安土驛迄は辛うじて坐する事を得、更に總見寺迄驛から徒歩し、夕刻無事に着し、

新しくできた假本堂の傍の室にくつろぐことができた。此建築に就いての批評は遠慮しておく。何しろ新しいので心地はよろしい。小杉未醒氏の襖繪が異彩を放つてゐた。高見で南がひらいてゐるから景色としては申分はない。安土時代の徳川氏邸址に此建築を造つたのだとのこと。

此朝は好晴無風、寒氣頗る強かったが、晝頃から薄曇となり、午後は大曇り、此分では明日は雨か雪らしいとの事に評議一決をした。此日は電車中に合せて四十分立ち、總計一里半近くも歩いたせゐるか、昔の元氣はなくなつたと見え、住職松岡範宗師に暖き歓迎をして戴いたにも係らず、少しつかれたさうだ。Uも大分年をとり、若し生きてゐると昭和二十年には數へ年七十になるさうだから、その位の事は仕方があるまいと筆者は思つてゐる。

十一日朝起きて見たら何と夫は八時二十分であつた。前夜は二十二時に消燈して直に寢入つたのだから、正に十時間ねたので、若い人はとにかく、Uは年

甲斐もない話。夜中に雪が降り出し、續いて雨となり、朝は大分降つてゐた。十一日には豫て打合はしておいた通り、大阪から遠齋九郎翁が来る筈になつてゐたが、雨又は雪の時は中止といふ條件がついてゐた。何分我我の様な下じもの暮向きのものとは違ひ、身體髮膚の構造形式が特殊だから、雨や雪で濡れると破損する虞が多分にある。一度損傷を蒙るや、何分目下修理の材料が不自由なので、初めから敢て毀損せぬ様に常住坐臥深い注意を拂つて居られる。此日は到底見込はないとあきらめてゐた通り、遂に御來臨がなかった。

朝食には豊富に餅の入つた雑煮がでてきた。これはA君がH君を通じて所望したのではないさうで、これで完全に「安土餅」が天降つたのである。石燈籠見物行脚は、一名雜煮行脚となつた次第である。正午に近づくに従ひ、霧か靄のため妨げられてゐた展望は、晴れだして大分景色がよくなつて來たが、前日の夕刻迄あつた田畑の雪は全部とけてしまった。併し雨は歇みさうにないから、

三重塔や樓門の見學も懶しといふので、坐り込んで駄辯を弄してゐた。遠齋翁が見えたら、入れ替りにA君は京都H君は天津へ歸り、翌日H君はまた來る様に手筈がしてあつたのに、翁の來臨がなかつたのでA君だけ夕刻京都へ向け出發、H君はU一人では心元ないといふ様なところから、もう一泊するといふ事になった。

夕刻になって雨は漸く歇み、空は晴れて月が出た。天氣はよくなつたが今度は風が可なり吹きだした。新しい建築だが隙もる風で相當に寒かつた。今日は何もせず一日暮して了つた。

十二日の朝の天氣は申分がなく、南方の景色は滿點であつた。九時から塔と樓門との見物に出かけたが、夫は實に大變な風で寒かつた。溫度はどの位であつたか、寒暖計がないのではつきりしなかつたけれども、萬年筆のインクが氷

つて字が書けなかつたから、勿論零度以下であつたらう。

塔は普通の方三間三重で料枳三手先の本瓦葺であるが、初重中の間だけが墓股で、他は全部間料束であり、觀察が足りなかつたかも知れないが、肘木だけが謂はゆる唐様で——つまり下端と木口との區別がなくて圓弧の様な曲線から成り(三一)
(右下)——あとは全部和様といった有様であつた。其初重中の間の墓股は脚内に

東。吊鐘・鯢(?)・雲・浪

西。桐唐草

南。寶珠を中心とした唐草

北。牡丹唐草

の彫刻が入れてある。併しながら右の内殆んど完全に當初のものといへるのは東側ので、西側の桐と北側の牡丹とは何れも後補、南側のに至っては墓股全部

(輪郭)が新しくしてある。今から批評をしてみれば、西側と北側とは輪郭が残つてゐるのだから、桐や牡丹を復元せずに其儘とし、南側のは輪郭だけを新造して入れておけばよかつたと思ふ。桐も牡丹も半は想像だから價值は半分位で、あつてもなくてもといふよりは、寧ろ其ままにしておいた方がよかつたし、寶珠はあつて反て害があるだらう。こんなのを入れておくと、修理前には、この様なのがあつたのかも知れないと思ふから、反て人を迷はせる。

總じて墓股といふものは、兩脚の間に彫刻を入れる様になり、さうして其彫刻が可なり發達をしてからは、筆先の動かし方でどの様なのもできる。だからつい誰でもいたづらをしてみたくなる。噂によると此塔修理の監督技師は例の有名なKさんであつたさうだから、これ位のいたづらは朝食前であつたらう。復原すべき墓股を輪郭だけにしておけば無難であるのに、ついむづむづする腕のやり場に困つて、やりすぎて失敗した例はいくらもある。注意すべき事であ

る。今迄はとにかく、これから絶対にいけない。

扱てこの塔の初重四方中の間の墓股のうち、殆んど完全に當初の儘残つてゐる東側のは、頗る興味のある彫刻がしてあるから、左に夫を記してみよう。此は中央に吊鐘らしいものがある。其吊鐘らしいものにも何か文様があつた様だが、今は明瞭でない。其鐘の左右には、鯢か摩伽羅か何かその様なものが、頭を下に尾を上に向ひ合つてゐる、さうして左右で少し形を異にしてゐる。嘗て此塔を視察したA君は、若し中央が鐘なら、あれは蒲牢かも知れないといふ、如何にも尤もらしい事をいった。併し蒲牢といふのは龍の九子の内の一で、馬鹿に大きな聲を出す動物ださうだ。してみるとやはり親に似た龍の様な顔をしてゐて、角も生えてゐたし、前後肢も備へてゐたらう、夫は吊鐘の上についてゐる「龍頭」をみても判る筈である。ところが今の場合少しも龍の様なところはなく、肢はなく、鰭があり、尾は魚尾の様に二つに分れてゐるから、蒲牢

とは幾分の距離がある様である。而して其周圍は雲の様な浪の様なもので充たしてあるから、全體としては餘程變つたもの。

扉の八雙金物には古いのも新しいのもある様だし、古いといつても少しあぶない所もある。定規縁に打つてある四葉は何れも後補らしく、到底室町とは見られず、去りとてKさんの腕前とは到底考へられない、だから明治になる迄位の時に補加したものかも知れないが、何れにしても大して問題にはならない。

内部初重は來迎柱が二本あるのみで、上は折上小組格天井、須彌壇の上がまた折上小組格天井にしてある。だから全體としては二重折上小組格天井であるが、須彌壇上の折上の部分の、天井廻縁の下に少しばかり「あり壁」の様な部分がある。だから二重折上にしても普通の場合と異り、少しばかり寸がのびてゐる。餘り見受けぬ手法の様に思ふが、實は前に見てゐても、少したつと忘れて了ふから、時には珍らしいだの、他にない等と言つたり書いたりして大失敗

を演ずる。これは何といつても年のせゐで、自分では仕方がないとあきらめてゐるが、此場合もさうかも知れない。相輪は青銅で全部よろしい様である。

此塔は享徳二年に甲賀郡柏木村に建立したのを天正年間に移したさうである、さうして慶長九年の修理を経てゐる。此塔から石段を大分降ると樓門がある。これは元龜二年の創建で、天正にここへ移したといふ説がある。三間一戸の樓門で、中の間特に廣く、H君の話では兩脇の間と中の間との割合は一と二になつてゐる。だから正面と側面との比例は丁度四と二の割合になつてゐるとあつた。こんな例は餘り見受けない様である。

風は寒く鼻汁や涙が止め度もなく出るし、萬年筆は氷つて書けないのだから、風を引かないのが不思議な位。見學もこの邊でやめとし、天守址に向つた。途中寺歴代住職の墓地を一見した。墓標は江戸時代に屬するものみの如く、美的價值は大してなかつた。何れも「無縫塔」であつたが、此種の塔は印度の窠

堵波の變形と見るのが一番いい様である。朝鮮の浮屠が一轉するとこれになる。其墓地の入口の左手に小石標が立ってゐた。方六寸五分高約三尺の角碑で、嘗て大分縣國東郡の各所でみた様な、板碑を四角にした様なもので、其一面に年月日を、他の三面には上方に梵字、下方に文字を刻してある。文は

一面、永祿二十二月二日

其左、梵字(ア) 豪賢

其左、梵字(カ) 勝地藏

其左、梵字(オン) 辨天

とあるが、當初から其位置は動かしてないか、或はどこからか持って來たか、其邊は明らかでないし、又其目的もはっきり判らない。

信長の墓は二の丸址にある。ここから東方の本丸址に行く途に南面して石が立ち、其面に左の文字を刻す。

表面、護國駄都塙

裏面、天保十三年四月八日建立

表面のは大字で裏面のは小字で、殊に表面の文字は非常に大きい。「駄都塙」といふ文字はこれも亦餘り見ない。錫蘭嶋では塔を「ダガバ」(Dagaba)といふ。其ダガバといふのは、判り易くするため式で示すと

Dhatu + Garbha = Dagaba

であり、其各の文字は

Dhatu = Relic, Element

Garbha = Womb, Receptacle

であるといふ、辭書にはダガバの項に

A domeshaped monument, or shrine, built on a mound and containing sacred relics (Singhalese)

とある。さうすると「駄都塙」はダガバで、相當に興味のある文字である。自然石に近い様な石の面に刻したもので、形式としては平凡だが、かういふ點が面白いと思ふ。ところが其納めてある駄都は何か知らない。いつの事か忘れたが、私はこの寫眞をとった事がある。併し其場所も序に忘れて了った。だからここであつた事が若し今朝判つてゐたのだと、住職に尋ねておくのであつたが、住職は用事で他出された後で、もう今回は面會の機がないのできく事もできなかった。だから今でも駄都の正體が判らないのは遺憾である。

天守址でゆつくり休んだ、但しそれは風をよけたひだまりを撰んだ。風をよけると大變に暖い。本丸址も天守址も、漸く昨今礎石等をほり出したから、割合にはつきりして來たが、以前は一面に土で覆はれてゐたので、何も判らなかつたとH君は話してくれた。庫裏へ歸り早ひるをたべて安土發の汽車で一驛行つて近江八幡で下車した。行がけの駄賃に同町東漸寺の石燈をもう一つ見よう

といふ寸法であつた。

驛前を眞直に七八町位であつたか、省營の乗合自動車はあるが、先を争つてゐる迄の事はない。普通の脚力のものなら歩くがいい。道路の左手の大きな寺で學校の前だから直に判る。寺の門を入ると大きな圓錐體に刈込んだ榎の木が二本ある。實に大きくて目標になるから、寺の名を忘れたら榎の木のある寺といへば間違はあるまい。燈籠は裏庭の座敷の前の鉢前の傍にある。相不變躑躅か何か餘計なものが澤山に植ゑてあつて始末が悪い。殊に竿に年號を刻した文字のあるあたり、いち悪く曲りくねつた幹が邪魔をしてゐて、拓本をつくるのにいい加減やつかいであつた。H君の助力があつたから、拙い乍らもどうやら拓本がとれたので、獨りであつたら到底こんな寒い日には、すり物等思ひもよらなかつたらう。銘はどうやら竿の少なくとも中節以下に大分にある様だが、磨滅甚だしく、漸くにして年月日のあたりが稍やはつきりしてゐたので、そこ

だけとつてみた。

燈籠は不幸にして寄せ集めものであった。例により下から上に順に我輩の見
たところを話さう。逃げ道に至極都合のよかったことは、寒風吹きすすんで
たので、寒かった爲に見誤りがあるかも知れないといふのである。誰だつてあ
んな寒い日に、あんな見にくい所で見れば、いい加減にしくなるだらう。朝
安土で萬年筆のインクが氷った事は話したが、午後は拓本の水が氷つて了ひ、
紙を竿にはるのに困つた。水のたれたあとは夫なりに氷つて、そこだけはよく
墨汁がつかなかった。さうしてすり終つて剥がさうとしたら、氷りついて剥せ
ない。炭火を火箸で挟んでそばへ持つて行き、いきを吹かけて氷をとかしなが
ら剥す方法を考へたが、我輩が火を吹いて暖めると、H君が傍からそろそろと
剥すといった有様で、どうやら申譯的のすりものができた。

一、基礎。六角形、側面に格狹間、上端に反花

一、竿。三節ありて中節に珠文を併列す。銘文は中節以下にある。上節と
の間にはない様だが、はつきり判らない。銘文のうち

曆應元年 戊寅

十一月廿二日

だけはよめるが、十一月の「十」の字の上にも何か文字がありさうな、な
ささうな工合で、どうも判然しない。何にしる現在の状態では、到底銘文
全體の拓本等は思ひもよらない。さうして竿の方が基礎の上端より太いの
だから、それだけでもこの二つは寄せ集めといふ事が言へる。

一、中臺。蓮花型で側面なく、間瓣のある單瓣蓮花文を刻み、上端には薄い
線出しがある。

一、火袋。六角形で前後に火口ある以外は無地。笠の下端にはり込めた六角
形の部分より火袋の方が大きくて合はない。

一、笠。六角形で蕨手あり、軒口の下端に薄きくり出しあり（極）。笠下端のほり凹めは火袋より小さく、又笠は中臺より少し小さい（中臺一邊一尺、笠端の角から角迄一尺二寸）。

一、寶珠。請花あるも無地。

以上六つの部分中、中臺と竿とはよく、基礎は又別。笠と寶珠とはよくあつてゐるから、ことによつたら基礎・笠・寶珠は揃つてゐるのかも知れない。併しこの様な寄せ集めものでも、全體として曆應位でよささうに思はれる。現在總高さ六尺。建武五年八月二十八日曆應と改元されたのだから、銘文の十一月二十二日は正に曆應元年で不都合はない。これは古いといふだけで、銘文に非常な價值——金石文として——でもない以上、我輩は此石燈を重美にするのは考へものだと思ふ。

左、四〇。諸木神社石燈（昭和十八年一月九日）
右、四五。沙沙貴神社石燈（昭和十八年二月十六日）
諸木神社拜殿と本殿との間にある石階を上り、右手の末社の前、大木の間にある一基の石燈が即此。火袋は後補らしく且つ多少の變改がしてあるものの如くである。
沙沙貴神社石燈は惜しいことに笠が後補で、これは桃山か江戸初位と思はれる。兩圖共物差は曲尺の一尺。

